

# いせまじよ　～異世界 の魔女達の夜～

ジト民逆脚屋

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔女と呼ばれる女性達が陸海空を駆け巡り、雌雄を決する世界。  
その世界に起きた一つの事件のお話。

# 目次

おまけ	
没キヤラ集	1
砂漠の幼王	7
魔女は涙を見せない	17
“影渡り”	28
巫女	40
公国女	46
公国 鎌槌の魔女	
ナジェーリア・リトリア	56
同志軍曹 シルヴィア・クシャトロワ	
同志大尉 ボリス・カレンディット	65
神皇国 梓弓の巫女	72
天内菊代	92
鎌槌と梓弓	100
さて、どうしてそうなる？	109
過去の	116
帝国 サイレンの魔女	
ウルレイカ・ルーデルハイト	124
閑話	134
イングヒルト・クルーガー	141
三国合流	148
共和国 ガラスの魔女	

沼の魔女と普通の魔女	225
魔法の始祖	218
魔神の問い	209
それはどういう事なのか？	199
フレスアード・スレイファン	192
王国 ランプの魔女	186
さあ、話をしよう	178
リリーヤ・ブレーメイヤ	171
……！	165
ガラスの宮殿	157
ガラスの国	157
はっはっはっ、君、凄く撫で肩であるね	157

リユース・テュレイルとシルヴィア・ク	232
シャトロワ	242
魔の根底	250
魔の根底にあるもの	260
道化と騎士	269
カタリーナ・フィーベル	277
アビゲイル・フランシア	286
幕開け	296
魔導列車	303
思いは	311
白い町	319
世界の末端	319
世界の真実	319

それが真実なら

それは如何に

しかしそれなら

—

—

—

325

332

341



おまけ

## 没キヤラ集

フレデリカ・ガードルハイト

通り名? “聖堂の魔女”

所属国? 聖王都

魔導? 聖騎士式

都市国家 “聖王都” の象徴的魔女、外見はよくある重装女騎士。

宗教国家でもある聖王都産まれ、聖王都育ち、生粋の聖王都っ子で、聖王都から出た事は片手の指で数えられる程度しかない。

その為か、彼女の世界は聖王都で完結しており、所謂外いわゆるに対しては極めて排他的である。

しかし、それには例外があり、聖王都が国教としている “聖教” を信じる者に対しては極めて寛大となる。

つまり、テンプレのくっ殺要員。つまり、すぐ死ぬ噛ませ犬。

薄い本的展開? 体に何仕込んでるか解らない魔女や魔導師相手に、そんな事するバ

力はこの世界に居ない。

魔導は伝統と格式ある聖騎士式。

エーテルを用いて縫製された聖衣と鎧、魔法杖である盾と長剣を用いての堅実な戦いを得意としており、耐久力では全魔女中最硬である。

だが、肝心の“魔導”をこれしか知らない為、柔軟性に欠け、歩くアドリブの將軍や絶対砲撃主義の巫女、そういった少しズレた魔女や魔導師に対する勝率は低い。

「偉大なる聖教の教えに逆らうか。ならば、その悪しき魂を我が聖剣で浄化してくれ  
る！」

宗教とかくつそめんどいし、どうせ將軍が將軍節発動するので没。

アメリカ・ドロワ

通り名？ “糸の魔女”

所属国？ 連邦

魔導？ 占い師式

アイアムジャステイス、またお前かの連邦所属の魔女。外見は占い師風のアメリカン美女。

この世界でも新興国である連邦に所属しており、占術を用いた未来予知が得意。だ



が、ネームド級の魔女や魔導師相手の未来予知の精度は低く、非戦闘員。

理由は、本人のやる気の無さと魔導にある。

本人曰く、

「田舎の寂れた街角で神皇国製のポテチ食べながら、一般人相手に占い師やっていた。国家所属魔女とかマジ萎える」

別名「怠惰の魔女」の通りに、彼女は自分のペースを少しでも崩されるとやる気を完全に無くす。

彼女自身は寂れた田舎町の街角で、自由気ままに占い師をしていたし、していたかった。

だが、彼女の占いはよく当たると評判が評判を呼び、彼女をよく知らないお節介焼が、本人の知らぬところで国に推薦。

それを知った彼女は、他国に亡命しようとするが、煩雑な手続きと制約の多さから亡命を断念、好きに気の向いた時にだけ仕事をするという条件で国家所属魔女となった。

彼女にとって未来とは、「結果と過程が見えるアミダくじ」のようなものらしく、望む結果ホメに繋がる過程ホメを選んで引つ張って、望む結果ホメを望む形で引き寄せてくる。だが、上記の通りにネームド級の魔女や魔導師相手には精度は落ちる。

占いは当たっているのだが、相手は道理や理を千切っては投げ千切っては投げする様

な連中なので、引き寄せた未来を普通に無かった事にしてくる。つまり、結果的に当たってない事になる。

ちなみに、当初はこの自由な扱いに反発があったが、その担当官にとって“良くない未来”を黙って引き寄せてきたので、黙認された。

その担当官は今なにをしているのか不明である。

ちよつとどころじやなく扱い辛いし、本編での連邦の扱いも決まってないので、現状は没キャラ。

上記のフレデリカよりは本編登場の可能性は高い。

イネルバ・ランチェスター

通り名？ “色彩の魔女”

所属国？ 無し

魔導？ 古式魔導式

共和国建国妃であるテレジア・デイトトリツシュが、まだ生まれ変わりの祝福呪いを授かる前、ただのテレジア・デイトトリツシュだった頃に存在した魔女。

まだ本編の国が出来る以前の時代に生きていた為、所属国は無し。使う“魔導”もどちらかと言えば“魔法”に近い。

色から連想されるものを扱う事が出来、自身のエーテルを混ぜて作った塗料を塗るなり撒くなりして、赤なら火、黄なら雷、等々を発生させる。弱点は塗料から発生させる途中でなら、彼女の「魔導」に介入出来るという事。赤ならケチャップ、黄ならマスタードと、「リトリア」の姓を持つ少女の偶然の介入によって、現在の帝国領内に当たる森がケチャップとマスタードの海に沈む事になった。

また、その時に「クシャトロワ」という姓も確認されている。

「まったく、このガキンちよは。テレジア！ また、あの村のガキが入り込んで来てたよー！」

過去編をやるつもりはないし、將軍の先祖はやっぱ將軍だったので没。

崇司史乃たかつかさしの

通り名？無し

所属国？神皇国

魔導？特には無し

神皇国所属の魔導師。神皇国では天内に並ぶ良家なのだが、どこかの同志軍曹の様に魔導師としての才能に恵まれなかったが、魔導研究者としての才能に恵まれた変態。

大概の論文や資料に名前が載っている変態。

どこかの同志軍曹に一目惚れして猛烈アタックを画策するも、彼女と「清い交際」をするには公国空戦魔導部隊「バーバヤーガ」全員を無傷で撃墜した上で、將軍とか少將とかの頭おかしいのを相手して納得させて勝てたら、「清い交際」が出来るという裏ルールがあり、彼女が一生独り身である事が決定していたりする。頑張れ、同志軍曹。ちなみに、「清い交際」をする事が出来るのであって、その次のステップへ進むには、対策やらなんやらを講じて準備をした上記の戦力をもう一回相手しなくてはならない。超頑張れ、同志軍曹。

「存在に罅入れられた位で怯む私ではありません！ クシャトロワ軍曹への愛が私の本体！・・・あ、なんですか、その針は？ え？ なんて、手術着？ あれあれ？

何故に私の頭を固定しようと・・・」

味付けが濃くなり過ぎる可能性が出てきた為、ロボトミー没☆

## 砂漠の幼王

豪華な一室、そこにある天蓋付きの寝台に眠る影が二つあった。

大小二つの内、小さい影がまだ夜闇の残る朝に起き上がる。透き通る様に薄いシーツをはだけると、シーツの海から濃い肌色の手が伸びる。

「王よ、お風邪を引きます。どうか、こちらへ」

小さな、幼い身をシーツの海に浮かぶ己の身へと引き寄せる。砂漠の国である王国の朝と夜は、冬国の公国と比肩しうる程に寒い。

闇に横たわる魔女は、己が主を母猫が仔猫を暖める様に、赤毛の少年を抱き寄せた。

「フレスアード」

「我が王よ、どうかご自愛を」

褐色の柔肉に、赤毛が沈み込む。

柔らかな肌を、緩く抱き留めれば、淡い体温が伝わってくる。

「せっかく、早くに目が覚めたのだ。朝焼けが見たいのだがな」

「では、御召し替えを」

赤毛の少年を抱いたフレスアードの、肉厚で形の良い唇が言葉を紡ぐと、どこか浮世

離れした従者が現れ、その手に持つ衣服に少年を着替えさせようとする。

「よい、自分で着替える」

少年は従者から衣服を受け取ると、薄絹の寝間着を着替える。

「我が王」

「フレスアード、そなたと二人の時だけは、余の好きにさせよ」

「御意に」

少年の見る先には、砂漠と石造りの町並みを、朱色に染める太陽が顔を出し始めていた。

これから、あの朱色が輝きを増せば、こうして太陽を見る事は出来ない。今、この僅かな時間のみ、王国では太陽を見る事が出来る。

少年は、すぐ背後に立つフレスアードの身に己の手を這わせ、長身の彼女を見上げる。

「フレスアード、我が魔女よ。余はこの国を守れるだろうか？」

「我が王、この国を守れるのは貴方の他に有り得ませぬ」

フレスアードが、少年の疑問を即座に否定するが、少年は昇り始めた太陽に目を細めて、吐息と共に言った。

「フレスアード、余は未熟な王だ。身も心も、なにもかも未熟だ」

少年は向き直り、フレスアードを真っ直ぐに見据える。

柔らかな褐色の身、己を庇護する王国最強の魔女、フレスアード・スレイファン。

彼女には、幾度となく窮地を救われた。彼女が一度物語を紡ぎ語れば万夫不当の軍勢が現れ、己は何もせずとも驚異は取り払われる。

今もそうだ。この閨にも、フレスアードの魔導の軍勢は潜んでいる。

そして

『我が問いに答えた人間が未熟とは、中々に面白い事を言う』

「『魔神』様」

それらすら凌駕する圧倒的な存在『魔神』も、彼女と共に在る。

守られてばかりのお飾り。少年は、王としての己をそう判断する。

だが

『我が問いに答えたという事は、お主以外にこの国の王は務まらぬという事だ。我が魔

女の主よ』

『魔神』の声はフレスアードが持つ長杖から響く。

この世界各地で語られる存在『魔神』、その一柱の言葉。

その言葉が指す問いに、己は偶々答えたに過ぎないのではないか。

少年は赤毛に朱色を写し俯いた。

「我が王」

「フレスアード」

声と共に、頭を抱き寄せられる。

暖かで柔らかい重さが頭に乗った。

「我が王、自信をお持ちください。貴方様だからこそ、私共は身命を捧げているのです」

少年、砂漠の幼王は俯き沈黙したまま、己を撫でるフレスアードの手と言葉を受け入れていく。

「我が王、砂漠の幼王、未熟でいいではありませんか。未熟なれば、それは先があると  
いう事、つまりは王国に未来があるという事」

フレスアードは一度身を離し、幼王に視線を合わせる。

己よりもずっと低い頭身、しかし未だ成長を続けるその心身、王に選定された時は頼り無くあどけなかつた彼が、今や己と「魔神」だけでなく、王国の民草が認める王となりつつある。

王国は多民族国家、多数の民族や部族が権勢を求めて、この砂漠に犄<sup>ひじ</sup>めき合っている。そして、それは王の基準が其々に違うという事だ。

「我が幼王、不安が御座いませば、このフレスアードに。私は、貴方様の全てを受け入れます」



凜とした、切れ長の瞳が一瞬歪み、しかしその歪みを見せまいと、幼王はフレスアードの身に顔を埋め隠す。それは涙を溢すのを見られたくない、幼き心故の意地なのだろう。薄絹に染みた湿りが、僅かにフレスアードの身を濡らした。

「余は、…『僕』は、王になんてなりたくなかった」

「はい」

「村で皆と一緒に暮らしたかった」

「存じております」

「友達と一緒に遊びたかった」

「それで御座いましょう」

「でも、僕が王にならなくちゃ、村が国が枯れちゃう」

「我が王」

「フレスアード、…：怖いよ。僕が間違えたら、村だけじゃなくて、色んな部族や民族が死ぬんだ。僕を恨んで死ぬんだ。一人や二人じゃない。百人や二百人でもない。もつと、数えきれない人達が死ぬんだ」

怖いよ。震える身で、少年は己にしがみつき身を沈めながら、内心の恐怖を語り部に吐き出していく。

フレスアードは、そんな少年をただ受け入れた。

「我が王、どうか、そのお心の恐怖を吐き出してください。私だけは、貴方様の恐れを全て受け入れましょう」

「嫌だ、怖いよ、フレスアード、皆が僕を責めるんだ……」

「王よ、貴方様の正しきは私を含め、諸侯は皆理解しております。貴方様は決して、西の部族が吹聴する愚王などではありませんぬ」

少年の政策は、今はまだ芽を出していないが、近い将来、彼が成人の儀を迎える頃には、この幼王は賢王と称えられている事に違いない。

それだけの才が、彼にはあるのだ。

フレスアードは、少年の顔に手を這わせ、額に己の額を合わせた。

そして、両の目伏せて彼女は彼にだけ聞こえる声で、言い聞かせる様に語った。

「王、我が幼王、私は貴方様の恐れを全て受け入れ、私共が貴方様を間違えさせませぬ。貴方様は御自身の正しさを信じ、もし仮に過ちを犯したならば、私共が貴方様を咎め正しましょう」

「僕は、王でいいいの?」

「我ら砂漠の民は盟約の民、*“魔神”*様の問いに答えた貴方様を疑う者は居ませぬ」  
岩すら焼き潰す苛酷な環境に生きる砂漠の民は、盟約を重んじる。

砂漠の王国の王は*“魔神”*の問いに、確かと答えなければなる事は出来ない。

武王と称えられた先代王が倒れ、次代の候補が「魔神」の問いに挑んだが、誰一人として確かと答える事は出来ず、元老達が頭を抱えた時、今よりも幼い彼がただ一人「魔神」の問いに答えた。

「…フレスアード、ありがとう」

「これも私めの役目、お気になさらず」

「…僕は、…余は決めた」

王はフレスアードの額から己の額を離し、顔横にあつた手を握る。小さな手を長い手指に絡ませ、彼は凜とした目で正面に見える水晶の様な双眸を見据えた。

「余はそなたを正室として娶る」

「はい?」

「フレスアード、余は本気だ。余には今はまだ種が無いが、種が出来た時は迷わず、そなたを孕ませる」

「わ、我が王よ、私は「魔神」様の魔女、いかに我が王の言葉とは言え、それは…」  
『いいのではないか?』

「ま、「魔神」様!」

長杖から響く重い声に、フレスアードは思わず目を剥き、長杖の先端にあるランプを見た。

そこから響く声には、喜悅の響きがあった。

『我が魔女と我が魔女の主の子となれば、この国も安泰であろう？　くくく、鎌槌のに報せてやりたいものだ』

「『魔神』様、私はただの魔女。王のお胤を頂くには、少々身分が…」

『それは私の格が低いという事になるぞ？　我が魔女よ』

「う……」

今思い付く限りで、確実に断れる策が一瞬で破れた。確かに自分は、王国の象徴である『魔神』を使役する魔女だ。しかし、その自分の身分は高くない。

王国は身分社会、元は王室の側女兼任の魔女に過ぎず、使役魔導と幻燈魔導が、他の魔女よりも少し得意なだけだった。

だが、先代の魔女が『魔神』との盟約を終え、次代に自分を指名した。

何故かは分からない。彼女はそれを教える前に、王国を去ったから。

しかし、自分が跡継ぎになる時は荒れた。先王から寵愛を受けていた部類であり、その自分が王国の象徴となる魔女になるのだ。荒れぬ訳が無かった。

だが、魔女の跡継ぎを決めるのは先代と『魔神』、そこに他者が介入する余地は無い。他者は黙るしかなかった。

「しかし、私は…」

「フレスアード、余はそなた以外は嫌だ」

『くくく、覚悟を決めろよ、我が魔女』

「うむう……」

フレスアードは唸る。困った。確かに、自分は王の夜伽も勤めだ。

そこには、幼い王に「女」を教えるというものも含まれている。

しかし、それは側女としてであり、正室という国家に関わる身分になるのは、気の迷いに近い気がする。

だが、目の前の王は本気だ。本気で自分を正室に迎えようとしている。

このままでは、王室に余計な確執が生まれる可能性がある。

フレスアードは、苦し紛れに一つの提案を出した。

「では、我が王。こうしましょう。貴方様が成人の儀を終えた日に、今日の事を覚えておられたならば、私は貴方様の妻となり、お子を孕みましょう」

「言ったな、フレスアード。余は確かに聞いたぞ。余は絶対に忘れない。そなたを必ず正室に迎える」

待っている。幼王はフレスアードに抱き着き、顔を見上げる。と、そこで幼王は首を傾げる。

「時にフレスアード、子はどうやって成すのだ？ そなたが余の胤を飲めば、子が出来

るのか？」

凜とした王の瞳に幼き心を宿して、少年は魔女に問うた。  
「そのお話はまたの機会に、今日はここまで」

王の僅かに乱れた衣服を正して、幻燈の魔女は微笑んだ。

## 魔女は涙を見せない

曇天というには、青空の見える公国の空の下、銀の髪が鼻歌を歌いながら長閑な町を歩いていた。

気楽な様子で白のコートを靡かせ、口の端に挟んだパイプから紫煙を燻らせる一人の魔女が、その歩みを止める。

「やあ、どうかしたのかね？」

大通りのその人だからというには、人数の少ないその中の一人に、魔女は問い掛ける。  
「ああ、これだよ」

問い掛けられた男が指し示した窓には、『店主急病の為、本日閉店』の文字が、紙に手書きで貼り出されていた。

魔女はその貼り紙を見て、目を見開いた。

「これは？」

「店主が急病らしくて、今日は閉店らしい……って」

「ふむ、それは困った」

魔女は心底困った様子で、紫煙を吐く。

魔女の前には公国の首都、その大通りでも指折りの名店であり魔女はその常連であった。

「さて、どうしたものか」

「し、將軍?!」

「ふむ? 私がナジェーリア・リトリアであるよ」

帽子の位置を直し、笑顔で名を告げる。

黒く、よく手入れされ磨かれたパイプが眩しく光を反射している。

「うわ! マジの將軍だ!」

「はっはっはっ、同志諸君。ご機嫌如何かね? 私は勿論良いとも」

口の端にパイプを噛み、白い歯を見せて笑うナジェーリア。だが、パイプから伸びる煙が(ハ、ハ)の形を取り、ナジェーリア自身も肩を落とした。

「久々の休日、ペリメニとヴォートカと共に朝日を迎え、この店のパンケーキを、楽しみにしていたのだがね?」

喫茶店に貼られた貼り紙を見ながら、ナジェーリアは紫煙を燻らし考える。

ここのシロップを並々とかけたパンケーキを、久々の休日に楽しみにしていたのだが、店主急病で閉店。

休日の予定が崩れていく音が聞こえるが、この程度で止まるナジェーリアではない。



「仕方あるまい。作るか」

言うや否や、ナジエーリアは店から足を動かし、市場へと向かう。

將軍やら歩くアドリブやら呼ばれようが、これでも見た目二十代のアラフィフ未亡人、料理は出来る。

パンケーキの材料を次々と手に取り、市場を進む。

「このシロップはやはり、蜂蜜よりはメープルであるね」

普段なら蜂蜜なのだが、今回はあの店のパンケーキの真似。知っている限りの情報は拘りたい。

なので、ナジエーリアは蜂蜜ではなくメープルシロップを手取るが、どうにも気に入らない。

「うむ?」

市場の店先に並ぶ小瓶を、次々と見ては置いてを繰り返し、並ぶ小瓶の九割を越えた時、漸くお眼鏡に敵う代物を見付けたようだ。

「これである」

店主に支払いを済ませ、ナジエーリアは市場を後にする。

公国独特の、乾いた冷たい風が白いコートを揺らす。

パイプから燻る紫煙が風に乗れり、巻き上げられた落ち葉と共に飛んで消えた。

「冷えるね。…村を思い出す」

軽く身震いし息を吐けば、紫煙とは違う白い蒸気が大気に融けた。

思えば、来るところまで来たものだと、ナジェーリアは口の端を吊り上げる。

ナジェーリア・リトリアの出自は、謎が多く彼女自身、問われてもはぐらかして語らない。

しかし、「リトリア」という姓の貴族や良家は、公国には存在しない事から、平民からの出とする者や、隠された家系の出であるとするとする者すらいる。だが、そのどれもが確証の無いものだ。しかし、一つだけ確かな事がある。

ある日突然、ナジェーリア・リトリアの名は軍に登録され、瞬く間に公国最強の魔女となった。

これだけは、間違いない事実である。

「おやっ…」

思考の海に沈み始めたナジェーリアの耳に、聞き慣れた喧騒が届いた。荒くれ者の多い前線では、この喧騒は日常茶飯事であった。

「喧嘩であるか…！」

口の端を吊り上げながらも、どこか暗く沈んだ表情から一転、祭りに遊びに行く子供のような表情を浮かべ、軽い足取りで人だかりへと向かう。

パンケーキの材料が入った紙袋は、口を「槌」で密閉しておく。

帰ってから、この喧嘩を肴に、厚切りベーコンと目玉焼きのパンケーキを食べる為だ。  
ー同志大尉に見られたら、怒られるねー

十年以上の付き合いとなる部下、ナジェーリアが一番信頼しているボリスは、規律に厳しく喧嘩を肴に酒を呑んでいたら、すぐに仲裁されて酒を没収された。

堅物と揶揄される事もある彼だが、緩めるところは緩め、無視するべき規律は「密かに」無視する事を平然と行い、部下達からの評価と信頼は高い。

なので、喧嘩もいき過ぎなければ仲裁しない。

ナジェーリアは、ボリスが影に潜んでいないかを確認し、通りに並んでいた出店で発泡酒の小瓶を購入、栓を「刈り取り」一口呑む。

「はっはっはっ、喧嘩を肴に昼から呑む酒は沁みるね。同志諸君」

「なんだ、なんだ、將軍じゃないか」

「おお、同志ナディア。君も休日かね？」

公国人の大男同士の喧嘩を見物する人だかりの中に、ナジェーリアの部下であり酒呑み仲間のナディア・イヴェノヴァが私服姿で立っていた。

「いやいや、私は早上がりさ。一番下のチビが熱出したって、学校から連絡が来てね」

「…迎えかね？」

「さつき、さつき、病院で葉貰つて、家のベッドに括り付けたとこさ。んで、今は晩飯の買い物帰り」

「…そうであるか。しかし、一番下というと、五男だったかね?」

「残念、残念、七女さ。イヴェノヴァ家は、代々多産の家系でね」

東部訛りの大男の拳が相手の顎を打ち抜き、その打撃に周囲が沸き立つ。中々に熱狂しているが、警官隊が数人待機しているので、いき過ぎる事は無いだろう。

「なんだい?　なんだい?　もう行くのかい?」

「はっはっはっ、私を厚切りベーコンと目玉焼きのパンケーキが呼んでいるのだよ」  
発泡酒の小瓶をナディアに手渡し、ナジェーリアは喧騒から背を向ける。

ナディアはその背中を見つつ、渡された小瓶に目を向ける。中身は殆ど減っていない。

「参った、参ったね。妙なスイッチ入ってたか?　いや、入ったのか?」

喧嘩の決着を背で聞きながら、ナディアは手渡された温い発泡酒を一息に飲み干した。

「さて、さてと、どうしたもんか?　…子供の話は避けるべきだったか」

ナディアが酒精の匂いのする息を吐いて、雲が多くなり始めた曇天を見上げた。



「折角、休日であつたが、まったくままならぬものである」

帽子を落とし、コートを椅子に引つ掛けると、そのままソファーに横たわる。

見上げる天井は、嘗て夫と娘の二人と共に見上げたもの。天井だけではない。床も壁も、紙袋が乗るテーブルにコートを引つ掛けた椅子も、己が横たわるソファーも、何もかもが当時のまま、嘗てのリトリア家のままだ。

「アレクセイ、タチナヤ。私は……」

細い手指を伸ばし、空を掴む。己の「鎌」が届かぬ場所は無い。己の「槌」が押し砕けぬものは無い。

その筈だったのに、結局は届かず押し砕けず、大事なものは全て目の前で消え去り、そして

「満代、今の私を君は、どう言うかね？」

唯一無二と言える親友すら喪つた。

思考だけでなく、体も何か深く冷たいものに沈み込む錯覚。このまま身を任せて眠つてしまおう。明日の朝に基地に居なければ、ボリスか誰かが迎えに来るか、探しに来るだろう。

ナジェーリアがゆっくりと瞼を落とし、眠りに沈もうとすると、控え目な音がドアから聞こえる。

「むっ？」

来客は珍しいが、出る気にはならない。また控え目に音が鳴るが、それだけだ。

『あれ？ あれえ？』

聞き覚えのある声が聞こえる。

『なにを、なにを、やってんだい？』

『ナディア中尉、将軍が出ません』

『同志軍曹、ノックだけでなく、呼ばないと将軍は出てこないぞ』

聞き覚えがあり聞き慣れた声、他にも多数それが聞こえる。

『つかさ、将軍帰ってんの？ 酒場は？』

『さつき見てきたけど、将軍の気配は無し』

騒がしい。これでは眠れない。

ナジェーリアは身を起こし、気怠そうにドアに向かう。

『よっーしゃー、シルヴィア。もっーかいーだ！』

『少尉、お菓子食べないで下さいよ』

ナジェーリア声の重なるドアを開く。だが、開いたドアは完全には開ききらず、僅かな衝突音と手応えに止まる。

一体何かとナジェーリアが隙間を覗くと、見覚えのある癖毛が額を押さえしやがみ込

んでいた。

「い、痛い……」

「同志、軍曹？」

「はい、シルヴィア・クシャトロワ軍曹です」

少し赤くなった額を擦りながら、シルヴィアが立ち上がる。僅かに涙目の彼女は、ドアから覗くナジェーリアを見ると、実に気の抜けた笑顔を浮かべた。

「ナディア中尉から、將軍がサブライズパンケーキパーティーを計画していると聞いて、先制サブライズです……！」

鼻を鳴らすシルヴィアに、ナジェーリアが珍しく呆気に取られていると、少し離れたナディアが笑っているのが見えた。

「……って、あれ？ 違いました？」

「……ククク、私とした事が、悪戯がバレてしまうとはね」

頭一つ分低い彼女が、不安そうにこちらを見上げる。

ナジェーリアが額に手を当て笑い、いつの間にか手にしていたパイプを口に噛む。

「同志諸君、パンケーキを焼くのはいいが、材料はあるのかね？」

「バッチリ、バッチリさ」

ナディアの声に、隊員達が思い思いの材料を詰めた袋を掲げる。



ナジェーリアは、それを見てまた笑んだ。

「では、公国魔導部隊『バーバヤーガ』のパンケーキパーティー開始である！ 諸君、準備し給え……！」

宣言する身は、もう何にも沈んでいない。

## “影渡り”

公国第909空戦魔導部隊「バーバヤーガ」所属ボリス・カレンディットには、とある秘密がある。

「む、売り切れか？」

色とりどりの装丁が施された本が、ところ狭しと並ぶ書架に作者作品名ごとに規則的に並べられた空間。

書店に、ボリス・カレンディットは居た。

「ここもか。あまり名の売れた作者ではなかつたのだが……」

いつの間にやら、名が売れたのか。

ボリスは声に出す事無く、言葉を口の中で転がし、唇を固く結んだ。

この店にも、目当ての作品が無いと解り、嘆息した後店内から出る。

冷やかしかと、年老いた店主に眇を向けられたが、本来ある筈の場所を空白にしている方が悪いと、視線を無視して休日の町並みを歩く。

「……たまには遠出をと町に出てみれば、寂れたものだな」

本来、今時分の頃は買い物客で賑わっている筈の市場。だが、ボリスが歩く市場に人

は疎らで、店先に並ぶ商品も少ない。

「と、……何か」

それだけではなく、扉を釘で打ち付けた店やシャッターの降りた店が多い。

一体何があつたのか。ボリスは漸く見つけた開店しているカフェに入り、軽食のセツトを注文、町行く人々を観察する。

——身形は悪くないが、妙に疲れている様にも見えるな——

町行く人々には、特筆して不自然な点は見当たらない。強いて言うなら、疲れて見える。ただ、それだけだ。

——景気が良くないのか？——

公国という国は広大だ。この世界最大の大陸、その半分近くが公国の領土となる。その広大さ故にか、末端や辺境となると、政府の目が届かない地方が出てくる。

その為、国境沿いや険しい山間部等の辺境に位置する地方には、国の代わりに領地を治める領主が存在する。

長く貴族社会が続いた公国と帝国、大小様々な部属の集合国家の王国。この三国のみ、この領主制度が続いている。

平民出身のボリスとしては、貴族社会の厄介さは身に染みて理解している。

今はマシにはなった様だが、ボリスの時代の仕官学校は酷かった。元貴族の次男や三

男、所謂後継ぎにはなれない者達が、家名に物言わせて幅を効かせていた。

平民出身者は、貴族に従うのが当然。

そんな空気が蔓延していた。

「お客さん、旅行ですか？」

「まあ、そんなものです」

店主が軽食を持って、ボリスに話し掛けてきた。

「びつくりする程、何も無いでしょう？」

「ええ、流石に驚きました」

柔和な笑顔を浮かべる店主の顔に、影が差した。

なにか気に障る事を言ってしまったかと、ボリスが眉をひそめると、店主は何も言わずに質素な内容のプレートを置いて店の奥に去っていった。

「なんだ、一体？」

ボリスは、いつの間にか騒がしくなっていた一つ向こうの通りから、嫌な予感を感じつつ、軽食のサンドイッチを片付け、代金を払い店を後にする。味は、非常に質素だった。

「町の規模は小さくない。寧ろ、大きい方だ」

仮に、町の経済が困窮しているなら、それは領地を治める領主の責任であり、悪質が

過ぎる様なら、政府から代わりとなる執政官が派遣される手筈になっている。

公国は広大だが、人の住めぬ凍土が多い。出来る限り、税収は減らしたくないのだ。

しかし、この町の有り様はゴーストタウン一步手前、この辺境の町に何が起きているのか。

——疫病？ 飢饉？ そんな報告は聞いていない——

“バーバヤーガ”は空戦魔導部隊とは言え、平時は災害救助や避難物資の輸送も任務に入る。

そして、その任務の事務処理を一手に引き受けている少尉と軍曹の二人が、そんな報告漏れをするとは考え難い。

ボリスが思案を続け歩いていると、突如腕を掴まれ、路地裏へと引き摺り込まれ、即座の行動を取った。

路地裏は狭いが、ボリスには関係無い。路地裏という場所は、大体が何かの“影”にある。

“影渡り”であるボリスは、引き摺り込まれる強くない力のまま“影”に潜り、己を引き摺り込んだ者の背後に出る。

突然、“影”の中に人間が消えた事に驚いたのか、それとも己の喉に当てられている冷たい感触を恐れているのか。

ボリスは袖に隠していたナイフを、襲撃者の首に当て、その細い腕を捻り拘束した。

「何者だ？」

「あ、あの、怪しい者じゃなくて、その……！」

背丈はあるが、声が幼い。薄暗い路地裏、そこに潜む襲撃者は、子供だった。

「なんのつもりだ？」

「い、いきなり、引つ張つたのは謝るから！ だから、離して！ 痛いから！」

あまりに叫ぶので、ボリスが仕方なくナイフを仕舞い、腕を離すと、子供は極められていた腕を振りながら、ボリスを睨み付けた。

「助けてやったのに腕極めるとか、なんだよあんた」

「それはこちらの台詞なのだが、助けたとはなにからだ？」

「あんた、本当に知らないのか？ つか、余所者か」

子供の要領を得ない言葉に、首を傾げていると、通りがにわかに騒がしくなっていた。

「なんだ一体？」

「あれだよあれ、クソ領主と中央から来た執政官」

「……どういう意味だ？」

「この町を、こんなにした奴ら。中央の目が届かないから、好き放題やってんだ」

ボリスが路地裏から通りを窺うと、見て分かる程に仕立てが良く、装飾品を山と着

飾った集団があつた。

「……俺は、いつの間にフィクションの世界に迷い込んだ？」

「うん、言いたい事は解るけど、これ現実」

ボリスは頭痛を覚えた。

よくある中世ファンタジーによく居る、悪徳領主と執政官とその取り巻き。それが視界に居て、よくある行動を取っていたからだ。

ボリスは平民出身で軍人で現実主義者だ。上官が時たまファンタジーだが、アレは現実が生み出した質の悪いファンタジーだとして納得している。

だが、目の前の集団。アレはちよつと、頂けない。

「まさかだが、書類改竄が得意で賄賂で出世、中央に仲間が居て、多少のボロは揉み消している、か？」

「おじさん、見たくないだろうけど、アレがこの町の現実なんだよ」

「ぬう……」

唸り、眉間を揉みほぐしていると、甲高い悲鳴が聞こえてきた。

「姉さん！」

「待て、出るな」

「離せよ！ 姉さんが！」

ボリスが先程居たカフェから、一人の女が引き摺り出され、連れ去られていく。

「落ち着け。今行つても、姉妹揃つて連れて行かれるだけだ」

「だからつて！」

連れ去られていく女の妹を押しえ付け、ボリスは集団の顔を頭に焼き付けていく。

身のこなし、身に着けている装備、警護は素人に等しいと判断。数人魔導師は居る様

だが、軍人崩れがいいとこだろう。

「はあ、休みだったのだから……」

ボリスは嘆息し、念話を開いた。

(ヘルガ・ハーヴィツコ少尉、調べてほしい事がある)

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

暗い夜道に、倒れた人影があった。

「おい、どうし……！」

警備係が駆け寄るが、服の襟からの打撃に呼吸を断たれ、声を発する事無く倒れ伏す。



有り得ない箇所からの攻撃と呼吸困難に、警備係は喉を押さえて苦しむ。

「装備だけのこけおどしか」

警備係は、薄れいく意識の中聞いたのは、そんな感情を感じさせない声だった。

「休みに仕事とは、神皇国の人間でもあるまいに」

声の主は姿無く、屋敷の敷地に声だけが落ちた。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「あれ？ ヘルガ少尉」

「おう、シルヴィア軍曹、残り業かー」

「ヘルガ少尉こそ、いつも定時に帰るのに」

目に隈のある長髪の女、ヘルガ・ハーヴィツコが菓子を口に放り込み、シルヴィアに

一束の資料を手渡す。

「なんですこれ？」

「読みめばー、解るー」



「お前は一体……」

「何者かは答えんし、貴様らには関係無い話だ」

ボリスの装備は大型ナイフと軍支給の制音拳銃のみ。相手が三流以下の魔導師崩れだとしても、守りを固められれば、それを突破するのは不可能に近い。

だが、対峙する二人の周辺には、幾人もの魔導師や警備係が倒れ伏していた。

「せっかくの休日、返してほしいものだな」

「官警か？」

「そう思うなら、そう思っておけ」

言うなり、対峙する魔導師のローブが切り裂かれる。

魔導師は慌てて距離を取るが、ボリスはその場から動いていない。

急ぎ反撃に移ろうと、魔導師が手に風を集めようと、エーテルを抽出しようとするが、違和感に気付く。

「三流が。見せすぎだ」

「な、にを……」

魔導師の魔導は右腕とその周囲を起点とする。

鎌鼬を発生させる単純なものだが、それ故に対人能力は高く、野良の魔導師よりも上だった。

だが、今回の相手はボリス・カレンディット。

「影渡り」の魔導師、公国最強魔導師空戦部隊「バーバヤーガ」のNo. 2。魔導師の右腕は切り落とされていた。

「影渡り、か……！」

「知識だけは、一人前か」

起点となる右腕を失い、しかし魔導が使えない訳ではない。

残る左腕を振るい、鎌鼬を発生させようとするが、ボリスが足元の影に向けて制音拳銃の引き金を二回引く。

「あ、が！」

「一応、殺しはしない。まあ、死んだら済まん」

ボリスが足元の影に撃ち込んだ銃弾は、魔導師のロープの影から彼の左腕を撃ち抜いた。

失血と痛みから、気を失った魔導師を脇に見ながら、ボリスは嘆息する。

「後は、官警の仕事か。英雄願望は物語の中だけでいい」

「貴方は？」

「ただの客だ」

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

質素な室内に、鍛え上げられた肉体を持つ男が椅子に座り、文庫のページを捲る。

「サンドイツチのセットです」

「ああ、有難う」

質素なサンドイツチを手に取り、一口かじる。見た目と同じ、質素な味が口に広がる。

「何を、読んでるんですか？」

「ん？ ああ、ただの冒険記だ」

「公国第909空戦魔導師部隊『バーバヤーガ』所属ボリス・カレンディットには秘密がある。」

「冒険記ですか？」

「ああ、誰もが嘗て読んだ事のある、な」

『影渡り』の魔導師、実は彼は子供向け冒険小説が好きだったりする。

## 巫女

「さて、ナジエーリア。何か申し開きはありますの？」

「はて、何かあったかね？」

問えば、何とも雑な惚けが返ってくる。さて、どうしてくれよう。

パイプを燻らせるナジエーリアが、紫煙を吐きながら、思案する満代を見る。

「ふむ、ストレスの溜めすぎはよくないよ？」

「ふふ、ナジエーリア。原因がよく言いましたね？」

テーブルに目を向ければ、己の皿から楽しみにしていた水菓子が消えている。

かなり高値で、漸く手に入れた。なので、一人で楽しもうと、許嫁も居ない日を見計

らって、冷蔵庫から出してきたのだ。

なのに、一体何処から嗅ぎ付けてきたのか。数少ない高級水菓子を半分奪われ、そし

て目を離した際に最後の一つが消えていた。

「ナジエーリア？ 私、この店は鼻屑にしていますの？」

「はっはっはっ、確かにそうだったね」

「……ナジエーリア、この水菓子、かなりの高級品ですよ」

「……ふむ、確かに味、見た目共に納得であったね」

じりじりと距離を詰める。ここで逃がせば、正直な話、かなり面倒だ。同盟国で友好国の公国、そこで重要なポストに就くネームド魔女であるナジェーリア。そして、神皇国の巫女代表である自分。かち合えば、必然的に政治的な判断が下る。政治的な判断を抜きにしても、彼女の『鎌』による加速は厄介だ。

「ふふふ、どうしたんですの？ 鎌なんて抜いて」

「はっはっはっ、満代こそ、火輪日輪を構えてどうしたというのだね？」

脇に抱える様にして構えた薙刀、火輪日輪。神皇国が奉る太陽神の御遣いを預かる天内家に、代々伝わる魔法杖であり、その姿は受け継ぐ巫女に最も適した姿となる。

……個人的に薙刀より弓がよかったが、これも神の思し召しと納得している。

「ふふふ、言った方がいいのかしら？」

「はっはっはっ、満代。……話せば解る」

解らないので、薙刀で横薙ぎにした。距離、タイミング、全てがナジェーリアの防御を断てる一撃。だが、手応えに違和感がある。

堅く重く、厚い。見ればナジェーリアに刃は届いておらず、その体まで後数十cmというところで、虚空に止まっている。

押し込もうにも刃が通らず、柄が僅かに軋む。

「……また、妙な使い方を」

「いや、普通に振っただけで、私の『槌』をここまで断つのはやめてほしいのだがね？」  
薄く、満代とナジエーリアのエーテルがぶつかり合い、薄くナジエーリアの槌が姿を見せていた。槌頭を半ばまで断たれたそれは、断たれながらも確かに薙刀を止めていた。

「ナジエーリア、私は巫女ですよ」

「なら、私は將軍であるよ」

薙刀が振り抜かれた。槌を構成するエーテル圧を弛めた覚えは無い。単純に押しつけた。あのリーリヤの斧鉞すら止めるナジエーリアの槌が、斧鉞よりも薄く脆い薙刀に負けたのだ。

——まったく、勘弁してほしいね……！——

即座に事前に伸ばしていた鎌で、己を部屋から窓の外へと『引き寄せる』。

加速という言葉が生温く感じる程の速度で、満代から距離を取る。巫女から距離を取るのには、大体に於いて自殺行為だが、対満代で恐ろしいのは薙刀の切れ味と、主砲の威力と異常なまでの精度だ。

数十km先の的を、mm単位の精度で撃ち抜くのが満代の一撃だが、ある一定の距離があれば、ナジエーリアなら槌と鎌で逸らせる。



「だがこれは……!」

一発一発を逸らすだけで、槌が罅割れ、鎌が砕けていく。

重さは無い。だが、確実にこちらを砕き、削ってくる。神皇国の夜空の中に身を翻し、高度を上げる。

「まったく、水菓子一つでこれかね?」

なら、こちらはこうである。

手にした槌で、眼下の空間を打撃した。瞬間、空間が軋みを上げて、幾条かの光弾を遮った。

槌の圧砕による空間固定、殴り付け砕かず押し固める。ナジエーリアを公国最強の魔女に至らしめている一つが、この空間固定による防御能力だ。

軍帽を鎌を持った片手で押さえ、軋む空間を更に殴り付け、満代が居るであろう空にぶつける。しかし、手応えが無い。

怪訝に思ったナジエーリアが眉根を寄せた時、ナジエーリアを大きく弾き飛ばす光弾が直撃した。

「ナジエーリア、油断ですわね」

「……しまったね。ここが神皇国だという事を失念していたよ」

「さて、ナジエーリア。何か申し開きがありますの?」

「はて、何かあったかね？」

背後の夜空に立っていた満代が、薙刀を振り抜く。

固定空間だけでなく、槌をぶつけるが、威力を抑えきれず弾かれる。

「ははは、落ち着き給えよ。……満子<sup>まんこ</sup>」

「ナジェーリア！」

魔女同士の剣戟だ。薙刀を刃だけでなく石突きまで使い、舞う様にしてナジェーリアを追い詰めていき、ナジェーリアが振るう鎌と槌がそれに抗う。

「また、また人の名前を間違えましたのね?! 満子、満子って……!」

「はっはっはっ、満代。あまり連呼しないでくれ。恥ずかしいではないか」

「この……!」

夜空に舞う花吹雪の様に、剣戟の中をエーテルが碎け、削れ、散っていく。

鎌を降り下ろし、〃刈り取り〃の刃を放った時、満代の姿がナジェーリアの視界から消えた。

「またであるか! 今日によく使うね!」

「それだけ頭に来ている、という事ですわ!」

薙刀が頭上から打ち下ろされ、ナジェーリアは鎌で己を引き寄せ、それを回避する。

だが、その先に門が開く音を立てて、満代が姿を表していた。

「神皇国が太陽神の開門神話、その再現。まったく厄介極まりないね……！」  
「天内系列の社、その門は全て私の門ですわ。それにこれは由緒正しき技、貴女の鎌とは違いますの……！」

神皇国は世界的に見ても有数の開門神話を持つ国だ。太陽神が扱いに不満を持ち、光漏らさぬ岩戸の中へと姿を消し、世が闇に覆われた。

その時に岩戸を開く祝詞を挙げ神楽を捧げ、太陽神を岩戸から外へと再び出したとされるのが、神話に語られる初代天内家の巫女だ。

満代が行っているのは、その再現。天内の名を刻んだ社の門を開き、己と対象の位置を繋げる。

開門という、違う場所と場所繋げる行為を拡大解釈し、行われる技は、満代以外には使えない。

何故なら、門を開くには鍵となる火輪日輪と、天内の血が必要となる。

「水菓子の仇……！」

「はっはっはっ、……赦せ、満子」

「喧しー！」

槌の防御も鎌の刈り取りも意味を為さず、ナジエーリアが撃墜された。

## 公国女

一枚、やけに色鮮やかに色とりどりの紙が一枚、彼女の手にあつた。

「今年も、もうそんな季節ですのね」

開け放つた窓からは、突き刺すような強い陽射しと、喧しい程に蝉の鳴き声が鳴り響いていた。

菊代は、テーブルの上に置いてあつた、雑誌を手に取り、二つ折りになつたページを開く。

「あら、ビキニ特集ですの」

ページを開き見れば、中々に派手な柄の上下や、これは色々と不味いのではないかと、疑いたくなる様な角度と布面積の水着が、モデルと共に載っている。

母の跡を継ぎ、神皇国の巫女代表となつて数年。こういった衣装を身に纏つて、遊ぶという事は無かつた。最近は何事も無く、こうして丸一日、何もせずのんびりと過ごせる日も増えてきた。

手にした雑誌と、テーブルの上のチラシ。その何れもが、夏の到来を報せている。

ふと、空いた手で額を拭えば、僅かに汗の湿りを感じた。夏とは言え、その盛りには

程遠く、部屋に吹き入れる風も、蒸し暑さではなく涼しさを運んでいる。

しかし、暑さを感じないという訳ではない。その証拠が、額の汗ばみだ。

さて、どうするか。エアコンを使ってもいいのだが、菊代自身があまりエアコンの風を好かない。だが、暑さも好きではない。

作られた涼しさか、自然の暑さか。菊代が頭を悩ませていると、ふと気になる事が頭を過った。

——おば様、どうしているのでしょうか？——

隣国最強の魔女にして、菊代の後見人でもある変人。あのナジェーリア・リトリアが、この夏にどう過ごしているのか。

神皇国と公国の緯度は殆ど変わらず、彼女の住まいがある土地は、地理的にもそう離れてはいない。この国と同じ様に、季節は夏だ。

公国の夏が、どんな季節なのか。菊代は知らない。菊代は神皇国から出た事が無い。母が生きていた頃は、菊代はまだ今より幼く、母も忙しく海外旅行に行く様な暇は無かった。だからか、いきなり現れるナジェーリアが、手土産と共に持ち込んでくるキレツな話が、楽しみで仕方が無かった。

今、菊代は天内家の当主となり、事実上神皇国の巫女の代表となった。家の者や、母の代から仕えてくれている者達のお陰で、国内の日帰り旅行程度なら、無理無く行ける

様になった。

だがそれも、今だけの事だろう。神皇国、天内家の巫女は、世界の裁定者を任ずる。

これは魔女という、単体で強大な存在を有する世界が、その力で壊れない様に、太陽神という強大なエーテル生物から、加護を与えられる神皇国が、その役割を背負う。遙か太古に決められた約定だ。

天内菊代はその巫女の代表。今は力不足だが、何時かは世界中の魔女魔導師を相手取り、その全てを下さねばならない。

「遊んでいる暇は無い、でしょうけど……」

それでも、あの稀代の変人が今どうしているのか。何か企んでいないか。気になり始めれば、どうにもならない。

「物は試し、ですわね」

カタログを片手に、菊代は受話器を空いた手で取る。

つい最近まで、公国は帝国と争っていたが、今は終戦している。あの四角い顔の大尉からも、今は大分落ち着いていると、報せが届いてもいる。

『はい、はい、こちら、代理のナディア・イヴエノヴァ中尉』

「イヴエノヴァ中尉ですの？」

『ああ、ああ、今日は将軍も大尉も、視察で留守さ。何か用かい、天内の巫女』

「少し、おば様と話をしたくて。来週ですけど、予定に空きはありそうですの？」

『来週、来週か。確か真ん中辺りで休暇を取つてた筈だ。将軍に伝えておくさ』

「宜しく願いますわ」

何か用事があつても、自分の名前を出せば、何を置いても来てくれる。そんな確信にも似た甘えがある。

そんな自分に情けなさを覚えつつ、快活に笑うナジエーリアの姿を思い出す。

ささやかな悪戯にあの人は、またあの時の様に笑つてくれるだろうか。

そんな思いを胸に、菊代は電話のダイヤルを再度回した。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

ナジエーリア・リトリアは、その日久方ぶりに上機嫌と言える感情の中に居た。

小煩い政治家や、いまだに嘗ての榮華にすがる貴族。どれもナジエーリアの嫌う者し

がなく、ナジェーリアを

嫌う者しかない。

正直な話、煩わしきから全て吹き飛ばしてやろうかと、そんな不穏な考えを巡らせていた時だった。

大事な、もう一人の娘と言っても過言ではない、親友の忘れ形見である菊代から、何やら休日誘いがあつた。

“將軍”という立場さえ無ければ、一も二もなく飛び出して、菊代の元へ向かつただろう。あの子は母の立場を継ぎ、周囲にも信頼出来る者が居るとはいえ、まだまだ子供だ。軽んじられる事も多々あるだろう。

だが、友好国の重鎮である自分が、彼女の元へ赴けば、あの子を軽んじる声も小さくなる筈だ。

「随分、随分とご機嫌だな？」

「はっはっはっ、同志ナディア。あの菊代からの誘いであるよ？　機嫌が悪くなる理由が無いね」

「それは、それは良かったな」

彼女の部下であり、酒飲み仲間でもあるナディア。あの“降星事変”以来、彼女はどうにも不安定で、帝国との講和でも、ちよつとした事が原因で取り乱し、結局は紛争が



最近まで続いてしまった。

まあそれも、あちらの紛争が終わっては困る連中が、仕掛けた道化の仕業だったが、怒り狂った鎌槌の魔女が帝国の首都の目の前まで迫るとは、考えが至らなかつたのか。この時代最強クラスの魔女を舐めすぎだと、ナディアは憐れんだものだった。

「さて、同志ナディア。夏の神皇国は久方ぶりなのだが、これ程に暑かつたかね？」

「暑い、暑いと思うなら、その上着を脱いだらどうだ？」

「……では、屋内ではそうしよう」

「古い、古い女だな」

まったく、「公国の古き良き女」のままだ。ナディアは公国の夏用軍服の上着を肩に掛け、隣のナジャーリアを見る。

天内の屋敷に入り、いつもの白いコートは脱いでいるが、軍帽に軍服を隙無く着込み、彼女だけ冬のまままで止まっているのではと、疑いたくもなる。

「ふむ、涼しいね」

「もう少し、もう少し緩めても、バチは当たらんぞ？」

「あまり、はしたない事を言うものではないよ？」

案内は無いが、長い廊下でも進む道が解る。恐らく、この屋敷自体に施された魔導の効果だ。

侵入者はそのまま外へ、客人は客間へ、その様に足を向けさせる。抵抗は出来るが、意味は無い。

導かれるまま、足を運び、辿り着いた部屋の扉を開く。

「お待ちしてましたわ」

「……おい、おいおい、マジか」

ナディアはウエーブ掛かった髪を掻きながら、現状を整理しようと、部屋で待ち受けていた菊代を見る。

母親譲りの長く美しい黒髪、高いエーテル適性とナジェーリアには及ばないが、他を圧倒する内燃エーテル量。そして、それらを扱い、形にする確かな技量。

実力者であるナディアすら、霞みかねない紛れもない天才。

その才媛が、何故か水着姿で出迎えている。

さて、どうしたものか。大体の予想はつく。希に、ナディアやナジェーリア、実力者であり顔の売れている魔女に、広告塔の仕事が舞い込んでくる事がある。今の菊代の状態も、恐らくそれだろう。

「あの、どうかしましたの？」

「ああ、ああ、ちよつと待て」

だが、今はこれがまずい。水着姿、これが最大の地雷だ。

ちらと、隣に立つナジェーリアに目をやる。何も動きが無いのは、受け入れているからか、事態に追い付いていないからか。

「……菊代」

「将軍、将軍、落ち着けよ。あんたも知ってる筈だ」

「それとこれとは別である。菊代、何であるか？ その破廉恥極まりない格好は……！」  
「ええ……」

神皇国の新鋭メーカーによる、新作水着の試着。その対価に、新作を幾つか分けてもらい、あまり露出をしている場面を見た事の無いナジェーリアに、少しばかりのドツキリをと、そう画策していたのだが、この反応は少し予想外だった。

「肩に背中、足まで、しかも、へ、臍まで丸出しではないか！ ああ、私は何と満代に申し開きをすれば……！」

巫女？ 『あの、イヴェノヴァ中尉？』

鉄鎖？ 『ああ、ああ、そうだったか。知らなかったか。公国には、水着で泳ぐという文化がほぼ無い訳だ』

巫女？ 『つまり、初めての異文化交流ですのね』

鉄鎖？ 『やつぱり、やつぱりお前は満代の娘だな。まあ、万年凍土の国で露出する』

死が、日常の公国人は基本肌を晒さない。屋内で半袖かドレスで肩出しが限度か？」

巫女？ 『そこで私が、臍出しナマ足ビキニかました、と』

鉄鎖？ 『まあ、まあ、今となつては割りと風化し始めてる文化だ。ここまで反応するのは、この將軍くらいさ。公国女が肌を見せるのは、愛した相手のみつてのを、いまだに守り続けてる』

巫女？ 『つまり、お婆様は古いという事ですのね』

鉄鎖？ 『お前、お前、本当に満代の娘だな』

「菊代、話は終わっていないよ？」

「お婆様？ 今は少し時代が変わりましたの」

「菊代、時代が変わっても変わらぬものもあるのだよ？」

「お婆様、それでも行き過ぎはよくありませんわ」

じりじりと、距離を詰めつつ、互いに有利な距離を保とうとしている二人を見ながら、ナディアは懐かしさを思い出す。

嘗て、あんな風にふざけていた二人が居て、その周りで自分達が囃し立てて、たまにやり過ぎて満代に全員撃墜される。

今は満代が居なくなり、周りも半数以上が居なくなつた。だが、ナジーリアが居て、

自分が居て、満代の娘の菊代が居る。

「ふ、ふは……!」

それが嬉しくて、思わず笑いが溢れた。

「む、同志ナディア。笑ってないで、この解らず娘に何か言つてやつてくれ給え!」

「お婆様こそ! 時代遅れの魔女になりますわよ!」

「はいはい、はいはい、なら着てみればいいだろうに。ここでなら私らしか見てないさ」

「ぬう、同志ナディア。君まで……!」

あの頃の様には、もう無理だろう。自分達も老いて、衰えていく。だが、今はこうしていられる。

「將軍、將軍、ものは経験つて言うだろう? ……それとも、菊代の希なワガママを聞か

ずに帰るか?」

「うぬぬ、……仕方あるまい」

「フッフ、お婆様。これが時代の流れですわ」

「菊代、菊代、お前も露出の激しいのはやめてやれな」

「降星事変」も生き抜き、紛争も終わった。何が起るのか分からない、それが世界だ。

だが今だけは、嘗ての日々を思い出す事を許してほしい。

## 公国 鎌槌の魔女

## ナジェーリア・リトリア

どうにもならぬ事はどうにもならぬ。

それが世界の真実であり真理であると、記憶の彼方にある某かが言っていた気がするが、誠にその通りであると思う。

言われてみれば、どうにもならぬと言うのだから、どうにもならぬ。それが自力であろうが他力であろうが、どれ程に懇願しようがどうにもならぬのだ。

話に聞く禅問答の様な一文であるな。

しかし、それも事実である。

元の木阿弥と言う言葉は違うな。後悔先に立たずと言う言葉が合っている気がする。ならば、どうにもならぬ様にならぬ為に行動したのかと問われれば、その答えは是である。

しかし、それも主観的であり、客観的に見れば私は何もしていなかったのだろう。

だが、そう、だ。だ。

努力は認められると、記憶の果てにある某かが説いていた気がする。そして、誠にそ

うであつてほしいと思う。

私ができるにもならぬ様に努力していた事は事実であり、その努力に対する仕打ちが  
これ”とは、世というものは誠に狭量ではないかと、私は思うのだよ。

「將軍」

「…解つているとも。同志大尉」

まったく、実にまったく、世とは狭量である。

私は一仕事終えて、自宅に帰り、手製のペリメニを着にヴォート力を飲み明かし、来  
るべき輝かしく愛しい休暇の日々、その朝日を迎えたい。

ただ、それだけだったのだよ。

それだけ、その細やかな楽しみを望んだだけであつたのに、

「なあ、同志大尉」

「なりません將軍」

「まだ何も言つてないではないか」

「何時からの付き合いだと？」

「…かれこれ、十年になるかね？」

「十三年目になります」

ふむ、この四角い顔のとても優秀な副官と出会い、もう十三年が経つのか。

年を取るものである。もう四十も半ばが見えてきた。

「…良いですか、將軍。今回の“これ”は軍令部からの指令です。たとえば將軍と言えど、これを無視すれば」

「命令違反、私を疎ましく思っている他の將軍に弱味を握られる、かね？」

「仰る通りです。銃殺刑まではいかないでしょうが、それでもです」

「しかしだな、同志大尉。私の様な鎌と槌を振るうしか能の無い中年女、何をそこまでするのかね？」

「將軍。その“鎌と槌を振るうしか能の無い中年女”に勝てる“魔女”が我が国には居ないのです」

「国威高揚のつもりかね？」

だとすれば、見当違いも程があるというものであるな。

私の様な中年女よりも、部下の若いハリツヤのある魔女達に“これ”をさせた方が、よほど効果があると思うのだからね。

しかし、我が優秀なる副官にそれを言えば、また小言が対空機関銃の弾幕の如く振り撒かれるだろう。

それは避けたい。我が優秀なる副官は、優秀なのだがたまに小言が五月蠅いのが瑕であるが。



ふむ、しかし、戦場で敵の魔女と剣戟を結んでいる最中でも小言を言え、その小言に救われたのも一度や二度ではない。やはり、私の副官は優秀であるな。

「国威高揚、まさしくその通りです」

「戦争好きは結構だが、私の様な年寄りを酷使しないでもらいたいものだ」

四十路の半ばが近くなって年下の、生きの良い若い魔女達を相手に空中戦をするのは、中々に体に響くのだよ。

最近では東欧の、あの『喧しい悪魔のサイレンを吹き鳴らす魔女』の相手が辛くて仕方がない。

誰か替わってくれないかと思うが、私と私の部隊以外では悲惨な結果に終わっているから無理であろうな。

ふと、自分の腰のベルトに通してある『鎌と槌』を撫でてみた。

よく研がれ、よく磨かれた二本。魔女となり軍に入り三十年以上、私と共に空を駆けて何百何千と命を奪ってきた得物だ。

私は、魔女はろくな死に方はしない。当然である。

「將軍、そろそろお時間です」

「解っているとも、同志大尉」

魔女というものは、大量殺戮兵器である。人間の体のままに空を駆けて、おおよそそ

れを実現出来ぬであろう得物でそれを実現する。それが魔女だ。

血肉を、臓物を撒き散らし死ぬ。それが魔女の避けられぬ最期である。だからこそ……

ふむ、いかん、年を取るものではないな。

つい、感傷的になってしまう。

「將軍？」

「なに、気にする事はない。一服する時間はあるのだろうか？ 同志大尉」

長年愛用するパイプに刻んだ煙草葉を詰め、火を入れる。

渋味と苦味、僅かな甘味と辛味。重要なのは味ではなく香りである。

独特の香りを纏った煙を肺へと送り満たした後、口内へと戻し舌の上で転がし、空へと吐き出す。

ああ、いかな。ここは室内であった。空へと消えさせてやる事が出来ん。

「同志大尉、昔の話だ。娘がな、私と同じ魔女になると言い出した事があったのだよ」

「それは……」

「4つの頃だ。私は初めて娘に手をあげてしまったよ。夫も大層驚いていた」

「將軍」

「ああ、そうだと。娘が私と同じ魔女になるなぞ、認められるものではない」

「……將軍、灰をこちらへ。お時間です」

「すまん、同志大尉」

パイプの灰を差し出された灰皿へと落とす。

まだ燃焼しきっていない葉もあつたが、時間ならば仕方あるまい。

嗚呼、まったくもつてどうにもならぬ事はどうにもならぬ。

私は仕事終わりの休暇を楽しみにしているだけの、ただの中年女に過ぎないのに、身分不相応な立場に立ち部下に恵まれ、「鎌槌の魔女」と呼ばれるに至つた。

「時に、同志大尉。君は理解しているかね？」

「何をでしよう？」

「民衆達が『何』を喜んでいいのか。そして、それを理解出来ているのかだよ」

車窓の外、私が乗る車を見て歓喜の声を上げる民衆達が見えるが、君達は理解しているかね？

自分達が『何』を喜び、『何』を讃えているのか。

「簡単な話であるよ。民衆が喜び讃えているのは、ただの大量殺戮兵器なのだよ」

鎌で刈り取り、槌で叩き潰す。

ただただひたすらに、それを繰り返して生き延びてきた。

「百に千に方に殺しに殺し、その果ての一つが私であるよ」

ちらりと車窓の外へ目をやると、子供が眩しい笑顔でこちらへ手を振っているのが見えた。

嗚呼、やめてくれ給え。

その目を、その顔を、その手を、こちらへ向けなくてくれ給え。

それらは、もつと輝かしいものへと向けてくれ給え。

君達の輝かしいその笑顔はもつと、素晴らしいものへと向けられるべきなのだ。

「將軍、着きました」

「ああ、そのようだな」

「…將軍」

「どうかしたかね？ 同志大尉」

「差し出がましい事を言いますが…」

珍しい事もあるものだ。あの優秀なる副官が言い淀むとは、何時以来か？

「カルドロン大橋の攻防戦」での退却進言だったか。

「ふむ、言ってみるといい」

「…では、貴官は殺戮兵器などではありません。一人の人間ですよ。隊長」

「……………」

「隊長」か。これまた、懐かしい呼び名であるな。

私が一部隊の臨時指揮官であった頃の呼び名だ。

「ク、ククク、そうか。そうであったな。私はどこまで往こうと私でしかない。鎌槌の魔女 ナジエーリア・リトリア“だ”」

「その通りです。將軍」

「感謝である。同志大尉」

さて、往こうか。

私の楽しみである休暇を妨げる愚か者達の元へ。

私は「鎌槌の魔女 ナジエーリア・リトリア」、祖国に齒向かう者を刈り取り叩き潰す者である。

「しかし、同志大尉。私はイブニングドレスを、この歳で着ることになるとは思わなかったぞ?」

「申し訳ありません。上層部からの指示がありました」

「構わぬよ。このドレスは君の趣味から外れていそうであるからな」

「將軍……!」

「ハハハ、許し給えよ」

同志軍曹の様な男好きのする肉感的な身体はしてないが、体型には気を使っているの  
でね。まだイケるのではないかね?

「さて、我が祖国の老人達のご機嫌を伺うとしよう」

「ご武運を」

これが終われば、冷えたヴォートカと温かいペリメニが私を待っているのだ。  
少々、気合を入れて掛かろうか。

## 同志軍曹 シルヴィア・クシヤトロワ

私は「シルヴィア・クシヤトロワ」公国の第909空戦魔導部隊「バーバヤーガ」に所属する軍曹です。

実は私が部隊では、一番階級が下になります。そして、公国第909空戦魔導部隊「バーバヤーガ」、*「鎌槌の魔女」*と恐れられるナジェーリア・リトリア将軍が率いる所謂エリート部隊に所属しています。

……何故、私がこの部隊に所属しているのか？

自分で言うのも難ですが、私は特にこれといって秀でたものがある訳ではなく、エーテル適性も並のいたって普通の魔女です。

他の人達は適性や操作技術等秀でたものがありますが、私はいたって平均的。

部隊のお荷物と呼ばれても、なんら不思議ではない私が何故にこの部隊に所属しているのか。

それは、我らが将軍によるスカウトでした。

士官学校時代、私は分かりやすい落ちこぼれで、そういったイジメの対象でした。

あの日もそうでした。軍から学校への視察が入る日、どうせ、碌に何も出来ないだろ

うと、私は食堂へ押し込まれていました。

私はこれでも、炊事係としては認められていましたから、視察に来た士官の方々を出迎える為のお茶を淹れていました。

何も無い、普段通りの日。そう思っていました。

お茶とお茶菓子を用意している最中に教官に呼び出され、私は一度食堂を離れていました。そして、食堂へと戻る途中、食堂で起きた事を知ったのです。

視察の休憩時間に士官の方々が食堂でお茶を飲んでる最中、一人の士官が突如として副官を伴い席を立ったというのです。そしてその方が飲んでいたお茶は、私が淹れたものでした。

だからどうしたとも言えませんが、他の人達は私が淹れたお茶が不味かったから士官の不評を買ったと、私に詰め寄ってきました。

私は何も弁解する事も出来ず、懲罰房へ入る事が決定しました。

暗く冷たい石造りの懲罰房、他人よりも体力に劣っていた私では、この厳しい冬の懲罰房で一晩過ごす事は難しいだろう。

そう思い、諦めかけていた時でした。

「ふむ、ここに居たのかね」

将軍に出会ったのは。



「見たまえ、同志大尉。彼女だろっ？」

「は、その通りです」

話に聞いていた通りに、將軍はイメージ通りだった。

公国の冬に吹き抜ける吹雪の様な銀髪に、口許には緩やかな笑みとパイプがあり、細い身体からは想像も着かない程のエーテル密度。

その場に居た全員が將軍に釘付けになっていました。

「將軍閣下」

私を懲罰房へ入れようとしていた一人が將軍に話し掛けるが、肝心の將軍は私を見ながら何かを呟き話を聞いている気配はありません。

隣に立つボリス大尉も溜め息混じりに、將軍の奇行を見ていました。

「ふむ、同志大尉。逸材だ」

「では、準備を」

「うむ、是非にでも進めてくれ給え」

何分程か経った辺りで、將軍は突然ボリス大尉へと振り向き何かの準備を進める様に言いました。

一体、何が起きて何の準備を進めるのか？

私は今、自分が置かれている状況が理解出来ていませんでした。

あの言葉を聞くまでは。

「時に同志シルヴィア・クシャトロワ。私が着いたテーブル、その茶を淹れたのは君で間違い無いかね？」

「は、はい！ そ、そうだと思います！」

「ふむふむ、成る程」

將軍の問いに、今までに無い速度で敬礼して答えると、一層笑みを深めて紫煙を燻らせていました。

周囲の人達は完全に硬直して、冷や汗を流していました。

「將軍」

「準備が出来たのかね？ 同志大尉」

「申し訳ありません。リーリヤ少将に感付かれました」

「となると、彼奴めも彼女狙いか」

「恐らくは」

「いかん、いかんぞ同志大尉。彼奴に彼女を渡す訳にはいかん」

「ご心配無く、既に彼女の配属先は決定しております」

私の知らぬ間にあれよあれよと進む話、ナジェーリア將軍と並ぶ魔女でもある「リーリヤ・ブレーメイヤ少将」の名前が出てきて更に場は混乱を見せます。

それも当然です。士官学校の落ちこぼれ、魔女家系でもない、ただの士官候補生を公国の英雄が取り合う。

普通なら考えられない話です。

「素晴らしい、素晴らしい働きであるよ。同志大尉」

「お褒めに預かり光栄です」

「嗚呼、今日は良き日である。喜び給え、同志シルヴィア・クシャトロワ。今この瞬間から、君は我が部隊『バーバヤーガ』の一員である」

トントン拍子に進んだ話にも何とも言えず、気づけば全てが決まっていました。

私は、落ちこぼれの私は、公国の魔導部隊の中でも一二を争うエリート部隊『バーバヤーガ』に配属されました。

私はこの時気付くべきでした。

ただの士官候補生を卒業を待たずに部隊に引き入れる理由を、ナジエーリア將軍とリーリヤ少将二人の共通点に気付くべきでした。

「ナジエーリア！」

「おお？ 同志リーリヤではないか。どうかしたかね？」

「どうかしたかね？ ではない！ 貴様、私が狙っていた候補生を横から拐っていったな？」

「ハハハ、早い者勝ちであるよ。同志リーリヤ」

「貴様……！ まあ、良い。それよりもだ、ナジェーリア」

「茶であるなら、同志軍曹」

「はい！」

私を二人が取り合っていた理由は意外と言うべきか、しようもないと言うべきか、私の淹れたお茶でした。

ボリス大尉に聞くところによると、御二人はこの頃お茶に嵌まっていたようで、どちらが良いお茶を客人に出せるかと競い合っていたそうです。

そして、その為の人材探しをしている最中に、私を見付けたという事らしいです。

一体、何をしているのか？

少々問い質したい気持ちになりましたが、ボリス大尉が静かに首を横に振っていたのでやめました。

「しかし、ナジェーリア。今からでも同志軍曹を私に寄越す気にならない？」

「ハハハ、負け犬の遠吠えであるね。静かにし給えよ」

「決着、つけるか？」

「君が私に勝てるのかね？」

基地上空にて、將軍の槌による圧碎と少將の斧による割碎が激突し、基地とその周辺

が半壊しました。

理由はお茶淹れ係の争奪、ボリス大尉が何も言わず関係各所へ連絡を入れているのが、慣れを感じさせて辛いです。

そんな非日常が日常の魔導部隊に配属されたお茶淹れ係兼空戦魔女の私ですが、割りとこの日々を楽しんでいます。

慣れとは恐ろしいものです。

「明日も早いし、ここままでにして寝よう」

今頃、将軍と大尉は宮殿で偉い政治家の人達とパーティーの最中、明日は一番に熱いお茶を淹れておこう。

明日から将軍は休暇らしいけど、基地には寄る筈だから。

## 同志大尉 ボリス・カレンディット

では、講義を始める。

本日の講師は空戦魔導部隊 “バーバヤーガ” 所属ボリス・カレンディット大尉が行う。

ではまず、“エーテル”。これについての講義を始める。

“エーテル”とはこの世界に存在する極めて重要な物質であり、この世界の万物を構成するものだ。

我々魔導師は、この“エーテル”を用い魔導を扱う。

原理としては、魔法杖等の触媒や媒介物を介し、自らの持つ“エーテル”を呼び水として、空間に存在する“エーテル”を抽出し、魔導として形成する。

これが原理であり基礎でもある。

魔導師や魔女の実力は、この“エーテル抽出能力”、所謂“エーテル適性”と自らが持つ“内燃エーテル量”により決まる。

この“エーテル適性”が高ければ高い程、より少ない量の“内燃エーテル”で空間から“エーテル”を大量に抽出する事が出来、より高いレベルでの魔導の行使が可能とな

る。

また、形成する魔導や魔法杖のサイズや強度に威力と言ったものに関係してくる。

そして、我々が持つ“内燃エーテル量”についてだ。

この“内燃エーテル量”は、俺達が生まれながらに保持している“エーテル”の事だ。我々はこれを呼び水にして、空間から“エーテル”を抽出している。なので、これが尽きれば空間から“エーテル”を抽出する事が出来なくなる上に、魔法杖のフレームを固定出来なくなる。まあ、尽きる事は滅多に無いが、気を付けておけよ新兵共。

さて個人的にはあるが、俺は“エーテル適性”よりは“内燃エーテル量”が重要であると考えている。無論、反論のある者は反論してもらって構わない。

では何故“内燃エーテル量”が重要なのか？

それは、ナジエーリア將軍を見れば解る事だ。

將軍の“エーテル適性”は他国のネームド魔女に比べて高いとは言えない。まあ、それでも通常の魔女の基準からはかけ離れているがな。

では、何故に將軍が公国最強の魔女と呼ばれているのか？

“内燃エーテル量”が異様なまでに膨大だから、これに尽きる。將軍の“内燃エーテル量”は、今この場に居る我々全員を足してもまるで足りん。いや、下手をすると公国の魔導部隊全員を足しても足りんかもな。

話を続けよう。

將軍はその膨大な“内燃エネルギー量”を用いて、鎌槌ヴォジャノイを形成する為の“エネルギー”を抽出し、余剰分を保持している。

あまりに膨大な“内燃エネルギー量”を用いた物量戦法、それが將軍の基本戦術だ。

解るか？ エネルギー適性が低くとも、内燃エネルギー量があればその差を引っくり返す事が出来る。

それを將軍は証明している。

俺が“エネルギー適性”よりも“内燃エネルギー量”を重視している理由はこれだ。

信奉者と言われればそれまでだが、將軍の戦いを長く見てきたから言える事でもある。

しかし、その逆もまた然りだ。高い“エネルギー適性”で少ない“内燃エネルギー量”を補い、とんでもない魔導を行使する魔女も居る。

ああ、そうだ。同志軍曹、リーリヤ少将の事だ。

あの方は將軍とは逆だ。

高過ぎる“エネルギー適性”に少ない“内燃エネルギー量”。

例えばだが、將軍が10の内燃エネルギーで1000のエネルギーを空間から抽出出来るのに対し、リーリヤ少将は10の内燃エネルギーで1000のエネルギーを空間から抽出する



事が出来る。

・・・同志軍曹、感心するのは良いが、これはあくまでも例え話だぞ？

なあ、同志軍曹。お前はあの方達の話に付いていけるか？

無理だろう？

そういう事だ。俺達程度では、あの方達のレベルは理解出来ん。

講義を続けよう。

次に魔法が使いう魔法杖についてだが、これに関しては俺は上手く説明が出来ん。

この魔法杖を展開使用出来るのは魔法だけであり、俺達魔導師は展開する事自体が出来んからな。

ただ言えるのは、自分に所縁のある物を用いて、魔導を為す為のデバイスを形成するという事か。

そうだな同志軍曹。お前の言う通り、この魔法杖の理解に関しては個人差があるからな。一概には言えん。

ただ、将軍に關してなら俺は昔に聞いた事がある。

将軍が使っている鎌と槌は、将軍が幼少の頃に故郷で使っていた物らしい。

将軍曰く、持っている鎌で遠くの草を刈り取れたら仕事が楽だなとか、態々大人数で槌を持って整地しなくても一回でドンといけなかなあとか考えていたら出来たら

しい。

……言うな、同志軍曹。幼少の頃から將軍は將軍だったとか言うな。俺も、この人はどこまで本気なのかと悩んだ事もある。

結論か？

その前に、鎌槌ヴォジャノイーの名前の由来も聞いておけ。

ああ、そうだ。また將軍の幼少の頃だ。

將軍の故郷では中々に悪さをする水ヴォジャノイー精が居たらしくてな。

「ふむ、では少しばかり懲らしめるとしよう」

そう言うと、水精が棲む川辺に近付き

「この辺りかね？」

槌の圧砕で川辺を打撃、驚いた水精を鎌の引寄せで引き揚げて

「ハッハッハ、大人しくし給え」

槌で頭を打ち鳴らしたらしい。

それはもう、イイ音がしたらしいぞ。

事実かどうかは分かんが、將軍の故郷の川には圧砕の跡が残っている。

その事から、將軍の魔法杖の名前はヴォジャノイーというらしい。

……まあ、こう言った経験を元に魔法杖を形成する魔女も居れば、代々に引き継いで

きた物を使う魔女も居る。最近では、機械と融合させた機工式の魔法杖もあるな。そうだ。帝国の“サイレンの魔女”がそうだ。

あの魔女は、魔女としての才能に恵まれなかったが、“空で戦う才能”に恵まれた。そこに帝国は目を付けたという事だな。

あの喧しいサイレンを聞く度に、将軍は溜め息混じりに圧碎を“サイレンの魔女”が居るであろう空域に打ち込む。

将軍からしてみれば、あの魔女の相手は骨が折れるんだそうだ。

そうやって、面倒を回避しようとするのだが、あの魔女は何を考えているのか。

将軍の圧碎のエーテルに乗って、こちらへ強襲を仕掛けてくる。同志軍曹、君も経験があるだろう？

今回の講義はこんなところか。

同志軍曹、今日の講義の内容は士官学校で習う内容であり、“エーテル”に関してはそれ以前に習う内容だからな。忘れるなよ？

忘れたらすぐに言え。俺だけでなく、他の隊員も教えてくれるさ。

.....

「將軍、將軍？」

「どうした？ 同志軍曹」

「あ、ボリス大尉。將軍に書類を届けに来たら」

二人が振り向く先、適度な装飾が為され書類が積み上げられた執務机、その席に座った銀髪の女が肘掛けに肘を乗せ手を組み、目を閉じていた。

「寝て、ますよね？」

「ああ、寝ているな」

「珍しいですよね？」

「ああ、珍しいな」

机の上に置かれた軍服の彼女愛用のパイプと灰皿を見ると、先程まで紫煙を燻らせていたらしき跡と匂いがある。

恐らく、ついさつきまでは起きていたのだろう。

「穏やかな寝顔ですね」

「同志軍曹、あまり覗き込むな」

「す、すいません。でも、どんな夢見てるんですかね?」

「……さてな」

「と言うか、将軍って夢見るんですかね?」

穏やかな寝顔を浮かべるナジェーリアを見ながら、ボリスとシルヴィアの二人は、机に積み上げられた書類を静かに片付けていく。

「ボリス大尉、やっぱり将軍お疲れですかね?」

「流石の将軍でも、疲れはあるだろう」

「ここ連日、政治家の先生方と夜会ですからね」

「俺も出れる夜会には供をしているが、身分で出席出来ん夜会もあるからな」

公国では未だに貴族社会の名残がある。その為、ボリス達一般階級と言われる出身では、出席出来ない会又は入れない建物や土地と言ったものが存在する。

ナジェーリアも一般階級出身だが、公国最強の鎌槌の魔女という肩書きがある為、出席が可能となっている。

そして、政治家や嘗ての貴族に連なる家系の者達はナジェーリアやリーリヤとの<sup>繋がり</sup>パイプを欲している。

「将軍自身はなんと言うか、変人の類いなのだが」

「ボリス大尉って、当たり前のように言いますよね」





「ぬ、う、止め給え。カタツムリは飛ばぬのだ」

「ボリス大尉、これ、どんな夢を？」

「解らん……」

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

ナジエリ

「ふむ、アレクセイ。まあ、あれであるよ。魔女も人間であるという事である」  
いやな、ナジエリ。それでも、これはひどいぞ？

マーマ、料理へた？

「ひどい夫と娘である。ただ少し卵の調理を失敗したただけではないか」  
ナジエリ、それでもだ。卵を爆発させる奴は居ない。

卵爆発するの。

「ふむ、では、アレクセイ。どうすれば、卵を爆発させずに済むのか。御教授願おうか」  
ああ、まずだな。卵は





「アレクセイ、これは何だね？　中々に刺激的な絵のマツチではないか」  
ナジェリ

「アレクセイ。ああ、安心し給えよ。私は言い訳は聞く主義である」  
初めて聞く主義だが……

あ、いや、そのだな、仕事でな？

「ふむ、成程。仕事であるか」

そ、そうだよ。仕事の付き合いなんだ。

「珍しい仕事もあつたものである。『魔女の乳挟みキャバレー』とはな。何を挟む仕事の付き合いなのだね？」

ナジェリ、勘違いしないで。

「勘違いであるか。まあ、確かに私は豊かな方ではないが、挟めない程ではないと自覚しているぞ？」

ナジェリ、そうだけどそうじゃないんだ。

「では、試してみるかね？」

え？　あの？　ナジェリ？　ナジェーリアさん？

「嗚呼、そうであるな。しかし、安心し給え。タチナヤは保育園のお泊まり会である」  
落ち着こう？　な？

「そう動くものではない。私は挟めない程ではないというだけであつて、君のは中々に……」

ナジエリ、それ以上いけない……！

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

「挟み難いのであるよ」

「卵、挟みます？」

「む？ 卵は割るものだろう」

「ですよね。では、将軍は何を挟むつもりなんでしょう？」

「本当に解らんな」

「動くでないよ。擦れるではないか」

「ホント、どんな夢を？」

「将軍の夢が解る訳がない」

「……」

「……………」

「ボリス大尉、この部分なのですが」

「そこはだな」

// // // // // // // // // // // // // // // //

ナジエリ

マーマ

「どうかしたかね？」

ナジエリ

マーマ

「聞こえているよ」

ナジエリ

マーマ

「聞こえていないのかね？」



「はっあ……!!」

「將軍! 大丈夫ですか?」

「は、ああ、同志大尉か」

「酷く魘されていましたが、一体?」

「魘されていた?」

「はい」

ふと、額に触れる手に湿り気がある。汗、それも冷や汗。

頭も瞼も重い、口内が粘り喉が渴き貼り付く。夢でも見ていたのか?

時計を見る。どうやら、仮眠のつもりが確りと寝ていたようだ。

「今、同志軍曹が茶を淹れています。暫しお待ちを」

「うむ、すまんな」

「將軍、その書類は……」

「ああ、〃公国〃 〃帝国〃 〃共和国〃 〃連邦〃 〃神皇国〃、五国全ての主要魔女に通達

されたものである」

「正直な話、眉唾と言うか想像かと思っていました」

「私もであるよ」

ナジエーリアが手に取った一組の紙束に並ぶ文字、それはこの世界に生きる者であれば、知らぬ者は居ない。『お伽噺』であつた。

「気のせいかと思つていたが、まさかな」

「將軍」

「同志リーリヤだが、最近は斧鉞の動作が重くなつた気がすると言つていたよ。まあ、私も鎌の切れが悪くなつた気がするのだがね」

ベルトに差していた鎌を手に取り、灯りに翳す。

幼少の頃から使つていた鎌を元に、よりエーテルの乗りが良い様に打ち直した一振り。

手入れは怠つていない。実際、切れ味が落ちた訳ではないが、刃の通りが以前より悪くなつた気がする。

槌も軽くなつた気がしないでもない。

「同志大尉は何か無いかね？」

「特にこれと言つては無いですね」

「ふむ、であるか」

ナジエーリアがパイプに葉を詰め、火を着ける。

息を二、三度吹かせば、紫煙が目の前に満ちる。

煙を肺に入れれば、重たくのし掛かつてきていた瞼が少し軽くなった感覚が芽生える。

「お待ちせしました」

「おお、来たか。して、今日の茶はどの様なものかね？」

「はい、今日は将軍がお疲れの様子でしたので、ミルクと砂糖をたっぷり使ったミルクティーとスコーンです。スコーンにはミルククリームと夏蜜柑の皮を多く使ったジャムをどうぞ」

「ふむ、茶が甘い分、茶請けは甘味が軽いな」

「相変わらず良き腕である」

「有難う御座います」

ナジェーリアとボリスがシルヴィアの淹れた茶を褒め一息吐くと、シルヴィアが二人の見ていた書類を見付けた。

「将軍、これって……」

「同志軍曹も気になるかね？」

「気になると言うか、これ本当ですか？」

「紛う事なき事実であるよ」



「『福音の魔女』」

三人が見た書類に書かれていたものは、世界の終わりに現れると言い伝えられる伝説の魔女、それが確認されたという報告であった。

# 神皇国 梓弓の巫女

## 天内菊代

静かな、まだ冷たい空気が満ちる弓道場の空に、渴きよく響く音が届いた。

「奉上」

巫女服に身を包んだ黒髪の少女、彼女が打った柏手の音だ。

胸の前で合わせた手を下ろし、脇に立て掛けた弓を手に取る。

構え、射つ。中る。

構え、射つ。中る。

構え、射つ。中る。

構え、射つ。中る。

構え、射つ。中る。

構え、中る。

射つ、中る。

中る。中る。

中る。中る。中る。

中る。中る。中る。中る。

中る。中る。中る。中る。中る。

中る。中る。中る。中る。中る。中る。

中る。中る。中る。中る。中る。中る。中る。

「巫女様巫女様！ 射ちすぎ射ちすぎい！」

「あら？ 的がありませんわね」

的どころではない。的があつたであろう場所には小さなクレーターが幾重にも重なり、放たれた矢と同じ数空いていた。

「的が無いではありませんよ！」

「まあ、気にする事ではありませんわ」

「巫女様！」

「落ち着きなさいな」

「的代もバカにならないのですよ?!」

「そうですね」

付き人が巫女に詰め寄るが、当の巫女は何処吹く風であり、付き人の小言に堪えた様子はない。

どうしたものかと、付き人が内心で頭を抱える横で、巫女が口を開いた。

「『福音の魔女』が発見されたらしいですわね？」

「ええ、共和国の『ガラスの魔女』が発見した様です」

「その後の動向は？」

「不明です。発見したと言っても、共和国がそう言っているだけでして」

「しかし、文書を主要五国へ配布し、『変化』も確認済みですわ」

溜め息を一つ、巫女は軽く弓にエーテルを通す。

「魔法杖」を展開するその前段階、フレームの形成を始めるが、すぐに解けて霧散してしまふ。

「巫女様、今のは？」

「『魔法杖』の展開前のフレーム形成ですが、見ての通りですわ」

「『魔法杖』が展開出来なくなっておられるのですか!？」

「落ち着きなさいと言いましたよ。展開は出来ませんが、以前よりも多量のエーテルが必要になっていただけですわよ」

通常の魔導とは違い、『魔法杖』はエーテルとの親和性が高い魔女にしか展開出来ない。そして、『魔法杖』の展開には多量のエーテルが必要となる。

多量のエーテルを空間から抽出して『魔法杖』のフレームを形成し固定、展開するというのが、一般的な『魔法杖』の展開プロセスだ。

しかし、これには一つ問題がある。

「まさか、神皇国にまで影響が？」

「ええ、ですから、共和国の言っている事も事実なのでしょう。空間のエーテルが僅かですが、薄くなつてきていますわ」

多量のエーテルを空間から抽出する為、一時的ではあるが魔女周辺のエーテルは薄くなる。

その為、《魔法杖》展開直後は空間からエーテル抽出を行えず、《魔法杖》の使用には自身の《内燃エーテル》を用いる事になり、内燃エーテル量の少ない魔女は展開時に、幾らかエーテルを余分に抽出しプールしておくのが定石である。

「《おば様》級でしたら、話は別でしょうが……」

だが、空間内のエーテルが薄くなっているとエーテルを抽出出来ずに、全てを魔女自身の内燃エーテルで行う事になる。

魔導も魔法杖展開も何もかもをだ。

普通の魔導師や魔女では、抽出エーテルや補助器具無しでそんな事をすれば、すぐにガス欠になる。

魔法杖の多重展開でもしなければ、エーテルがそこまで薄くなる事はないし、薄くなつたとしてもそう時を置かずに元に戻る。

そう、戻るのだ。

例え、エーテルを用いた射撃を千発以上行った直後だとしても、魔法杖が展開に至らず解けるなんて事は普通あり得ない。

「『福音の魔女』の影響ですか」

『福音の魔女』この世界に伝わる世界の終わりに現れると言われる魔女。

詳しい事は伝えられている国により差はあるが、世界の終わりに現れるという事だけは共通している。

そして、エーテルの希薄化が『福音の魔女』の影響なら

「最悪、ですわ」

世界はエーテルに依存していると言っても過言ではない。

尽きる事の無い無限の存在、魔女も魔導師もエーテルありきであり、そうでない普通の人々もそうだ。

今の文明はエーテルに依存しており、それが希薄化するという事は文明の崩壊を意味する。

「技局はなんと?」

「『福音の魔女』の影響かは、今は明言出来ないとの事です」

「まあ、そうでしょうね」

いくら発見されたと言つても、それは他国の魔女が一人遭遇したに過ぎない。言つてしまえば、証拠が無いのだ。

映像も何も無い。あるのは共和国の「ガラスの魔女」の証言と、世界中でのエーテルの希薄化を示す書類のみ。

「議会はなんと?」

「事実であれば公国と協力して事態の解決に当たると」

「そうです」

神皇国の巫女、天内菊代あまうちきくよは目を閉じ、自分と協力するであろう魔女を思い浮かべる。

自分の先代、母の友人である彼女、奇人変人が多い魔女の中でも特に変人の部類だと  
言われる彼女。

大國である公国において最強と謡われる彼女、だけど楽しみは休暇の日々と言つて聞かない彼女。

なんでも、休暇の前日は早上がりして手製のペリメニを着に上等のヴォートカの大瓶を空け、休暇の始まりを告げる朝日を迎えるのが楽しみらしいが、正直な話やめて欲しい。

確かに、魔女は老化が極めて遅く、人によつては三桁の年月を重ねても十か二十の年頃にしか見えない魔女も居るには居るから、それ程気にする事ではないかもしれない

が、空戦の後は節々に痛みがあるのかなんとか言っていたのだ。

少し自愛というものをしてほしい。

「はあ」

溜め息が出る。

何時からだろうか。あの人があまり自分の身を省みなくなったのは。

無理をしているという訳ではなくなったが、それでも夜通し呑むのはやめて欲しいし、煙草も出来ればやめて欲しいと思うが、魔女とはそういうものであるし、巫女は悪縁を良縁へと禊ぎ昇華させる役割もある。

だから、煙草が体に悪いと言ってやめさせる訳にもいかない。

まったく、「福音の魔女」だけでも面倒なのに、どうしてこうも他人の心配をしてしまうのか。

世話焼きと言われても仕方ないとは思いますが、母の代から、否、その前の代から世話焼きの家系だったような・・・

「ぬ……？」

「巫女様？」

いや、待て、落ち着きなさい天内菊代。

同じ世話焼きなら隣に居るし、公国にも居る。そう、あの四角い顔の大尉。



だから、特別自分が珍しいという訳ではない、筈。

それに、世話焼きだから何と言うのです。問題は無いではありませんか。そうです。何も問題は無いのです。

「み、巫女様」

「落ち着きなさいな。何も問題は無いのです」

そうです。何も問題は無いのです。

そう、本来「禁煙」である弓道場に煙草の匂いがしても何も問題がって、あら？

「はっはっは、久しぶりだね菊代。少し、背が伸びたのではないかね？」

「な」

「な？ ふむ、「名」であるなら簡単であるよ。ナジエーリア・リトリアである」

「な、何でここに居ますの?! おば様——」

公国最強の鎌槌の魔女ナジエーリア・リトリアがいつの間にか現れ、天内が空けたクレーターの縁に腰掛け、変わらぬ笑みでパイプを吹かしていた。

## 鎌槌と梓弓

「はっはっは、菊代。どうしたのだね？ ナジエーリアおば様であるよ。さあ、私の胸に飛び込んで来給えよ」

「いえ、あの、もうそんな歳では……」

「ん？ そうであるか。残念だね」

我が家、天内家弓道場にてパイプを吹かす銀髪の女性ナジエーリア・リトリアおば様。いえ、実際に血縁がある訳ではありませんが、母の親友という事もありそう呼んでい  
る方ですわ。

しかし、かなりの変人の類い。

つまり、そのかなりの類いのおば様と親友だった母も……

止めましょう。もし仮に、母がおば様と同じ系統だったとしても、今は関係ありません。  
ん。

そうです。関係無いのです。

「おや？ 考え事かね？ 菊代」

だから、いつの間にか側に来てこちらを覗き込んでいるおば様とは関係無いのです。

……つて、え？

「ナジェーリアおば様?!」

「うむ、そうであるよ」

「いや、あの、そうではなくてですね。おば様？ 一体いつ頃？」

「いつ頃かね？ そうだね、君が大体二十個目のクレーターを開けた時には上に居たとも」

「その時に？ ではありませんわ」

「解らないのかね？」

「う……」

おば様の言う通り、私にはおば様が何時ここに現れたのか、いつの間に私の側に来ていたのか、全くと言っていない程に解りません。

おば様は魔女の中でもそう速くはない部類の筈、私も目には自信がありますわ。しかし、どうやってなんの兆しも無く現れ、私の側に近付いていたのか？

「おば様」

「何だね？」

「……少し、時間を貰えます？」

「ふむ、良いだろう。では、このパイプに詰めた葉が燃え尽きるまでである」

最初に現れたのは的の跡地、次は私の隣と言うよりはやや左後ろ気味の隣。

どちらも、音も無くいきなり現れた。

私はおば様とは違い、純粋な遠距離系巫女<sup>魔女</sup>。

だから、自分に近付く気配や動きには他の魔女よりも敏感だと自負がありますが、おば様の動きはまるで察知出来ませんでしたわ。

しかし、おば様。当家は禁煙ですよ？

つて、あら？

「……ん？」

「おや？ 何か解ったのかね？」

まあ、禁煙だと言ったところでおば様が素直に聞くとは思えません。

それよりも、なんでしよう？

この「床の穴」は？

よく見れば、おば様が現れた場の近くにもありますわね。

同じ様な「薄い何かを刺した跡」が。

「おば様、「引寄せ」ですわね？」

「御名答、流石である。しかし、説明は出来るかね？」

「勿論ですわ。おば様の鎌はエーテル製の刃を伸ばし、その内側にあるものを「引寄

せ、刈り取る”不可視の鎌」

「よく覚えているものだ」

感心してますが、おば様？

これは他国の魔女、ほぼ全員が知っている事ですわよ？

鎌槌の魔女の鎌は見えず聞こえず、気付いた時には刃に引寄せられ刈り取られるとい

うキチ○イ仕様。

それに加えて、鎌で引寄せてから槌で広域空間打撃とかしてくるからダブルキチガ○

仕様。

母はこの方に勝ったと聞いていますが、それだと私の母はダブルキ○ガイを超える○

チガイという事に……！

「では、菊代。私は鎌の”引寄せ”をどう使ったのだね？」

「簡単ですわ。あそことここ、この刺し跡が答えですわよ」

気を取り直して、ナジェーリアおば様は魔女の中でも特に強力でありながら、速度的

には並より少し上程度。

そのおば様が突如現れ、突如私の側に現れた方法はたった一つ。

「自分を引寄せましたのね」

「正解である」

おぼ様の鎌は振らねば刈り取れない。振らなければ、何も刈り取れない。

しかし、引寄せるといふ鎌独特の刈り取り前の動きは、振らずとも手元へ引き込めばいい。

そして

「鎌の刃先、それを地面に刺し込み固定して、その刃先のある先へと自分を引寄せる。柄も確定した形も無いエーテル製の鎌ならではの技ですわね」

「左様、よく見れる様になつたものである」

「まだですわ」

「ほう？」

「加えて言うなら、おぼ様の魔法杖は鎌と槌。鎌の刃は必ず横か背後、曲線で放たれますわ。だから、おぼ様は必ず横か背後の刃先の位置に現れる。なので」

「予め、仕込みでもしておくかね？」

「ええ、対魔女用で三連程」

ええ、それが一番手っ取り早い方法ですわ。おぼ様は鎌でこちらの攻撃を刈り取りながら、今の移動をできかねませんし、移動途中で槌の圧碎なんて目も当てられません。

だから、そのルート上に対魔女用矢を矢筒三本三連で撃ち込んでおきますわ。あ、勿論、時間差で着弾仕様で。

天内家の巫女としては、当然全弾必中ですよ。

「……おば様、何ですか?」

「いやね、やはり『満代』の娘だとね」

「母もやはり……?」

「うむ、と言つても満代は三連ではなく、対魔女用矢五連。それも矢筒十本を五連の時  
間差で撃ち込んできたのだよ。いや、あれには参つたね」

やはりと言うべきでしょうか、流石と言うべきでしょうか。

天内家歴代巫女最強と謳われた母ならやりかねないと思う反面、一体何をしたらあの  
温厚な母をそこまで怒らせる事が出来たのか。

「まさか、水菓子一つで夜通し空を駆け回る事になるとは、食べ物への恨みは恐ろしいと  
は、よく言つたものであるね」

いや、確かに母の好物ではありませんが、まさか水菓子一つですの?」

おば様も、「いやあ、参つた参つた」みたいな感じで笑わないでください。

……そう言えば、話がずれてましたが、いやまさか、いくらおば様でもそれは流石に、  
やりかねませんわね……

「あの、ナジェーリアおば様? 一つ、宜しいですか?」

「はっはっは、カワイイ菊代の問いならば何でも答えようではないか。ああ、しかし、

スリーサイズは秘密であるよ？ 君に私のスリーサイズを明かしたところで、私が惨めになるだけであるからね……!」

おば様、うるさいですよ。

「あの、おば様？ 一体、〃何処から〃鎌を伸ばしたんですの？」

「〃何処から〃かね？ それは公国の私の基地からに決まっているではないか。変わった事を言う子だね」

「何を当たり前の様に仰っているんですのー!」

この人は、本当にこの人は……!

「常識！ 常識ですわよ?!」

「ふむ、常識であるか。常識…… 時に話は変わるがね。極点域での満代との砲撃戦の話になる」

「は……?」

「元より巫女に遠距離戦で勝てる訳が無いのだが、あの時の満代はノリに乗っていてね。手が付けられなかったのだよ」

「あの、おば様?」

「副砲で私が隠しておいた鎌の刃を砕きまくる上に、こちらの圧碎を主砲で押し返す。ヴォジャノイの負担もバカにならなくなってきたのですね。一度、逃げたのだよ。事前



に伸ばしておいた鎌で星の裏側までね」

常識を語るかと思えば、常識とはかけ離れた十二かを語り始めましたわ。

しかも、母と何してましたの、この人？

おぼ様の不可視の鎌の刃を砕いて、圧碎を押し返す母も母ですけど、事前に星の裏側まで鎌を伸ばして、それで逃げるおぼ様もおぼ様ですわ。

「それでまあ、私は祖国の山脈の中に隠れていたのだが、満代の奴は水菓子一つで星の裏側から山脈に隠れる私を撃ち抜いたのだよ。しかも、六連砲撃でね……！」  
解りましたわ。ええ、今完璧に理解しましたわ。

魔女の常識は世界の非常識。

それを今完璧に理解しましたわ。

「いやはや、あの時は近くを偶然飛んでいた同志リーリヤを盾にしなければ危なかった……」

理解出来ていませんでしたわ。友人を盾にするなんて、理解出来る訳ありませんわ。  
「まあ、その後、二人で満代に追われる事になったのだがね」

常識、常識とは？

「さて、菊代。真面目な話といこうではないか。『福音の魔女』の話は聞いているね？」

「またいきなりですわね。まあ、答えは勿論ですわ」

「その事に関して話をしに来たのだよ」

本当にいきなりですわね、この人は。

しかし、「福音の魔女」となれば、それも当然と言えますわね。

おぼ様の表情も先程までとは違い、

「おっと、忘れていた。満代との砲撃戦の理由は水菓子他に、夜9時のラジオドラマのチャンネル争いであるよ」

「はい？」

「そんな顔をするものではないよ？ まあ、実際よくあつた事である」

「よくあられても困るのですが……」

そんな事で星の裏側まで届く先読み砲撃とか、なんと言うか頭おかしいですわ……

さて、どうしてそうなる？

「さて、菊代。茶の時間である」

神皇国を訪れたナジエーリア・リトリア、天内家の洋室にて、何時もと変わらぬ様子でパイプを吹かし、椅子に座り茶の催促をする。

その様子に天内菊代は嘆息するが、ナジエーリアには通じず、呆れを込めた嘆息は紫煙と共に消えていった。

「む、どうかしたかね？」

「いえ、なにもありませんわ」

「そうか。では菊代、茶の時間である」

再度の催促に菊代は幼少の頃の微かな記憶から、目の前の吹雪の様な銀髪の女が茶が好きだったと思いつく。

何時も茶を飲みパイプを吹かし、その度に何かをして母に叱られていた。

たまに、ナジエーリアが突如上空へ逃げ出し、母が空へ向かって弓を射っていた記憶もあるが、これは先程の水菓子とラジオドラマの件が混ざったに違いない。

菊代の記憶では、母は正しく神皇国の巫女として相応しい人物であった。

だから、鎌の引寄せで瞬間的に逃げ出し、砂粒以下の大きさになったナジエーリアを、  
イイ笑顔を浮かべながら狙撃していた母は記憶違いの筈だ。

そう、記憶違いなのだ。

幼少の頃の記憶が、なんかこう、アレして他の記憶とまぎって、あれ？

それだと結局、母はイイ笑顔で弓を射っていた事に……?!

「菊代、私は緑茶より焙じ茶の気分なのだよ」

「お婆様、お茶の好み変わりましたの？」

「神皇国の茶は苦味や渋味がはつきりしていながら甘味もあるから、嵌まると抜け出  
せないね。同志軍曹が嵌まって、私のティータイムは充実の一途を辿っているのだよ  
……!」

茶の催促に加え、茶の種類まで指定してきた。

ナジエーリアらしく遠慮が無い。

と言うか、だ。自分達は『福音の魔女』について話をする筈なのに何を思っただ、優  
雅にティータイムを要求している。

ーお婆様のペースに嵌められていますわねー

大体、ナジエーリアは強引でいきなりでありながら、こちらが拒絶の意を示せばすん  
なり引く振りをして、いつの間にか自分のペースに引き込んでくる。

他人を言いくるめるのが上手いのか、はたまた変人故の奇行奇言が多い為か。菊代として、その両方だと見ている。

面倒見が良く交遊関係も広かった母だが、何の臆面も無く親友と言っていたのはナジエーリア・リトリア、彼女一人しか居ない。

二人の間に何があつたのかは、菊代は知らない。

しかし、ナジエーリアが神皇国に訪れると、必ず天内家に顔を見せる。

そして

「捜しましたよ、将軍」

この四角い顔の副官が迎えに来るまで居座るのだ。

「おお、同志大尉。早かつたではないか」

「早かつたではないか、ではありません将軍。天内殿も、申し訳ない」

「まあ、待ち給えよ。私は焙じ茶を所望しているのだが、菊代が中々出してくれなくてね」

「将軍、帝国から『ウルレイカ・ルーデルハイト』が来ていますが？」

ボリスの言葉にナジエーリアは首を傾げ、パイプから燻らせた紫煙で『?』を作る。エーテル操作の応用だろうが、器用な事をする。

「あの、おば様? 『ウルレイカ・ルーデルハイト』って、帝国の『サイレンの魔女』

ですの？」

「はっはっは、おかしな事を言う子だね。むしろ、あの喧しい『サイレンの魔女』以外に誰が居るのかね？」

帝国最強の魔女『ウルレイカ・ルーデルハイト』。

まだ珍しい機工式魔法杖を用いる魔女であり、公国最強の魔女『ナジーリア・リトリア』とは宿敵関係にあると、菊代は記憶している。

しているのだが、そのサイレンの魔女が鎌槌の魔女を訪ねて来たと、ボリスは言った。

「今は同志軍曹が応対しています」

「まったく、面倒な娘である。大方、同志軍曹の茶と茶菓子が目当てだろう。会談で出すべきではなかったね」

「おば様、サイレンの魔女とは宿敵では？」

菊代の問いにナジーリアは『？』を二つ紫煙で作る。

「あれは、あつちから絡んでくるだけであるよ」

ちらりとナジーリアの背後に控えるボリスへと目を向ける。口を横にしたなんとも微妙な表情で肯定するのが見えた。

正直、判断し難い。

その側では、ナジーリアが紫煙を様々な形に変えて遊んでいるから、余計に判断し

難い。

「仕方ない。茶も出ない事であるし、『福音の魔女』の話は今度にして、帰るとするか」

「そんな事を言っていると、次からは白湯が出ますわよ？」

「白湯か。ふむ、悪くない、か？」

白湯か茶か。菊代の予想に反して、ナジエーリアは真面目に悩み出した。

さあ、どうしたものか。悩むナジエーリアに目の辺りを押さえるボリス。

流石に白湯か茶の選択で悩むとは、菊代も夢にも思わなかった。

『あの、ボリス大尉？』

『天内殿、こうなった將軍はそっとしておくのが一番です』

ひっそりとアイコンタクトで会話をする。魔導を修める者なら口に出さずとも離れた相手と会話が出るが、こんな距離で使う事になるとは二人も思わなかった。

しかし、相手は奇言奇行が常のナジエーリア・リトリア。何を起こすのか、どうしたらそうなるのか解らないのが常である。

「ふむ……」

「おば様、どうかしましたの？」

「……成る程、いや、しかし」

白湯か茶か、悩んでいたナジエーリアだが、突然菊代の周りをグルグルと周りだし、不躰にジロジロと菊代の身体を見詰め何かを呟いている。

菊代はボリスに助けを求め、流石の彼も何をしているのか解らない様だ。

「ふむり、ならば」

「あの、おば様？」

何かを決した様な様子のナジエーリアに、菊代は思わず距離を取った。

だが、それがいけなかった。菊代がナジエーリアから距離を取った事で二人の位置が変わり、正面で向き合う形になり、両の手を振るえるスペースが出来る。

「おば様？」

「將軍？」

ナジエーリアの手は真つ直ぐに菊代へと向かい、思いつきり菊代の胸を揉んだ。

一体全体何が起きているのか？

こちらの左胸に感じる圧は、恐らく菊代のこれからの人生でも中々体験する事が無いだろうと思える程に深く、菊代を停止させるには充分すぎた。

「見給え、同志大尉！ 私の指が全て埋まったよ！」

心の底から嬉しそうに報告するナジエーリアに、ボリスは開いた口が塞がらなかった。



理解も追い付かなかった。炊事と事務に特化した呑気な部下が、慌てふためいて走り回る映像が脳裏に浮かぶが、これは一体何の比喩なのだろうか？

「白湯か茶か、先程の菊代の言葉で解つたのだよ！　かつての満代も同じ事を同じ場面で行っていたとね！」

だから何がどうして、その発言から親友の娘の胸を揉むのか？

そして、何故にそれ程に嬉しそうなのか？

解らないが、解る事が一つある。

「発言もそっくりなら、胸もそっくりだ！　満代も五指が余すこと無く埋まったとも

！」

それは

「……………か」

「おや？」

「おば様の……………バカーー!!」

全魔女中、最大最強を誇ると言われる神皇国の巫女の砲撃がゼロ距離で叩き込まれる事だ。

## 過去の

ー少し、やり過ぎましたか？ー

天内菊代は目の前に煙るエーテルを見ながら思った。

射ち込んだのは、砲弾形成も圧縮もしていない只の抽出エーテル。攻撃力は無く、有るのは圧力のみで室内で射つても安心安全仕様の超巨大な霧吹き。

ナジエーリアの側に居た筈のボリス大尉が、瞬時に彼女を見捨てて効果範囲外へと逃げたのが気になるが、只の抽出エーテルを勢い良く噴射しただけの安心安全仕様に変わりはない。

菊代の背後に浮かぶ弩にも似たシルエツトの大弓（ひのわにちりん）“火輪日輪”が解けていくのを背後に、菊代はエーテルの霧が晴れるのを待った。

ナジエーリアの鎌槌ヴォジャノイとは違い、天内家に代々伝わる魔法杖であり、特定の姿形を持たない奇特な魔法杖である。

代々の巫女に最も適した姿をとり、先代巫女であり菊代の母は薙刀、当代の菊代は大弓の姿を取っている。

その空中に解けていく火輪日輪で射ち出したエーテルの手応えから、ナジエーリアに

被害は無い筈だが反応が無い。

内心で、少しやり過ぎたかもしれないという思いが強くなってくるが、華の乙女の胸を異性の前で揉んだのだ。

多段式弾頭を「形成しかけていた」のだから、霧吹きズドンくらいは覚悟してほしい。

しかし、霧が晴れない。いくら室内とは言え、流石にこれはおかしい。

ボリスも怪訝な様子だ。さあどうしてだと、考えてみるが答えは出ない。

しかし菊代は、ふと思いつく。自分が火輪日輪の砲身内で何を形成しかけていたのかを。

——多段式弾頭……！——

通常、敵魔女の魔法杖破壊に用いられるエーテル弾頭、一段目が着弾すると同時に二段目三段目が炸裂し、内部に仕込まれた超高压縮エーテル弾芯三発を同時に叩き込むというもの。

そんなものを形成するエーテルを霧状に噴射したのだ。エーテルが空間に還るのが遅いのは当然であった。

——そう言えば、おば様は多段式弾頭を「ロケット鉛筆弾」と呼んでましたけど、ロケット鉛筆「ってなんですか？——」

ナジェーリアが聞けば拗ねる事は間違いないという気がするので、後で四角い顔の優秀なボリス大尉に聞こう。

菊代はそう決め、前を見る。エーテルの霧はまだ晴れないが、見通しは効き始めた。

「おぼ様？」

菊代が晴れてきた霧を見詰めるが、ナジェーリアらしき人影は見当たらない。

窓も扉も開いてはいない。床も、カーペットや家具が大変な事になっているだけで、穴は開いていない。

自分の足元に開いている細い穴以外は。

「……やはり、満代と同じであるな！」

言うが早いから、次は尻を揉まれた。

袴の上から、押し上げる様に両手の五指を満遍なく使って揉み上げられ、

「ひゃあああああつ?!」

下へ広げる様に揉み引かれた。

「む？ 同志大尉、大発見である！ 胸は満代の方が大きい、尻は菊代の方が大きい

ぞー！」

思わず尻を押さえてしゃがみこむ菊代に対し、ナジェーリアは実に嬉しそうに五指をわきわきと動かしている。

「將軍」

「はっはっは、気にするな同志大尉。これしきの事、満代とは日常茶飯時であつたも」

「お・ば・さ・ま」

紫煙を燻らせ、愉快そうに笑うナジエーリアの背後から、菊代がゆらりと立ち上がり幽鬼の如く笑みを浮かべた。

「おっと、これはいけない。パイが焼ける時間ではないか」

「お婆様？ お婆様は、パイ、焼けないでしよう？」

鎌の引寄せで洋室から逃げ出そうとしたナジエーリアだが、三日月の笑みを浮かべた菊代がそれを許さない。

見れば、仕掛けていた鎌は全て碎かれていた。

「菊代、やるではないか」

「ふふふ、母の娘ですから当然ですわ」

「そうか、それもそうであるな。満代の娘であるなら、私如きを超えるのは自明の理である」

先程までの笑みは何処かへ姿を消し、寂しそうな今にも泣き出してしまいそうな顔で、ナジエーリアは菊代の頬や髪を撫でた。



「次のお茶請けは、神皇国の水饅頭です」

「へえ、神皇国のか。あまり日持ちしないって聞くから、珍しいね」

「レシピと材料が手に入りまして」

「流石だね。クシャトロワ軍曹」

「い、いえ、レシピと材料があれば、誰でも出来ます」

今すぐにでも逃げ出したい。シルヴィアは、基地の外へと向こうとする足を必死に宥めずかしていた。

自分でも慣れたつもりだった。

ナジェーリアやリーリヤと言った常識という枠からすっぽ抜けて、まったくもって新しい別の常識を構築している人々には慣れたつもりだった。

だが、現実は違った。

ナジェーリアもボリスも居ない日、他の隊員達も忙しく走り回っていたが、昼を過ぎた辺りで落ち着きが出て各々の時間を過ごしていた。

そんな時だった。彼女がいきなり現れたのは。

シルヴィアも他の隊員達も、完全に油断していた。

いや、仮に油断していなくても、あれは無い。

つい最近までドンパチャっていた隣国、この間も国境沿いで小競り合いしてた隣国最

強の魔女「ウルレイカ・ルーデルハイト」がごく普通に、隊舎の扉を開いて現れたのだ。公国最強の空戦魔導部隊「バーバヤーガ」であつても、こんな事は予想外だ。

書類を落とす者やサインを失敗し書類を破いてしまう者が居れば、話を聞き飛行訓練中に隊列を乱し墜落する者まで居た。

ナジエーリアかボリスが居れば、もしくはどちらかが居ればここまでの混乱は起こらなかったかもしれないが、ナジエーリアは朝からいきなり仕事をサボり逃走、ボリスはそれを追跡し不在。

最早バーバヤーガには、混乱を治める方法は一つしかなかった。

「あれ？ 皆さん、お茶が出来ましたよ……？」

「やあ、クシャトロワ軍曹。久し振り」

「あ……」

隊員達は迷い無く、シルヴィア・クシャトロワ軍曹を人身御供として捧げた。

仲間を見捨てるのは心苦しかったが、部隊が全滅するよりマシだ。

だから、同志軍曹が気を引いている間に、自分達はなんとかして対策を練らなくてはならない。

と言うか、何故にいきなり現れたんだ。

お前の国とはこの間までドンパチしてたし、つい最近はいきなり突っ掛かってきや



がって、あれで將軍の機嫌が最悪だったんだぞ？

軍曹が將軍の一番好きな茶と茶菓子を用意してなかったら、今頃どうなってたか解るか？ んん？

隊員達が警戒し構える横で、シルヴィアは内心ビクビクしながらも呑気に次のお茶は何にしようとか考えていた。

そんな混乱のバーバヤーガ隊舎の中で、何食わぬ顔でウルレイカが口を開いた。

「神皇国か、多分リトリアも神皇国かな？」

「え？ どうして、分かるんですか？」

「明日は何日だい？」

「明日？ あ……?!」

「そう、天他家先代巫女の命日さ」

世界を救った英雄の、ね。

## 帝国 サイレンの魔女

### ウルレイカ・ルーデルハイト

“ウルレイカ・ルーデルハイト”

年若いなりに帝国最強の魔女であり、いまだ珍しい機工式魔法杖を使用する。

その戦法はいたってシンプル。

超上空から急降下を行い、機工式魔法杖“カノン・フォーゲル”の大火力による制圧砲撃で、対象を付近ごと壊滅させるといふ力業である。

シンプル故に強いを体現する彼女だが、魔女として才覚に溢れているかと問われれば、それは否としか言い様が無い。

内燃エーテル量は常人に毛が生えた程度、エーテル適性も同じで、なんとか魔女の最低水準値。

魔法杖の形成すら覚束ない、どうして魔女になれたか解らない最底辺の出来損ない魔女。  
女。

それがウルレイカ・ルーデルハイトの最初期の評価であった。

しかし、その評価はある時を境に急変する事となる。

機械技術に長ける帝国が開発した機工式魔法杖のテストパイロットに選出されたのだ。

他の、彼女をよく知らない魔女は何故奴が選ばれたと、口を揃えて喚いた。

あんな、ただ空を飛んでいる“だけ”の出来損ないに、最新型の魔法杖を渡すのか。ウルレイカを推薦する者達からしてみれば、彼女の本質が見えていない魔女の戯れ言でしかなかった。

魔女と言う、この世界の理の頂点に立つ存在が鎬を削る空を飛んでいる“だけ”。

そのただ飛ぶ“だけ”がどれ程に困難を極めるのか、周囲の魔女は解っていないかった。

怪物達が支配する空をただ飛び、一度たりとも落とされた事が無いという、ウルレイカの異常性に誰も気付いていなかったのだ。

彼女曰く

「最速とか最強とかさ、空を飛ぶのに関係無いよね」

その一言と共に、最新型魔法杖“カノン・フォーゲル”の完全制御に成功。

三十人以上居た筈のテストパイロットが同時に彼女へと殺到したが、誰一人として彼女に届く者は居なかった。

彼女は魔女としては才能に恵まれなかった。

しかし、その魔女としての才能の無さを覆してしまう程の「空を飛び、戦う才能」に恵まれた。

「クシヤトロワ軍曹も知ってるだろ？」  
こうせいじへん  
 「降星事変」

「私はまだ子供でしたね」

「ボクもさ。だからまあ、先輩達に聞いた話や資料でしか知らないんだけど、聞いた話だけでも解るよ。あれは地獄だよ」

今から十年前、連邦の空戦魔導部隊が超高度航行試験中に衛星軌道にて異変を発見し、これを報告。

連邦空戦魔導部隊は引き続き異変の調査を行う為、異変が発見されたポイントへと向かい、音信不通となった。

「十年前でも今でも、最精鋭の部隊が突然行方不明になった」

「超高度のエネルギー溜まりですよね」

「うん。あまりに濃すぎるエネルギーに急に触れた事で、内燃エネルギーと空間エネルギーが混ざり、そのまま空間エネルギーへと融けてしまう」

「魔女と魔導師の死因の一つの「エネルギー病」

「本来なら何年もかけて進行して、気付いた時には手遅れな病気が一瞬で発症してしまう程の濃度のエネルギーが衛星軌道にあつた」

長い期間エーテルに関わり続けていると、自身の内燃エーテルと空間エーテルが混ざってしまい、意識の混濁や昏睡を引き起こす。

そして最悪の場合は、内燃エーテルと空間エーテルの差が判別出来なくなり、空間エーテルに「融けてしまう」。

と言つても、この事態に陥る事は極めて稀であり、大体は意識の混濁や昏睡が起きた時点で治療を行い、人によっては一時的に軍務から離れる。

ナジエーリアはこの時、結婚し子を授かっている。

もつとも、発症しない者も居る為、死因として戦死や他の病死の方が多し。

魔女魔導師の職業病と言える病だが、急に最悪のケースに陥る事は有り得ない。

しかし、あの事件ではそれが起きた。

「原因は未だに解らない。だけど、アレのせいで世界は滅びかけて、何百人もの魔女魔導師が「融けた」」

バーバヤーガ隊舎の空気が一気に重くなったのを、ウルレイカとシルヴィアは感じた。

あの事件を生き残った者にしか解らない悔恨、バーバヤーガというナジエーリア・トリアが率いている部隊共通の痛み。

「『降星事変』。その名の通りに、超高密度高濃度のエーテルが直径数十kmの『星』

となり地表へ落下。そして、天内の先代巫女を始めとした魔女魔導師達が多数の犠牲の上にこれを破壊して、あの事件は幕を閉じた」

「そう、聞いていますね」

「ああ、そうだ。ボクも聞いているだけで真実は知らないけど、明日はリトリアや菊代にとっては辛い日になる事は確実だよ」

リトリアも菊代も掛け替えの無い家族を喪っているんだから。

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

「満代そっくりになったものであるよ」

「私は、そんなに御母様に似てますの?」

「目元は父譲りのタレ目であるが、それ以外は満代そっくりであるよ」

ゆつくり、ゆつくりと菊代の頬や髪を撫でるナジェーリア。菊代も理解しているし、痛感している。側に居るボリスもそうだ。

自分は親を喪い、ナジェーリアは夫と娘と部下達を喪った。

喪失は数や質では表せない。しかし、その数が多ければ多い程に傷は深くなり、質が悪ければ悪い程に消えなくなる。

ナジーエリアや菊代が特別な悲劇ではない。だが、当時の「降星事変」の生き残りの魔女達は語る。

語り継ぐ事しか出来ない。忘れぬ為に。

ナジーエリアやリリーヤ達数百人の魔女魔導師が「降星」を抑えつけ、当時最強の魔女であった天内満代が「降星」を射ち抜き破壊し、あの事件は幕を閉じた。

天内満代とナジーエリア・リトリアの家族を犠牲にして。

「おば様、私は御母様ではありませんわ」

「分かっているよ」

天内満代はあの後、「エーテル病」に罹患した。

直径数十kmに渡る巨大なエーテルの塊を正面から射ち砕き、「降星事変」を終結させたが、「降星」を形成する超高濃度のエーテルを想定以上に浴びてしまった。

「満代は」

「おば様」

想定以上のエーテルを浴び、「降星」を射ち砕く為にかんりの無理をしていた満代は発症し、晩年は寝たきりとなり体を起こす事も困難になっていた。

「私は御母様ではありませんわ」

「……分かつているとも」

「ええ」

だがそれでも、命続く限り満代は菊代を愛した。

罅割れ崩れかけた手で頭を撫で、幼い菊代が話す日々の出来事を聞いていた。

優しい笑みで、涙を堪えて話す菊代に少しでも、ほんの砂粒程度でも、思い出を遺せる様に、菊代がこの日々を悲しい思い出としない様に、満代は菊代に愛と「一つの頼み事」を遺した。

「おば様、私は御母様に一つ「頼み事」をされましたの」

「「頼み事」かね？」

「おば様、御母様は「ナジエーリアをお願いね？」　そう、私に頼みましたわ」

「……………満代、君は大馬鹿である」

「御母様も言っていましたわ」

「遺す者が遺される者だけでなく、喪つた者の事まで想うなど、満代、君は本当に大馬鹿であるよ」

ナジエーリアが軍帽を深く被り直すと、ボリスは何も言わずに静かに部屋を出た。

今この場で知っているのは、ボリスとナジエーリアの二人だけだ。



ナジーエリアの夫「アレクセイ」と娘「タチナヤ」の最期を知っているのは、この二人だけ。

「……菊代、聞いてくれるかね？」

「勿論ですわ」

「……アレクセイは私には勿体無い、良き男であり腕の良い魔導師でもあった。娘の、タチナヤは私の髪を受け継いでくれて、将来は、私よりも……！」

アレクセイ・リトリアとタチナヤ・リトリアの最期は「降星事変」の余波によるものであった。

軍医であったアレクセイは、避難所に避難していた者達の治療と診察に走り回っており、タチナヤ達が避難していた避難所から怪我人が出たという報を聞き、急ぎ向かった。

「私は、大丈夫だと、私が守ると、言ったのだ……！　なのに、私は……！」

そして、怪我人の応急手当を終えて次へと向かう時、魔女達が抑えつけていた「降星」の一部が零れ、避難所の近郊へ落ちてきた。

「超高密度高濃度のエーテルの塊が地表に直撃すればどうなるか？」

「何も、出来なかった……！」

森と町が、文字通りに地図から消えた。

今でも、その爆心地周辺は巨大なクレーターとして存在し、高濃度のエーテル溜まり

となり復興の目処すら立っていない。

人も物も、何もかもが消えた。

ナジエーリアが愛した二人も例外無く、彼女が守る空の下で、消えたのだ。

「今でも、二人の顔が声が、目に耳に焼き付いて離れぬのだ」

「ナジエーリアおば様」

十年の歳月が過ぎても傷は深く残り、ナジエーリアを苛み続ける。

それでも前へ進もうと、笑みを湛え紫煙を燻らせ、二人が誇らしいと言ってくれた己で在り続けた。

「御二人は、おば様を恨んでいませんわ」

「……何故、君に解るといふのだ?!」

「私が、遺され喪った者だからですわ」

恨む者も居るだろう。恨まれても仕方無いと言う者も居るかもしれない。

しかし、菊代には、何も知らない菊代だから解る。

あのナジエーリア・リトリアが愛し、ナジエーリア・リトリアを愛した者が、彼女を恨む訳が無いのだ。

「何も知らない私ですけど、おば様は恨まれてはいませんわ」

「だから、何故、君に解ると言っている!」

「お婆様、私は御母様にお婆様の事をお願いされましたの。御母様は気付いていた筈ですわ。お婆様が御自分を責めていると」

「君達は、本当に大馬鹿者である……」

「当然ですわ。御母様はお婆様の親友で、私はその御母様の娘ですよ？」

そう、恨む訳が無いのだ。彼女を恨んでいるとしたら、それは自分自身だ。

満代は知っていた。ナジェーリアが誰かに恨み憎しみを背負わせる事をしない者だと。

背負えるものは自分自身で背負ってしまう、そんな人物だと知っていた。

「そう、そうであつたな。満代、私は君に世話になり、今は娘の菊代に世話になつてい  
る」

情けない話である。

言うとなジェーリアは、丸めていた背筋を伸ばし前を、菊代の目を真つ直ぐに見た。

「恨みの時間は終わりである。アレクセイ、タチナヤ、見ていてくれ給え」

満代が、君達が救ってくれた世界。今度は私達が救おう。

## 閑話

「それにしてもさ、クシヤトロワ軍曹？」

「な、何でしょうか？ ルーデルハイト大佐」

先程までの緊迫した様子とは打って変わって、年相応の悪戯染みた笑みを浮かべるウルレイカ。

それに嫌な予感を覚えるシルヴィアと、遠巻きに事態を観察するバーバヤーガ隊員達。

知っている。自分達は、あの「にんまり」とも「にへら」ともつかない笑顔が意味する事を知っている。

ナジエーリアやリーリヤ、公国のネームド魔女が何か面倒な事を思い付いた顔だ。

何人か逃げ出そうとしたが、バーバヤーガは仲間を見捨てない。確りと捕縛し、何が起こるのかを見守る。

まだ何人か抵抗しているが、たった数人だ。民主主義による、多数決で決定した。

バーバヤーガは撤退を良しとせず、同志シルヴィア・クシヤトロワ軍曹の散り様を確りと見届けるものである。

さあ来いよお。

「菊代や君を見てさ、いつも思うんだよね」

「天内の巫女と私、ですか？」

「そ、君と菊代」

神皇国のネームド魔女巫女と、ネームド魔女が率いる魔導部隊の一隊員。

魔導に関わっている以外に共通点はない筈だが、ウルレイカはシルヴィアと菊代を並べた。それが何を意味するのか、シルヴィアだけでなく他隊員達も首を傾げて考える。

天内の巫女殿と同志軍曹、何かあるか？

解らん。

もしかして、ネームド魔女にしか通じない隠語？

同志軍曹に通じるの、それ？

まさか、同志軍曹はネームドだった？

勝手な憶測が飛び交う中、ウルレイカが立ち上がりシルヴィアの前に立つ。シルヴィアの身長は公国軍人の平均だが、ウルレイカはまだ子供と言える年齢で、身長は平均的なシルヴィアより頭一つ分低い。

「うん、やっぱりね」

「あの、ルーデルハイト大佐？」

「ん？ ああ、気にしない気にしない」

こっちは気にするんですけど……

シルヴィアは思ったが、ネームド魔女を下手に刺激すると何があるか分からない。ナジェーリアやリーリヤで嫌と言う程に学習している。

取敢えず、ネームド魔女が奇行奇言に走り出したら即放置撤退。バーバヤーガの暗黙の了解だが、今回の場合はシルヴィアが中心になっている為、シルヴィアは逃げられない。

そして、ナジェーリアが神皇国から帰ってくれば、何があっても絶対に、シルヴィアの淹れた茶と茶菓子を要求する。その時に、シルヴィアに何かあればどうなるか？

間違いなく、拗ねてへそ曲げて機嫌が最悪になる。

もう四十も半ばが見えてきて、茶と茶菓子が無くて拗ねて仕事しなくなるのは勘弁してほしい。

見た目二十代だからノーカンとか言っているが、シルヴィア軍曹と並んでみろよ。

なんかこう、無理してる感があるぞ。

若い隊員は、ちよつと無理してるぐらいがいい！とか言っているが、実際どうなんだ？

ボリス大尉、目が死んでたし、ちよつとじゃないぞ？

とか何とか、古参隊員の何人かが、ナジエーリア本人が聞けば確実に拗ねるであろう内容を考えていると、ウルレイカがグルグルとシルヴィアの周りを回り始めた。

「あの、ルーデルハイト大佐、本当に何を？」

「気にしない気にしない」

にこやかな笑顔を浮かべてシルヴィアを観察しながら周囲を回るウルレイカ。

その様子に、古参魔女の一人が呟く。

『鮫つてさ、獲物の周りを回るって言うよね？』

『同志軍曹、喰われるの？』

『隊章的には驚じゃない？』

『結局、喰われるじゃない』

後で覚えている……！

シルヴィア軍曹は、古参魔女達への仕返しを決めた。

だが、仕返しの内容次第では更に倍返しされるかもしれないので、お茶とお茶菓子の量を密かに減らす事にした。

減らした分は、ナジエーリアの取り分とする。

減らしたら気付くが、増やしたら気付かない。気付いているかもしれないが、気付かない。

ナジェーリア・リトリアは、そう言う人だ。

と言うか、鮫は解るが鷺はどうなんだ？

私はどれ程弱い生き物と思われているんだ。

だけど、鮫は無理。だって、あいつら竜巻に乗って空飛んで来たり、雪山泳いで来たり、蛸と合体して来るもん。

流石に幽霊になった鮫が町中を泳ぎ回っていたのには驚きたが、安定のナジェーリア節が炸裂してリーリヤに押し付けて解決した。

鷺？

目の前の鷺は本当に無理だ。

初めて部隊の一員として飛んだ空で、いきなりけたたましいサイレンの音が聞こえてきたら、満面の笑みで詩歌を歌いながら降ってきた。

あれは本当に死ぬかと思った。ボリスが助けってくれなかったら、シルヴィアはここには居なかっただろう。

聞けば、あのサイレンは彼女の魔法杖が一定以上の加速をした際に両主翼が空気を切り裂く音らしい。

それで、あんなけたたましい音を立てながらやって来るんだから、目の前の鷺は本当に無理だ。



しかしだ。鮫も無理、鷺も無理だとすると、他の隊員達が言う様に、本当に弱い生き物という事になる。

相手が鮫とも鷺とも言えない何かであるという事を除けば。極々一般的な魔女なのだろうが、陸上で鮫に追われたり人型の荒鷺に周囲を回られたりする魔女は居ないので、ダメかもしれないというか混乱してきた。

「うん、やっぱりそうだね」

「ルーデルハイト大佐？」

「菊代にしろ君にしろ、どうして乳や尻にばかり肉が付くんない？」

「ふえ？」

思わず気の抜けた声が出たが、そんな事は知らない。

大体、どうしてと聞かれても特に意識した事も無いから解らない。背後で古参魔女達が、自分達の胸部や臀部を比べているが、比較物が給湯室から持ってきたボウルなのは何故？

「リトリアは、君と菊代に比べたら薄いけど十分に有るし、他の魔女…… ああ、ブレーメイヤーは無いよね」

シルヴィア個人としては、ナジエーリアが理想的なスタイルなのだが、現実には甘くない。

何をしなくても、肉がその二ヶ所に集まるのだ。ナジエーリアの様な、細く引き締まりつつも確りとした凹凸のあるスタイルには程遠い。

しかし、リーリヤ・ブレーメイヤ少将は細く引き締まりつつも確りとした凹凸が無い。彼女はとてもスレンダーでいて平坦でいながら平原で、最近は目の前の彼女に、スリーサイズの一番上と一番下で負けたと知り愕然としていたが、真ん中で勝つてからまだやれると諦めてもいなかった。

「ボクは成長期なのに勝てるって、ブレーメイヤの歳幾つだっけ？」

ウルレイカの問いに、シルヴィア含むバーバヤーガ全員が目を逸らした。

リーリヤはナジエーリアとほぼ同期だが、ナジエーリアよりは年下である。

あくまで、ナジエーリアよりはであるが。

シルヴィアは、次にリーリヤがバーバヤーガ隊舎に来たら、お茶菓子を少しおまけしよう。

そう、思った。

## イングヒルト・クルーガー

保安灯に照らされた静かな通路を姿勢の良い長身が派手な靴音を立てて歩いていく。その靴音の主、油污れの酷いツナギに身を包み、癖の強い金髪を強引に後ろに纏めた壮年の女が眉間に皺を寄せている。

「ルーデルハイトの小娘は何処へ行った?！」

「クルーガー班長、ルーデルハイト大佐は公国に…… ひっ！」

同じ様に油污れに塗れたツナギに身を包んだ男が彼女の探し人の行き先を告げるが、一睨みで悲鳴を上げて黙ってしまう。

「公国だあ? 一体全体、そいつはどういう事なのか説明してほしいねええ」

男の頭を両手で掴み、三日月に吊り上げた笑みを見せて問う。

「ふ、『福音の魔女』の話をしに行くとおお!」

明らかに苛立った様子の女に男は震えながら少女が居なくなつた理由を説明する。

説明した瞬間、頭を掴む力が強くなり頭蓋が軋みを上げた。

「は、班長! ダメ、ダメですう! 出ちやう! 俺出ちやいますう!」

「喧しい! 気色悪い声出すな、バカガキ!」

黙れと言わんばかりに頭突きが頭部に命中し、男が頭を押さえて蹲った。

「『カノン・フォーゲル』の整備も終わってないつてのに、あのバカ娘は……!」

女、『イングヒルト・クルーガー』は乱暴に頭を搔き、空いた整備用ハンガーを睨み付ける。

そこにあつた筈の鋼の翼の姿は無く、ぽっかりと空いた空間のみが広がっていた。

「あの、クルーガー班長？」

「なんだい？」

「ルーデルハイト大佐ですけど」

「どうせ、ナジエーリアのところにでも居るんだろ？」

「……よく分かりましたね」

「舐めてんのかい？」

「い、いえ、そんな事は無いですう!」

「情けない声出すんじゃないよ!」

アイアンクロー、頭突きと続いて次は拳骨が頭に突き刺さった。痛みに呻く男を尻目にイングヒルトは溜め息を一つ漏らした。

ウルレイカも年頃の娘だ。友人と遊んでも、異性と一発やっけていてもおかしくはない。自分がそうだったから、きつとそうに違いない。

ウルレイカは少々体型が貧相だが、それが良いと言い男も居るだろうし、それが好きな女も居るだろう。

魔女だから、同性愛はノーマルだ。もし、ウルレイカがシルヴィアなり菊代なりを連れて来ても、笑って受け入れる。

しかし、何の連絡も無く公国に行くのは勘弁ならない。

ウルレイカは体験してはいないとはいえ、帝国と公国は最近まで戦争をしていたのだ。

「まったく、あの小娘が」

「まあ、あまり行ってほしくはないですよね……」

「これからの事を考えたら、そももいかんがな」

戦争は終わった。発端が発端で元々、両国が乗り気ではない戦争だったのだ。遺恨や禍根もそこまで深くはないが、それでも象徴とも言える帝国最強の魔女が、簡単に嘗ての敵国に行くなという話だ。

あの戦争を体験しているイングヒルトにしてみれば、よくもまあ、初対面の筈の公国の鎌槌の魔女にあそこまで馴れ馴れしくいけるものだと感じする。

あの戦争は、なあなああの馴れ合いの面があったとは言え、ナジェーリア・リトリアとその部隊は本気で帝国を滅ぼしにきていたと思う。

何故かは知らないが、使節団の一人が何やらナジェーリアにやらかしたか、言ったか

して彼女の逆鱗に触れたらしい。

だから、使節団は魔女か魔導師を中心に組めと言ったのに、相手を録に魔女の常識を知らない政治家と平和団体で行きやがって、お陰さまで被害無しの睨み合いで終わる筈の戦争が、被害たつぷりの殺し合いになってしまった。

最後は、使節団のバカやらかした奴を公国に差し出してナジエーリアの怒りを鎮めて、そのまま講和。

あのままだったら不味かった。

「まあ、いい。ナジエーリアのお気に入りの娘の茶でも飲んだら帰ってくるか」

「え？ あの『福音の魔女』は？」

「共和国の『ガラスの魔女』が見たってだけで、最近のエーテルの希薄化との関係は不明だしね。正直、ねえ」

「いいんですか、それ？」

「古い顔馴染みだし、信用してない訳じゃないけど、どうにも決め手に欠ける」

「イングヒルトも今は第一線からは引退したとは言え、大国である帝国でかなり鳴らした魔女だ。」

『降星事変』にも参戦した。あれは地獄だった。

これから後にも、あれほどの地獄は起きないだろう。

「面倒な話だよ」

世界の終わりに現れるというのが「福音の魔女」ならば、あの「降星事変」は世界の終わりではなかったのか？

あの地獄がそうでないなら、これからあの地獄以上のものが待っているという事なのか。

解らないが、イングヒルトは既に引退した身であり、今は機工式魔法杖「カノン・フオーゲル」の主任整備士だ。

もう前線に直に関わる事は無いし、関わる気も無い。

「クルーガー班長」

「なんだ？」

「連邦がキナ臭い動きをしているって噂あるじゃないですか、あれって」

「あの自称『世界の警察』がなんだって？」

イングヒルトの連邦嫌いは筋金入りだ。何やら若い時分に何かあったらしいが、それを知るのはナジェーリア・リトリアの世代の魔女のみだ。

男も連邦はあまり好きではない。食べ物や人間が嫌いなのではなく、連邦という国の在り方が嫌いなのだ。

「あのチンピラ国家め、次は何をやらかす気だ」

「前の公国との戦争にも、首突っ込んできましたからねえ」

「神皇国が制止してくれなかったら、今頃三国戦争になってたよ」  
連邦の在り方は、世界の争いの調停という名のちよつかいかけ。

国同士の争いが起これば、必ず首を突っ込んできて余計な混乱を招く。世界中からの疎まれ者、それが連邦だ。

あれと仲良くしているのは、博愛主義の共和国と本当の調停者の神皇国くらいなものだ。尤も、その二国も義理で仲良くしているに過ぎない。

前回の戦争も案の定、連邦が嗅ぎ付けて首を突っ込んできたが、神皇国が「ちよつと、大人しくしようか（半ギレ）」

と、穏便に制止してくれて余計な混乱も無しに短い期間で、両国に大した傷を残さず終結する事が出来た。

「あの国、ちよつと滅んでくれねえかなあ」

「クルーガー班長、不穏な発言止めませんか？」

「良いじゃないか。ちよつと滅んで、学べば」

「あの国の人達は、気の良い人達なんですけどねえ」

「魔女も気風が良いからな。魔女とか、こつちに亡命させて、国だけ滅んでくれねえかな」



「クルーガー班長……」

少し疲れた表情で呟くイングヒルトに溜め息を吐く部下。

よく解らない“福音の魔女”よりも、何をしでかすか解らない国の方が面倒。  
それが疲れた二人の出した結論であつた。

## 三国合流

「將軍、そろそろお戻り下さい」

「嫌である」

「あの、おば様？」

「私は空腹であるし、茶が飲みたいのだよ」

四角い顔のボリス大尉が、また始まったと眉間に皺を寄せる。

ナジェーリアは何と言うべきか、妙に食い意地が張っている。食事は三食欠かさず、間食夜食もしっかり摂る。

その上、酒も甘いものも好きで愛煙家でもある。生活習慣病まっしぐらな生活を送っているが、さっぱりその気配は見えず、ボリスが付き従ってきた十三年間で知る限りだが、ナジェーリアの体型が変わった事は無かった。

本人もそれを自覚してか、好きな様に食べて飲んでを大いに楽しんでる。

「おば様、ボリス大尉も仰っていますし、ここはお帰りになられては？」

「いやーでーあーるー」

着いていたテーブルに倒れ込みしがみつки、拒絶の意を示す。意地でも何か出すまで

動かないつもりらしい。

『あの、ボリス大尉？ おば様って、確か私よりダブルスコア以上トリプルスコア未満の年齢の筈では？』

『先代巫女殿と同世代ですので、確かにそうです』

『あの、少し自由過ぎでは？』

『天内殿、慣れです』

『慣れ……!?!』

四十も半ばが見えてきて、テーブルにしがみついているのはどうなのかと思いはするが、ボリスにとっては見慣れた光景であり、懐かしい光景でもあった。

昔はこうやってナジェーリアが駄々を捏ねると満代による砲撃が叩き込まれ、ナジェーリアが笑いながら逃げるといのが神皇国を訪れた時の定番であった。

「あれであるよ、菊代。ほら、〃一文字違いでキリタンポー〃というものが食べたいね」

「おば様、それは冬のものですわよ？」

「そうなのかね？ ふうむ、神皇国の鍋料理は満代に馳走になったが、キリタンポーは食べた事が無かったから残念であるね」

「いまだテーブルにしがみついているナジェーリアが口を尖らせ、残念だ無念だとブツ

ブツ呟いている。

菊代は、今がテーブルから引き剥がす絶好のチャンスなのではとボリスを伺うが、彼は首を横に振る。

『ボリス大尉、まだですか？』

『まだです。まだ、將軍の手がテーブルに掛かっています』

見れば確かに指がテーブルの縁を掴んでいる。

梃子でも動かない意思表示、菊代はナジエーリアから確固たる意思を感じた。

こんなくだらない事で、そんな確固たる意思を見せないでほしいのだが、ナジエーリアらしいと言えづらい。

そんな事を菊代が考えていると、空腹からか微妙にタレた雰囲気、ナジエーリアがこちらを振り向いた。

「そう言えば菊代、神皇国語で解らないものがあるのだよ」

「なんですの？」

「〃一文字違いでキリタンポー〃」と言うが、一文字違うと何になるのか。教えてくれ給えよ」

この人は……！

どの口で解らない等とほざいているのか。明らかにニヤニヤしながら言……！

・・・待ちなさい。落ち着きなさい、天内菊代。

おば様のペースに嵌められてますわ。

「おば様、私達巫女は『そういつた話』は穢れとして禁じられてますのよ?」

巫女としてそういつた話題はNGだと言えば、流石のおば様も追求してこない筈……  
ん? なんですのボリス大尉、その顔は?

「ふむ、菊代。『そういつた話』とは一体どういつた話であるのかね? 教えてくれ  
給えよ」

「ぬう……!」

やられた。何が流石のおば様も追求してこない筈、だ。

相手はあのナジェーリア・リトリア、当たり前前に追求してくるに決まっている。

いつの間にか愛用のパイプを口の端に噛み、口元に笑みを湛えながら紫煙を燻らせて  
いる。

「おば様、当家は禁煙ですよ?」

「はっはっは、話を逸らそうとしても無駄であるよ」

さあ、教えてくれ給え。

ナジェーリアがニヤニヤ笑いながら菊代を問い詰める。

茶も何も出ないなら、暇潰しに付き合い給えよ。ナジェーリアのそんな声が聞こえた

気がした。

何と言うか、もう砲撃叩き込んだ方が早いかもしれない。

菊代が天内家伝統の砲撃絶対主義射ては解る。射ち抜けば確実を発症しかけている横で、ボリスが片耳を押さえ

眉をひそめた。

「どうかしたかね？ 同志大尉」

「将軍、通信はお持ちでは？」

「私は電話の類いが嫌いだね」

「そうでしたね。では、こちらを」

ボリスが懐から差し出した通信機からコードを引き抜くと、賑やかな喧騒に埋もれるようにして情けなくて必死な声が聞こえてきた。

『将軍！ ボリス大尉！ 早く帰って来てくださーい！』

ナジェーリアのお気に入りであり、事務と炊事に特化した何故に軍人やつてるか解らないシルヴィア・クシャトロワ軍曹の救援要請であった。

『同志軍曹、何があつた？』

『あ、ボリス大尉！ ルーデルハイト大佐が…… って、ちよつと大佐!』

『やあ、カレンデイト大尉。久し振り、リトリアは居るかな？』

『おや、ルーデルハイト大佐。どうかしたかね？』

片目を閉じ口角を僅かに吊り上げて、ナジエーリアはウルレイカの呼び掛けに答える。

『あれ？ 警戒モード？』

『はっはっは、いきなり我が家に現れた鷲をどうするか考えているのだよ』

ナジエーリア周辺のエーテルが彼女の内燃エーテルに反応し、鎌刃の形に形成されていく。

『やだなく、ボクは“福音の魔女”の話ついでに、連邦料理をご馳走に來ただけさ』

『連邦料理、脂と肉と油であるね……！』

『その通り』

『嘗て、一度だけ連邦を訪れた時に揚げ鶏と揚げ芋を食べたが、あれはいけないね。麦酒が進み過ぎる……！』

言うが早いのか、ナジエーリアは空間からエーテルを抽出、鎌を形成し目的地へと刃先を伸ばす。

「さあ、同志大尉。私に掴まり給え！ 一気に帰るよ！」

「將軍、それよりも一体何時頃何をしに連邦に……?!」

ボリスが言い終わる前に彼の肩辺りを掴み、鎌による引寄せで天内家より消える二人。砲撃特化の魔女の動体視力でも影すら追えず、開かれた窓しか見えない。

一体、どんな速度で移動しているのやら？

「まったく、本当に吹雪みたいな人ですわね」

突然吹き荒んできたかと思えば、いきなりピタリと止んで何も残さない。

菊代はナジェーリアが座っていた椅子を見る。

今よりも幼い頃、母と二人で向かい合い談笑する姿。思い出してみれば、やはり口の端にパイプを噛んでいた。

「そうですわね」

あのパイプから燻らせている紫煙と同じだ。ナジェーリアが来た跡は、時間が経てば消えてしまうものばかり。

吹雪の様に、いずれ溶けて消えてしまう雪と褪せていく記憶しか残さない。

母が死に、ナジェーリアが家族を喪い、彼女はそれ以前に比べてあまり神皇国を訪れる事が減った。

何かの折にふらりと現れる事はあっても、長話をする事無く帰ってしまった。

先程まで賑やかだった洋室には、菊代とナジェーリアが残した紫煙の端のみが居た。

「少し、寂しいですわね」

菊代は一つ言葉を口にすると、袴を翻し洋室を後にした。





豪華な部屋で長く豊かな金髪を揺らしながら、小柄な影が眩いた。

「『福音の魔女』、ねえ？」

「『陛下』も心当たりが？」

「うむ、確かに実際見たのは妾。しかし、今までの『数度の人生』でも『福音の魔女』など見たことが無い」

「ボケたんじゃないですか？」

「あ？」

豪華な部屋で鋭い打撃音が数分間休まず響き、長く豊かな金髪が倒れた。

## 共和国 ガラスの魔女

## テレジア・デイトリツシユ

絢爛豪華、正にその言葉に尽きた。

金糸銀糸をふんだんに惜し気も無く使い、大小様々な宝石を散りばめた一室。それが、彼女の城であった。

「あゝあ、暇じやのう」

小柄な女が豊かな金髪を長椅子に遊ばせ、敷き詰めたクッションへと沈む様に凭れ掛かる。

「おゝい、誰か。誰か居らぬか？」

小さな手足をバタつかせながら、誰か居ないかと声を上げるが返事は無く、そこには静まり返つた空間しか無かつた。

「なんじやなんじや、妾は偉いんじやぞ。妾が呼んだら、誰彼構わず老若男女問わずに馳せ参じるべきじやろうに」

不満気に鼻を鳴らし、近くに置かれた籠から林檎を一つ摘まみ上げかじる。

「連邦には、この瑞々しい林檎をギトギトの油で揚げる料理があると言うが、真かのう

？」

一口二口三口と、軽い音を立てて果肉を咀嚼していく。

そう言えば、公国のあの変人魔法の好物は干した林檎の蜜漬けを、これでもかたつぷり使ったパイだった筈。

干して甘味を増した林檎を更に甘い蜜に漬け、これでもかと山のようにパイ生地を敷き詰め重ねて、上からカスタードクリームをたっぷり塗りたくって蓋をする前に、干し林檎を漬けていた蜜をこれまたたっぷりとかけてから、生地で蓋をして、その上からまた蜜を塗ってから焼き上げる。

思い出すだけで胸焼けがしてきた。

何時だったか、五国会談時にそれを出されてから暫く甘味を避けた時期がある。

最早、林檎なのかパイなのか糖なのか判別がつかないものを、あの変人魔法は五国会談で出してきた。

味の系統としては嫌いではない味だったが、過ぎたものは及ばざるといふ言葉の通り、甘味が過ぎた。

「何で、あやつはあれで太らんのか」

しかもだ。あの変人魔法は周りが次々とギブアップしていくものを平然と一ホール平らげ、その後の会食でも豆粒一つ野菜くず一つ肉片の一つも残さず完食していた。

魔女がいくら常識の範囲外にいるとしても、過食による体型の変化は起こる。

しかし、あやつは子供を産む前から、正確には旦那と出会ってから、体型の変化は無いと言いつつ放った。

「思い出したら、腹が立ってきたのう……!」

今は亡き旦那が、一番抱き着いたりスキンシップが多かった頃の体型と体重を、＋12～3 kg以内の誤差で維持していると言う。

何だその、惚気話は……?!

こちらら、相手が居ねえんだよ!

んな、バタバタしてた時期は何百年前だと思ってるんだ?

くそつたれ!

「陛下〃、何をなさっておいで?」

「おお、リユーヌ〃。遅いではないか」

「もう一度言います。陛下、何をなさっておいで?」

「暇なのじゃ」

「それは暇でしょうね。しかし、陛下は既に隠居の身」

「分かっておるわ〜」

リユーヌと呼ばれた侍女は溜め息を一つ吐き、女が摘まみ上げている芯だけになった

林檎を受け取り、手中へと消した。

「相変わらず、便利な体じやの」

「お褒めに預かり光栄です。しかし、私のこの身も元は」

「よいよい、知っておる。妾からの派生じやろ」

「更に特定するなら、原典は『四回目』の陛下です」

そうかの。眩き女は背後に立つ侍女に目をやる。

「——思えば、随分と遠くに来たものじや——」

女の歴史は所属する国家である『共和国』と同じだ。

共和国建国から今まで、何百何千何万と魔女を見てきたが、今世の魔女の豊かさは過

去の比ではない。

各国だけでなく各地に、村や家族単位で優秀な魔女が山程現れている。

「陛下、如何なされました？」

「うむ、やはり妾はゴイスーだな」

「はっ！」

「のう？ 何故、妾に対する当たりが厳しいのじや？」

この侍女のリューヌもそうだ。今は侍女をしているが、これでも腕利きの魔女であり、共和国の切り札の一枚でもある。

「はて、何の事でしょう？」

「いやいや、小首傾げてカワイイ年じゃないじやろ」

「ああ？ 年齢詐称ぶつちぎり魔女が何を言ってますかね？」

「お？ やるか？」

切り札であり己の右腕でもある侍女が手袋を嵌め直し、エーテルの抽出と固定を始める。

彼女程の腕前であれば、エーテルの抽出と固定を相手に悟らせる様な不手際はしない。今は、そういう場だからか。

パフォーマンズの面が強く出ている。

「言っておくが、妾はゴイスーじゃぞ？」

「はあ、疲れました。今宵の夕餉は『あのアップルパイ』で宜しいですね」

「待てや。妾、血糖値上がり過ぎで死ぬぞ？」

「ご心配無く、血糖値の上がり過ぎでは急には死にません。ゆるゆると様々な病気を発病して死ぬだけです」

「もつといかんわー！」

叫び、女はリユーヌに視線を合わせる。

共和国を始めとして、公国、神皇国、帝国、連邦。長い歴史の流れの中、この五国は

特に力を得た。

国としては若い連邦が不安要素ではあるが、今の世界は一触即発の過去に比べて内外共に安定している。

「ええい、よいか！ 妾を誰と心得ておる?!」

「共和国最強の魔女の癖に隠居かましたニート」

「んぎいー！ 言い返し難い返しをしておつてえー！」

“王国”という不安要素もあるが、あの国は中東近辺の国家の集合体。首長も暗君ではないし、“ランプの魔女”が王国に居る限りは暗君や暴君の類いが即位する事は有り得ない。

王国だけでなく、共和国以外の国でも寝物語の一つとして語られる“魔神”を従える魔女だ。あれに嘘の類いは通じない。

「なら、仕事してください」

「えー、妾隠居してるし〜」

「火炙りには良い日和ですねえ。あら、火炙りにちようどいい魔女が居るではありませんか」

「解った。解ったから、止めよ。頼むから、お主は声と顔から感情を消して喋るでない」



火炙りは二度とゴメンだ。あれは「五回目」だったか。

あの時は少々錯乱して重税を課したら、民衆から反乱くらって広場で火炙りにされた。

そのお陰で「六回目」では善政を敷けた。

「五回目」の原因はあれだ。新しい魔導の探求で、すこしクスリを使い過ぎた。あれで頭が沸いた。

それで意識が醒めたら、炎がメラメラ燃えて火炙り真つ最中だ。

世界広しと言えど、「あー！ やっちゃったかー！」が最期の言葉の魔女は妾以外に居ないだろうの。

「まあ、仕事をするとして。のう？」

「何です？ 陛下」

「妾が呼んだ魔女は、どうなっておる？」

「あんな資料ばら蒔いて、誰が来ると思いますか？」

「え？ 普通、魔女なら未知が現れたら飛び付くじやろ？」

「陛下、時代は変わりました。帝国のウルレイカ・ルーデルハイト大佐は、公国にてナジェーリア・リトリア將軍と神皇国の天内菊代様に連邦料理を振る舞っています。また、連邦も内政のゴタゴタで動けず、他の有力魔女も陛下が信用できないと」

「なんじやそれえー！」  
豪華な一室に悲痛な叫びが響いた。

## ガラスの国

テレジア・デイトリツシユを語る際に、決して外す事の出来ないモノがある。

「陛下、これも御自身が招いた事態。如何なされるおつもりで？」

「如何も何も、このままだとエーテルが消失する可能性があるから話をしようと、招集を掛けた訳なんじゃが」

「しかし残念ながら、陛下の信用の無さが原因で誰も集まりませんでしたね」

「はは、と感情を込めずに無表情に笑うリユース・テュレイルもそれに深く関係している。」

いや、彼女には現代に生きる魔女全てが関係している。

「『現代魔女の始祖』と謳われ、共和国の象徴と祭られるにも関わらず、これですか」

「キツくね？ 妾に対してキツくね？」

「は、は、は、片腹痛いとはこの事ですね」

「この、毒舌メイドが……！」

彼女、テレジア・デイトリツシユは現在の肉体的年齢こそ若年層になるが、その精神的年齢は最年長となる。

それは彼女が持つ魔女としての特性、否、呪いが関係している。テレジア自身は祝福と言っているが、知らぬ者にとつては呪いに他ならない。

「良いか?! 妾とは共和国で、共和国とは妾なのじゃ!」

「はいはい、存じておりますとも」

テレジアに与えられた祝福呪いは、最初は只の約束に過ぎなかった。そう、子供同士の小さな約束でしかなかった。

しかし、約束を交わした二人の子供は時が経つにつれ、その身に宿した力を目覚めさせ、約束も振れ姿形を変えていった。

「存じておるなら、敬わぬか!」

「敬っておりますとも」

「だつたら!」

「しかし、陛下。敬い方は人其々に御座います。私には私なりの敬い方が御座います。が、まさか陛下、貴女様ともあろう御方が、御自身の願望を押し付けるのですか?」

二人は魔導を志し、数多の冒険を乗り越え、そしてお伽話に語られる“魔神”を討ち果たし、英雄となった。

「んぎいー! 詭弁を弄しおつてからに!」

英雄となった二人は、人々が安寧の日々を過ごせる場所を集まってきた人々と共に作

り上げた。

それが共和国であり、「建国妃」テレジア・デイトリツシュが唯一愛し、祝福を受け入れた者こそ「建国王」である。

「しかし、陛下。「福音の魔女」とは一体？」

「話をすり替えるな！……はあ、まあよい。先ず第一に「福音の魔女」なんぞ、妾も初めて見る」

「ですが、陛下が見付けられたのでしよう？」

「まあ、のう。散歩中に周囲のエーテルが急に稀薄になれば、その中心地に見た事の無い魔女が居れば、世界の最期だか滅びだかに現れる「福音の魔女」だと思ふじやろ？」

「即ち、陛下が発見された魔女が、「福音の魔女」である根拠は無いと？」

「確証も無いがの」

彼と彼女が嘗ての幼き日に交わした小さな約束は、「建国王」最期の日にその歪に歪み振れた。

ずつと一緒に居よう。そんな子供の約束は、時と魔導に歪み、王と妃という立場に振れた。

祝福は呪いとなり、テレジアに降り注ぎ、彼女を共和国に縛り付けた。

彼女に掛けられた呪い<sup>祝福</sup>は、共和国が存在する限り、テレジア・デイトリツシュは生

まれ変わり続ける。

「……陛下、それであの変人共が集まると？」

「まあ、半分ダメ元じゃしの」

「陛下」

「言うな言うな。妾からしてみれば、共和国以外の国なんぞいつその事、滅んでくれて構わぬと思つておる」

テレジア・デイトリツシユは死ねない。否、正確に言うなら、死んでもまた生まれる。

その立場は王族貴族平民と変わり、性別も何度か変わったりがしたが、共和国最強の魔女である事だけに変わりは無かった。

二人が興じた共和国という概念が存在する限り、テレジア・デイトリツシユはそれと共に在り続ける。

「もういつそ、全世界共和国とかどうじゃ？」

「陛下、発言にはお気をつけを。何処から話が漏れるか」

「ここは妾の宮殿、ここには妾とお主しか居らぬ」

「まあ、それもそうですね」

笑い泣き、天寿を全うした。悪逆として処刑された事もあった。

しかし、それも全て許した。彼女にしてみれば、共和国の民は自らの子供だ。彼女にとつて、反乱や革命は子供達のちよつとした反抗期でしかない。

今の民主政治となるきっかけの革命で、彼女は処刑された。王政による国内不安、世襲による独裁では立ち行かなくなると、革命家や思想家達は民衆に訴えかけ、そして革命を起こした。

後の歴史にも記される争い無き革命。これにより流れた血は、当時王族として生きていたテレジアとその他数人の王族達のみであつた。

王政の廃止を証明する為の処刑だったが、『建国妃』であるテレジアの首を落とす事を民衆は憂い、革命家や思想家達も自らの行いに涙を流し、処刑人は許しを乞うた。

しかし、本人は堂々と処刑人に斬首を命じた。

『ほれ、早うせよ。大の男が泣くでない。妾とこの国を思うのであれば、さつぱとこの首を落とせ』

当時のテレジアが遺した功績に特筆すべき点はない。

魔導の研究も前回と比べて緩慢、政治も特に悪政を敷いていたという訳でもない。

しかし、この革命がほぼ無血で成されたのは、彼女が裏から根回しをしていたからだと、歴史家は語る。

「まあ、何にせよじゃ。リユーヌ」

「何でしょう？ 陛下」

「『福音の魔女』が世界を滅ぼすと世迷い言をぬかすなら、妾は正面から奴を叩き潰す」

自らの行いで、民衆が無駄な血を流さずに済むように、自分と覚悟ある王族のみで済むように、彼女は誰にも悟られぬ様に裏から手を回し、革命の成功させた。

それが事実なのかは解らない。

何故なら、本人が昔の事は忘れたと言つて話さないから。

「リユーヌ、仕度をせい」

「陛下、どちらに？」

「判つておるだろうに。公国、ナジェーリアの元へ行くぞ」

「畏まりました」

一礼し、下がるリユーヌを横目に見て、テレジアは凄惨に笑つた。

「『福音の魔女』だか何だか知らぬが、妾の国民を害するなら容赦はせぬ」

共和国を興し、現代魔導の基礎を築き上げた魔女テレジア・デイトリツシュ。

その静かな怒りは、ゆつくりと燃え上がっていた。



はっはっはっ、君、凄い撫で肩であるね……！！

しかし、よく食べるし呑む。

公国、バーバヤーガ基地にて天内菊代あまうち きくよは見た。

「はっはっはっ、どうしたのかね？ ルーデルハイト大佐、手が止まっているよ」

魔女は健康家が多い。菊代もそうであるし、ウルレイカもそうだ。しかし、目の前のナジエーリアの飲食量は、少々魔女の常識からも逸脱している。

「いやね、流石のボクもここまで食べるのは予想外だよ」

「ふむ、そうかね？ ならば、ほら、菊代も食べなさい」

「あの、おば様？ 話の前後が繋がってませんのよ？」

パイプを口の端に挟む彼女を見れば、ほんのりと色白の頬に紅が差している。

ナジエーリアの酒量は知らないが、公国産の度の強い酒を二晩中呑み明かす彼女が、酒精の強さが半分に満たない麦酒で酔うのかとも思ったが、よくよくナジエーリアの周りをしてみると、帝国産の麦酒の瓶に混じって公国産のヴォートカの瓶が散乱していた。

俗に言う、チャンポンをした様だ。

「ほら、菊代。神皇国産の清酒もあるよ！それに、サシミもね……！」  
フオークに赤身の短冊を刺して勧めてくる。

いつもスキンシップが過剰とは言わないまでも多い彼女だが、今日はえらく構つてくる。

何故かと考えていた菊代だが、ふとナジエーリアが片手で持つ大瓶のラベルに目がいった。

「あの、おば様？」

「何であるかね？ 菊代」

「おば様が持つている大瓶ですけど、何故にそれがここに？」

ナジエーリアが持つ酒の大瓶は本来、公国にある筈の無いものであり神皇国でも一部の者しか、その存在を知らないものであった。

「これが、どうかしたのかね？」

「その酒は神皇国の神酒司みきのつかさでのみ醸造され、諸外国には輸出されていないもの筈」

「む？！」

菊代の言う通りに、ナジエーリアが持つ酒は神皇国において、神事に用いられる酒を醸造する神酒司でのみ生産されるものであり、諸外国へは輸出されていない。

神皇国でも、天内家を始めた有力家以外では、それがどの様な酒なのか知る者は

居ない。

そんな酒を、何故かナジエーリアが所持している。

菊代にはそんなつもりは無いが、口喧しい者達が見れば盗人だの何だのと、ナジエーリアを責め立てるだろう。

彼女がそれを聞くかは別であるが。

「ふむ、この酒かね？　これは、満代に貰ったのだよ」

「御母様に?!」

「うむ、私がヴォートカばかりを呑んでいると、満代に本当に美味しい酒を教えてやると言われてね……!」

「御母様——!」

思わず叫ぶ菊代に、笑うナジエーリア。それを見て、呆れるウルレイカが口を横にしながら言った。

「菊代の家つてさ、神皇国でもかなりの家柄でしょ?」

「ま、まあ、そうですね。天内家は太陽神の御遣いを預かる家ですから」

「神皇国の序列一位なのだよ!」

「で、その序列一位の先代巫女が、隣国の魔女に門外不出の酒を譲渡した、と」

「ル、ルーデルハイトも中々攻めてきますわね……!」

尊敬する母の不祥事に猛る菊代を宥めて、ウルレイカは素揚げにした鳥ももをかじる。

「あ、香辛料効かせ過ぎたー

あまりにナジェーリアが食べるので、途中で味付けの加減を誤ってしまった様だ。舌に僅かだが、痺れがある。

「ルーデルハイト大佐、こちらを」

「クシャトロワ軍曹、これは？」

「ヨーグルトで作ったドレッシングソースです。味は甘味より酸味を強く出していますので、揚げ物にも合うかと」

厨房からやって来たシルヴィアが持ってきた小皿には、白く僅かに粘りのある液体が入っていた。

「ありがとう」

「いえいえ」

少し着けて食べると、ヨーグルト独特の酸味と僅かな甘味が油と香辛料の辛味を流してくれる。

蒸し野菜も挟んでいたが、連邦料理は香辛料と油を多用する。どうにも、口の中がそれ一色になっていて、気分を変えたかったところに、これは嬉しい。

「同志軍曹、私もそれをくれないかね？」

「あ！ おば様、まだ話は済んでませんわよ！」

「人数分用意してますよ〜」

シルヴィアが盆に小皿を、人数分載せてやって来る。

ウルレイカと居た時は緊張していたのだが、隣国のネームド魔女、しかも親子共に上官と親交があり、世界を救った英雄の娘で巨乳巫女、なんて者が現れたのだ。

シルヴィア・クシャトロワ軍曹のキャパシティは瞬間で破綻崩壊し、緊張などは逆に吹っ飛んでしまった。

「――私みたいな一般魔女が、こんな所に居るなんて、何か起きたら死体も残らず消えるかな？――」

公国において、*“対ナジェーリア・リトリア用最終決戦魔女”*と影で呼ばれる一般魔女は、何も起きるなど祈りながら、酸味の強い柑橘をドレッシングに使ったサラダを準備する事にした。

「まあ、いいではないか。満代も酒一本で崩れる伝統なら、最初から無いも同然だと  
言っていたよ？」

「くうう、御母様なら言いそうですわ……」

「というかさ、菊代のカーちゃん、マツシブな生き方してるよね」



「恐らく、な」

「將軍、言つてましたもんね。いつか、天内さんとお酒を呑みたいって」  
いつか、嘗ての友と呑み交わした様に、もう一人の娘とも言えるあの子と、美味しい酒を呑んでみたいものである。

「だが、あれは少々、酔いすぎだ」

「へ？」

ボリスが溜め息を吐き、シルヴィアが見た先には

「はっはっはっ、しかし菊代。君、凄い撫で肩ではないか……！」

「おぼ様？ それは酒瓶ですよー！」

空いた酒瓶を菊代だと勘違いして、ダル絡みしている酔っ払いの姿があつた。

## ガラスの宮殿

公国では当たり前前の曇り空の下、ボリス・カレンディット大尉は冷や汗を流していた。見る者が見れば、鉄面皮とも呼ばれる彼の有り様に、目を見開いただろう。

それもその筈、今から彼が出迎えるのは、友好国の最重要人物であり、近代魔導の母とまで謳われる人物だからだ。

最近是要人によく会う。

ボリスは内心で嘆息する。自分はあくまでも、一般的な魔導師でしかない。

こう言うとは何か、とある事務と炊事に特化した部下が凄い顔を向けてくるが、どうあつても一般的な軍人魔導師でしかない事は揺るぎ無い事実だ。

その自分が、今は公国最強の魔女の副官だ。何の冗談だと言いたくなるが、現実なのだ。

現実を認めなければならぬ。そうでなければ、死ぬだけだ。

ボリスが軍人として戦場で、“降星事変”で学んだ事だ。

だから

「おっふ……」



「陛下」

若干、何かに酔っている見た目幼女の精神年齢最高齢な魔女と、旅行鞆が腰辺りからはみ出している。侍女も、現実だと認めなければならぬ。

「お待ちしておりました」

「ん？ おうおう、誰かと思えば、大尉ではないか。出迎えご苦労じやの」

「陛下が無理を言いまして、申し訳ありません」

「いえ、構いません」

訪問の連絡が入ったのは、つい三時間程前。

共和国は帝国を間に挟んでいるから、三時間で公国に着くのは不可能に近い。

ならば、どうやってこの短時間で公国に着いたのか。

「あの新型は要調整じやの。帰ったら、また魔導式を組み直さんと」

「しかし、リトリア將軍はあの加速を如何にして制御しているのでしょうか？」

「確かにのう。あの変人の事じや。どうせ、録でもない方法でも使っておるのじやろ」

「どうやらこの二人、共和国からナジェーリアの“鎌”を真似た新たな魔導で移動して

きた様だ。

しかし、よく新たな魔導を次々に開発するものだ。それが幾度となく繰り返してきた経験に裏打ちされたものだとしても、ボリスは素直に関心する。

通常、魔導というものは開発に時間が掛かる。

形式、消費エネルギー抽出量、触媒、使用環境その他諸々を過去の魔導資料と照らし合わせて実験し、組み上げては組み直しを繰り返して、漸く“図面上での完成”へと漕ぎ着ける。

ここから、実際に仮定された使用環境で目的を果たせるのかを実験する。

開発魔導の約九割は、ここで現役魔女魔導師達にダメ出しを食らいまくって、ふりだしに戻る。また組み直しとなる。

「ま、妾は天才じゃし。あの変人がどうやって制御しとるかなんぞ、パパツとお見通しじゃ」

「そうですか。では、どうぞぞ」

「え？」

ボリスを置いて繰り出される、テレジアに対するリユーヌの無茶ぶりに、テレジアが固まった。

まだ合流もしていないのに、これである。

テレジアが鈍い汗を流す横で、リユーヌは腰辺りからはみ出していた旅行鞆を自らの体に押し込み、なに食わぬ顔で立っている。

その表情は、テレジアの答えを急かすものではなかったが、テレジアはリユーヌの無

表情に焦りを隠せない。

「ディートリツシュ陛下、テユレイル殿。先ずは、中に入られてはどうでしょうか？」  
「お？ おお！ そうじゃな。どれ、案内を頼むぞ」

渡りに船と、テレジアがボリスの誘いに乗り、バーバヤーガ基地内へと足を踏み入れ、リユーヌもそれに続く。

「して、大尉よ」

「は、何でありましょうか？」

「ナジェーリアはどうしている？」

ボリスは言葉に詰まった。言える訳が無い。自身の直属の上官であり、公国最強の魔女が清酒とヴォートカと麦酒をチャンポンして酔っ払って、空き瓶を親友の忘れ形見と誤認して、撫で肩であるねなどほざいている。などと、言える訳が無い。国の沽券に  
関わる。

『同志軍曹』

『あ、はい。どうしました？ ボリス大尉』

ボリスはシルヴィアに念話を試みる。

すると、暢気な声が頭に響いた。

『將軍は今どうしている？』

正直な話、酔い潰れるなりしてきてくれたなら、体調不良なりの理由を付けて、面会を遅らせる事が可能になる。

その隙に、酒精を抜いて復帰させる。

元々、ナジェーリアは酒に強い。酔い潰れたのを見たのは、十三年の付き合いでも片手で数える程しかない。

『え、将軍ですか?』

『そうだ』

『あゝ、そのですね』

『どうした?』

なにも今日でなくてもいいではないかと思いはしたが、天内満代の忘れ形見である天内菊代と、杯を交わした事が嬉しかったのだろう。普段しない呑み方をしていた。

『将軍は……』

『同志軍曹?』

そこまで声が届いたところで、念話が途切れた。

何事かと、ボリスは再度念話を試みるが、その前に何故念話が途切れたのかが解った。

「はっはっはっ、何時振りであるかね? テレジア」

「相変わらず、神出鬼没じゃな。ナジェーリア」

酔い潰れていた筈のナジェーリアが、何食わぬ顔で口の端にパイプを挟んで現れた。まだ少し紅の差した顔だが、足取りは確りとしたもので、紫煙を燻らしている。

「良い度胸じゃの？ 妾の前で煙草を飲むとは」

「同じ魔女、気にするものではあるまいに」

薄い笑みを浮かべる二人、金と銀の二色が近付き、二人の内燃エーテルに影響されて、空間エーテルの波が可視化する。

ボリスはナジェーリアの腰に目をやる。鎌と槌はまだベルトに差したままだ。

リユーヌはテレジアへと目を向ける。テレジアの魔導は多彩だが、真に頼りとする魔法杖は屋内では展開し辛い。

頼むから、荒事は避けてほしい。従者二人の願いであった。

「カレンデイツト大尉」

「ボリス大尉」

と、そんな事を考えていると、ウルレイカと満代が、奥の応接室から走ってきた。少し遅れて、シルヴィアが向かってきているのも見える。

「お二人共、待ってくださーい」

「同志軍曹、君は軍人の筈なのだが？」

「いや、それよりも、どういう状況なのさ、これ？」

「テレジア・デイトリツシュ陛下ですわね」

「いや、それは分かるけどさ。なんで、共和国の要人が？」

「それを言えば、私達もですが」

公国、帝国、神皇国、共和国、四国の最重要魔女が一堂に会する。

その中心の金銀は、薄い笑みを深くし、笑い言った。

「『福音の魔女』の話かね？」

「うむ、しかし、人が増えるかもしれんろう。どうじゃ？ 妾の『宮殿』に招待してやろうか？」

「是非、招かれようではないか」

他の魔女を置いて進む二人の話、『宮殿』とは何のかと菊代が問おうとした時、屋外にとてつもないエーテル密度を感じた。

「今のは？」

「菊代菊代、外見なつて！」

単純な魔女としては下の下であるウルレイカが、興奮して窓の外を指差す。

そこには、菊代の常識を越えるものがあつた。

「どうじゃ？ 妾の『宮殿』は？」

「いや、懐かしいものであるね」

「いや、でも、これって……?」

「エーテルだよね?」

ナジエーリアが懐かしむ周りで、年若い魔女達は呆気にとられる。

「良い良い、気分が良いぞ。とくと見るが良い。これが妾の魔法杖である空中宮殿」

パンシヨン・ヴェルサイユ“じゃー!”

菊代達が窓から見上げる空には、バーバヤーガ基地よりも遥かに広大なガラス造りの宮殿が浮かんでいた。

## リーリヤ・ブレイメイヤ

金はあるところにはあるもんだ。

ウルレイカの内心を表すなら、正にこの言葉が正しいだろう。

絢爛豪華、贅の限りを尽くしたガラスの宮殿。軍で大佐という高級士官であるウルレイカでも、これ程に豪華な建築物には縁が無かった。

「はー」

「ルーデルハイト、あまり呆けてると、恥かきますわよ?」

「いやさ、菊代はどうなの? ボク、こんな建物初めてだよ?」

「テレビアの魔法杖。『パンション・ヴェルサイユ』内の装飾の豪華さに呆けるウルレイカを、菊代は冷静に論ず。

ウルレイカは、そんな菊代に自分はどうなのかと問うた。

「私の家をお忘れですか?」

「あゝ、神皇国の巫女家系総代表だったね」

「そうですわ。それに、この宮殿はデイトリツシユ陛下の魔法杖。という事は」

「これ全部、建国妃のエーテルって事?」



「ええ、そうですわ。この柱も調度品も何もかも全て、陛下のエーテルで形作られていますわ」

うへえ、とウルレイカが声を出す。普通の魔女としては下の下の彼女からしてみれば、これだけの建築物と調度品を全てエーテルで形作るなど、正気の沙汰ではない。

「この絨毯とか、寝れるよ？ ボクー」

自分の官舎の部屋なんて、板張りにカーペットを適当に敷いただけだ。しかも、官舎自体が古くて底冷えするし、部屋によってはすきま風も入り込んでくる。

建て替えればと言うが、帝国の国民性である質実剛健、質素儉約好き。悪く言えば貧乏性が出てきて、建て替えは次々へと繰り返してはならない。

機工式魔法杖の開発運用に予算が割かれているとは言え、もう少しなんとかかんないかなと、ウルレイカは調度品を眺めながら思った。

「皆様、この度はようこそ、パンション・ヴェルサイユへ御越しくございました。この先は、私リユーヌ・テュレイルが案内致します」

「沼の魔女か」

殆ど表情を変えず、リユーヌが姿を現す。

沼の魔女の名を持つ侍女、彼女の体はその名の通り、エーテルで構成された底無し沼だ。もし、自分達がここで倒れても、彼女は己の中に自分達を沈めて無かった事にして

しまうだろう。

まあ、そんな事をするメリットは無いし、ウルレイカも菊代も、リユーヌの許容量を超える魔導を扱う事が出来る。

その為、もしがあつても、リユーヌの沼から脱出は容易い。

「皆様、つかぬことをお聞きしても？」

ウルレイカがそんな事を考えていると、表情の変わらぬリユーヌが振り向き問うた。

「ナジエーリア將軍は何処に？」

菊代は背筋に、ゾツともゴツともつかない冷たい感覚が走った。

先程まで一緒に居たが、テレジアが魔法杖を展開した事による関係各所への連絡と対処の為、ボリスとシルヴィア達は遅れ、ナジエーリアはいつの間にか居なくなっていた。

そう、これが一番危ない。危険が危ない。

魔女や魔導師というものは探求心や好奇心が強い。ナジエーリアもそれに漏れず好好奇心旺盛だ。

しかし、だ。今回はそれが危ない。

なにせ、共和国の建国妃テレジア・デイトリツシユの魔法杖、彼女そのものと言つてもいいこのガラスの宮殿内に、“歩く治外法権” “存在がアドリブ” のナジエーリア・リトリアが監視も無しに入り込んでいる可能性がある。

正直、ここできなにかやらかすのは勘弁してほしい。

下手な事をして国際問題にでもなれば、同じ場所に居てナジーエリアを止められなかったとして、高い確率で神皇国にもなんらかの責が及ぶ。

ウルレイカもそれが分かっているのか、彼女も苦い顔をしている。

「あ、お、おば様はですわね？」

「遅いぞ、リユーヌ。妾をいつまで待たせるのじゃ？」

なんとかして誤魔化そうと、菊代が巫女根性で巫女祝詞を上げようとした時、待ち兼ねたテレジアが奥の間から現れた。

先程、バーバヤーガ基地に来た時より豪勢なドレスを身に纏っている。

「ん？ ああ、これか。これから、仮ではあるが国家間会談じゃぞ？ 正装ぐらいはせねばの」

あと、とテレジアが続けて、菊代を指差す。

「ここは共和国じゃぞ。むやみやたらに柏手打って祝詞あげて神道ブツパとか、満代の真似はやめぬか」

テレジアのこの言葉に、菊代は反応が出来なかった。

母の真似？

確かに、柏手を打って祝詞を上げようとしたが、それは誤魔化しの為で、本当にやろ

うとした訳ではない。

しかし、母の真似とはどういう事なのか？

「満代は、こっちが何かしてもしなくても、疑いがあれば山脈ぶち抜く砲撃と笑顔に向けてきたのじゃ」

テレジアの言葉に、隣のウルレイカがスゴい目で見てくるが、母のそういった面はよく知らん。

菊代が知っているのは、神皇国の巫女としての母だ。

悪戯の仕返しに、山脈ぶち抜く砲撃を笑顔で放つ面は知らん。

「まったく、すこしばかりナジエーリアの奴と悪戯しただけだというのにの」

「……陛下？ 因みにですけど、そのすこしばかりの悪戯というのは？」

「本当にすこししじゃぞ？ すこし、奴の巫女装束に細工して、あの胸部装甲が立体的に強調される縫製にただけじゃ。全部」

「それ、まったくもって少しじゃありませんのよー！」

まさかの悪戯内容に、思わず叫ぶ菊代。

一国家の象徴と一軍の代表格の二人が組んでやった悪戯が、巫女の制服である巫女装束の胸部立体縫製。

何をしているのかと問い質したくなる。

「なんじゃなんじゃ？ 親子揃ってユーモアが無いのう」

「まったくであるね」

「いや、巫女装束というののは、それだけで魔導具として機能するもので、下手に手を加えると…… って、おば様?!」

「やあ、私であるよ」

口の端にパイプを挟み紫煙を“(・▽・)”の形に燻らせたナジエーリアが、いつの間にか現れにこやかに手を振っていた。

「リトリア、何処行つてたのさ？」

「ルーデルハイト大佐、ここは共和国であり公国でもあるのだよ？ 会議をするなら、

意見は多い方がいいではないか」

ナジエーリアが言うと宮殿に軍靴の音が響いた。

「はあ、厄介な場に連れて来られたものだ」

その軍靴の持ち主、公国第二位 斧<sup>ふえつ</sup>鉞<sup>えつ</sup>の魔女、リーリヤ・ブレーメイヤ。

訓練の最中だったのか、魔法杖の媒介に使っている斧を肩に担ぎながら、長身の彼女は溜め息混じりに言った。

## さあ、話をしよう

「それで？ ナジエーリア。主要国四国のネームド魔女勢揃いとか、連邦か王国に攻め込むのか？」

「斧鉞の魔女」リーリヤ・ブレーメイヤが、形の良い唇を態とらしく喜びに歪めてみせ、隣で紫煙を燻らせているナジエーリアに問うた。

「はっはっはっ、同志リーリヤ。攻め込みたいのかね？」

「訓練指導中に拉致同然に連れて来られた嫌味だ。気付け」

「これはまた、判り難い嫌味であるね」

リーリヤの言葉に、菊代とウルレイカは一瞬ギョツとした顔を見せたが、合流したボリスやテレジア達が何の反応も見せていないので、本当にリーリヤの判り難い嫌味だと判った。

「というか、今の御時世にネームド魔女が他国に攻め込むとか、冗談でも言わないでほしい。」

「そんな事を考えていると、テレジアが口の開いた。」

「まあ、役者はまだ揃い切ってはおらぬが、始めるとするかの。リユーヌ」

「畏まりました。それでは皆様、此方へ」

テレジアからの指示を受けたリューヌが、軽く頭を下げ指し示す先、美しい飾りが彫られたガラスの扉が開いた。

「まったく、馬鹿げたエーテル操作能力だな。非才のこの身が恨めしくなる」

リーリヤが言葉に対して、さして感情の籠らぬ声で扉の先にある部屋の感想を口にする。

テーブルや椅子、花瓶に絨毯、柱に床に天井、その他装飾品諸々全てがテレジア・デイトトリツシユが作り出したものだ。

テーブルや椅子は木目まで忠実に、花瓶はその曲線、絨毯は起毛の一つ一つに至るまで、エーテルで作られているとは言えガラス細工とは思えない。

「いや、ブレーメイヤにそれ言われたら、ボクはどうなるのさ？　ボク、この中の一つでも再現しろって言われても、出来る自信無いよ」

今居る魔女の中で、二番目に小柄なウルレイカが長身のリーリヤを見上げながら、明らかに作った卑屈な表情を浮かべていた。

「解り易い顔をするじゃないか、ルーデルハイト。んん？」

「へっ、世界最高峰の陸戦魔女がよく言うよ」

リーリヤが非才と嘆くのは、あくまでも並の魔女に毛が生えた程度の内燃エーテル量

であり、その対とされるエーテル適性に関しては、リーリヤの右に出る者はそうはない。

最小の消費量で最大の結果を出す。それがリーリヤ・ブレーメイヤという魔女だ。

「御二人共、取敢えず席に着きませんか？」

顔を向け合う二人を見ながら、菊代がテーブルに着きながら言った。

「……………」

「……………」

「な、なんですよ、その目は？」

席に着いた菊代を見る二人の目は、なんとというか虚ろだった。正確には、その目は菊代の顔ではなく、ある一部分。そう、テーブルにどっしりと乗った菊代の“胸部装甲”を見ていた。

「なあ、ルーデルハイト」

「なに？ ブレーメイヤ」

「あれは、なんだ？」

「菊代だよ」

「そうか」

「そうだよ」



「……………」

「……………」

「だから、その目をやめてくださいいな！」

虚ろなやり取りをして、また虚ろな目でテーブルに乗る菊代の「胸部装甲」を見る二人。

思わず、両腕で隠すが、それによる「胸部装甲」の「形状変化」が、更に二人の目から虚無を引き出した。

最早打つ手無し。そう菊代が諦めかけたその時、隣に座るナジェーリアが動きを見せた。

「ふむ、そうであるね。菊代、モノマネを見せようではないか」

「へ？ あの、おば様？ 一体、いきなりなにを？」

菊代の言葉に答えず、ナジェーリアが取った行動は、彼女の母である満代のモノマネであった。

椅子に凭れ掛かり、そのままテーブルの下へと沈み込んでいく。すると、菊代程ではないが「まあまあ、ある方の胸部装甲」がテーブルに引つ掛かり、下から押し上げられる形で歪んで乗った。

「『会議が長引いて肩が凝って疲れた時の満代』」

「ふつつ……!」

言つて、遠くを見ながら浅く息を吐いたナジエーリアに、テレジアが吹き出した。

“足りない二人”は虚無に憤怒が混ざった。

「あの、お婆様? 御母様のモノマネって……」

「ふむ、ウケがまいちであるね。では、続きまして……」

「まだありますの?!」

「“クツキー等の乾きものを食べた後の満代”」

何かをかじる真似をした後、ポケットからナプキンを取り出し、テーブルに乗った“胸部装甲上面”を払う。

「くつつ……! ナジエーリア、それは反則じゃぞ……!」

「はっはっはっ、似ていたかね?」

「動きや作法、”ああ、また……”みたいな目がそっくりじゃ!」

「え? あの? 御母様が?」

菊代が混乱するのも無理はない。彼女の母である満代は、菊代の前では見本となるべく“神皇国の巫女”として振る舞っていた。

その母が、だ。

まさか、会議が長引いて肩が凝って疲れたからテーブルに胸部装甲乗せて楽をしてい

たり、食べ滓をだらしく払ったりしていた等と、菊代としてはあまり信じたくない事実が、隣の変人によって判明した。

シヨックはある。あるが、記憶を辿ればそんな気もしてくる情景が浮かんでくるので、菊代は即座に記憶に蓋をした。

「ナジエーリア」

「落ち着いたかね？ 同志リーリヤ」

「ああ、すまん。すまんから、その乗せている胸を正せ。千切るぞ？」

「はっはっはっ、余裕が無いね」

ナジエーリアのモノマネを見て、馬鹿らしくなったのか、リーリヤとウルレイカの目に正気が戻った。

「ボクは余裕あるよ。だって、ボクは未来あるし」

「ああ？」

「ボク、まだ成長期〜」

「よし、ちよつとかち割つてやるから、こつち来い」

リーリヤが腰に差していた斧を手に取る。

ウルレイカは僅かに、腰を上げた。

それに対し、菊代は溜め息を一つ吐き、ナジエーリアはパイプから紫煙を燻らせなが

ら鼻歌を歌っていた。

「ああ、待って待て。お主ら、ここをどこと心得ておる？ 妾、テレジア・ディートリツシユの宮殿じゃぞ？」

今にもやらかしそうな二人に、テレジアがうんざりした様子で声を掛ける。

テレジアが精錬したエーテル製ガラスの宮殿とは言え、ネームド魔女二人が内部でぶつかって、耐えられる造りには「今回」はしていない。

有事の際には即座の動きを取れるが、一応は会議用だ。

面倒は避けたい。

「取敢えず、席に着かんか。『福音の魔女』、これについての話じゃ」

テレジアはリユースに人数分の茶と茶菓子を用意させ、話を進める事にした。

## 王国 ランプの魔女

## フレスアード・スレイフアン

「では、聞こうではないか。『福音の魔女』とは、一体なんだと言うのかね？」

豪華絢爛に彩られた一室にて、魔女が長机に揃った。その中の一人、ナジーリア・トリアが紫煙と共に言葉を円卓に放る。

「うむ、そうじゃの。先ず言っておく。あれを定義するなら、『福音の魔女』だという事であつて、あれが『福音の魔女』かと問われれば不明としか答え様が無い」

「へ？ どういう事？」

テレジア・デイトトリツシユの答えに、ウルレイカ・ルーデルハイトが間抜けた声を溢した。

それもその筈だ。今、魔女達が集まっているのは、『福音の魔女』が引き起こしているのとされているエーテルの希薄化現象の解決策の模索。その為に集まっているのだ。

しかし、第一発見者であり発起人でもあるテレジアがその前提を覆した。

ウルレイカは隣に座るリーリヤ・ブレーメイヤに、視線を送った。

（今のどういう事か判る？）

(いきなり前提を覆してきた訳だ。なにかあるんだろ)

(いや、だから、そのなにかがなにかって話さ)

(まあ、待て。デイトトリツシユ公の出方を見る)

念話を切り上げ周りを見ると、天内菊代はリユーヌ・テユレイルの淹れた茶をゆつくりと飲み、ナジエーリアは両目の閉じて口の端に噛んだパイプで紫煙を燻らしている。

マイペースこの上ないが、魔女も突き詰めたネームド魔女、それを更に突き詰めたら頭の一つや二つおかしくなる。

現に、隣のリーリヤは眠そうに欠伸を噛み殺している。

「おい、ブレーメイヤ。寝るでない。妾の話は終わっておらぬ」

「ああ、大丈夫だ。まだ寝てない」

「寝る気満々ではないかー」

テレジアがテーブルを叩き叫ぶ。リーリヤは睡魔と戦っている。

リーリヤは会議というものが苦手だ。持って生まれた性分だから、仕方ないと言えば仕方ない。しかし、リーリヤはナジエーリアと並ぶ公国のネームド魔女だ。重要な会議があれば出ないという訳にはいかない。

本人もそのことを理解している。だから、これといった抵抗もせず、ナジエーリアに連れられるままに来たのだ。

だから

「早く話せよ、デイトトリツシユ公。私の気は、そう長くないぞ」

眇で発起人を睨む。短く肩に届かない程度に整えられた髪に手櫛を荒く通す。

嘗ては背中まで伸ばしていたが、自分が陸戦魔女である内は、伸ばしていても邪魔になるだけだと切つてしまった。

今、この場にいる魔女で陸戦魔女は自分一人だ。と言つても、ナジエーリアの隣に座る菊代も巫女で陸戦魔女でもあるが、彼女は陸戦も出来る空戦魔女というだけで、主とする戦場は空だ。

「急かすでない、ブレーメイヤ。妾とて、万能ではないのだ。整理くらいさせよ」

「なんだ？ 纏まってなかったのか」

リーリヤは意外そうにテレジアを見る。見た目は齡十と少しにしか見えないが、その中身は怪物だ。

万を超える近代魔導の基礎を築き、今でも新型魔導の原典に名が語られる魔女。自分の「割碎かつさい」も、原典を辿れば彼女に連なる。

「情けない話、妾はあれを世界の終わりに現れるとされておる「福音の魔女」としか表現出来ぬのじゃ」

「何故ですか？ デイトトリツシユ陛下でも不可解な魔導だと？」

「まさか、あのテレジア・デイトリツシユであるよ？ 彼女に解らぬ魔導が存在するなら、それは近代魔導の母よりも更に原初の原典という事になる。それが、一体どういう事なのか。解らぬ君ではあるまい？」

近代魔導の母、テレジア・デイトリツシユよりも更に原初の原典、魔導が今の形になる前の姿。それは「魔法」と呼ばれ、極限られた血筋や民族、才ある者にしか使えない奇跡の御技であった。

魔法を使える者は、畏敬や畏怖を以て「魔法使い」と呼ばれ、災害や災厄と同じく恐れられた。

だが、テレジアを初めとした一部の者達がそれを覆した。

系統も技術も形を持たなかった「魔法」に、系統を以て道筋を与え、技術を以て形を与えた。これにより、奇跡の御技であった「魔法」は、通常の技術の「魔導」となり、「魔導」を扱う者を女は「魔女」、男は「魔導師」と呼ぶようになった。

だがそこに、失われたものが無かった訳ではない。

「魔法」が失われる事を恐れた魔法使いが、テレジアと志を同じくとする者達を強襲し、大虐殺を行った。

血で血を洗う争いが続き、短くない争いは数と順応性に勝る魔女達が勝利した。

テレジアも参加したその戦いで失われた「魔法」がある。



そして、テレジアすら知らぬ「魔導」があるとするなら、その原典は系統と技術により「魔導」という形になる前に消えた「魔法」だ。

「魔法」も「魔導」も、絶対の共通がある。それはエーテルを使うという事じゃ。しかし、妾が見たあれはエーテルを使うというより、エーテルを「かき集めている」。そうとしか見えなんだ」

「待つて、建国妃。今、エーテルを「かき集めている」って言った？」

テレジアの目を伏せた言葉に、茶菓子を摘まんでいたウルレイカが待つたをかけた。

全員が怪訝な目をウルレイカに向ける。その視線の中、彼女は半分かじった焼菓子を口に放り込み飲み下し、一息吐いた。

「は、建国妃、おかしいよ、それ」

「あア？ 何がだ？ ルーデルハイト」

「気付けよ、ブレーメイヤ。ああ、建国妃もかつて、何さその顔？ まさか全員、気付いてない？」

全員の訝しげな視線に、ウルレイカは溜め息を一つ。今見てみれば、自分だけなのだ。もうすぐ戻ってくるであろうナジエーリアの部下二人の内の一、シルヴィア・クシャトロワなら気付いた筈だ。ボリス・カレンデイトではダメだ。

ウルレイカ・ルーデルハイトとシルヴィア・クシャトロワ、この二人だからこそ、

魔女”の才に恵まれず、一芸を綱とする二人だからこそ気付けるであろう事が、テレジアの言葉にあった。

「あの、ルーデルハイト？ 一体、何に気付いてないというのですの？」

「けえー、これだから才能のある奴は……！」

「な、なんですの、その言い方?!」

「気にしない気にしない。で、建国妃。 ”福音の魔女” はエーテルをかき集めている様に見えた。そうだな？」

「うむ、少なくとも妾には、そうとしか見えなんだ」

「そつか。じゃあさ、その ”かき集めた” エーテルは何処に消えたのさ？」

ウルレイカの問い掛けに、全員の顔が驚愕の色に染まる。 ”魔法” も ”魔導” も、エーテルを用いて行使する技だ。テレジアが見たと言う ”福音の魔女” は、そのエーテルを ”かき集めていた” という。

なら、そのエーテルは何処に消えたのだ。

「調べる事がまた増えた様じゃな……」

「ふむ、テレジア。一つ参考までに聞くが、君の知る ”魔法” や ”魔導” に類似するものは？」

「無い。というより、 ”魔法” にしろ ”魔導” にしろ、それを行使する時点でエーテル

の抽出を行うものじゃ。エーテルを “かき集める” 事を目的とした術を造る意味が無  
い」

「そして、ルーデルハイトの言う様に、 “かき集めた” エーテルは何処に消えたのか」  
「しかし、ルーデルハイト？ よく気付きましたわね」

「菊代、ボクは単純な魔女としては三流以下だよ？ 菊代達みたいに、自由自在にエー  
テルを扱う事が出来ない。そう、 “魔導具” を使わないとね」

言つて彼女は、首に掛けられたチャームメダルを見せる。そこには、彼女のみが十全  
に扱える機工式魔法杖 “カノン・フォーゲル” が刻印されていた。

ウルレイカ・ルーデルハイトをネームド魔女に至らしめている鍵であり、大空を震わ  
せる音を掻き鳴らし、大空を翔る鉄の翼だ。

彼女は、それがなければネームド魔女として機能しない。ここにいないシルヴィアも  
魔女としての才に乏しく、魔導具の補助を得て所属部隊 “バーバヤガ” の任務に就い  
ている。

故に、彼女達なら気付ける。

魔女としての才に乏しいという事は、 “魔導” を使う際に抽出したエーテルを貯蔵す  
る能力が低いという事でもある。

彼女達は魔導具の助けを得て初めて、魔女として機能する。

「世界中でエーテルが希薄化して、『福音の魔女』がその原因なら、その『かき集めた』っていうエーテルは何処に貯蔵しているのさ？ 並大抵の量じゃないでしょ？」

「特殊な魔導具でもあるのか？」

「ブレイメイヤ、分かっちゃってるとでしょ？ 世界中でエーテルが希薄化する様な量

を、貯蔵出来る魔導具がある訳がない」

「うむ、どれ程に堅牢でエーテル適性に優れた物質を使って造った魔導具でも、それ程のエーテルを貯蔵するのは不可能じゃ」

「確かに、そんな量のエーテルに触れれば、無条件にエーテル病を発症だ」

「だとすれば、『福音の魔女』はどうやってエーテルをかき集めたのですの？」

訳が解らない。魔女達は頭を悩ませた。

さてどうしたものかと、菊代が自分の持てる知識を総動員している横で、紫煙がゆっくりとした動きを見せた。

「お婆様？」

「……………」

返答は無い。両目を伏せ腕を組み、動かない。

一体どうしたのかと、菊代がナジェーリアの肩に手を伸ばすと、手指の先に冷たい感覚が触れた。

「まったく、不作法であるね」

瞬間、菊代は手指を戻し、魔法杖“火輪日輪”<sup>ひのわにちりん</sup>の弓を形成、即座の動きで弓弦を引き、ウルレイカも火砲を、リーリヤは斧刃を構えた。

ナジエーリアは既に鎌を抜いていた。短い柄から円を描く様に伸びる刃が、ナジエーリアのエーテルを受けて鈍く光る。

先程、菊代の手指の先に触れた冷たい感覚は、ナジエーリアの鎌刃だ。

彼女は珍しく苛立った様子で、前方に形成した鎌刃を向けている。

「はあ……。控えよ。呼んだ客が妾の宮殿に慣れず、妙な所から出てきただけじゃ」

主要三国のネームド魔女からの、殺気が向けられる方向に居たテレジアが溜め息を吐く。

「リユース」

「は、御客様、どうぞ此方へ」

テレジアの言葉に、彼女の斜め後ろの床の隙間から“溢れ出た”リユースが席を指し示す。

それに、カーテンに隠れた姿がゆるりと灯りの元へと歩み出した。

「先ずは無礼を」

濃い色の肌、露出の多い踊り子風の衣裳、先端にランプを象った長杖、異国風の肉感

的な女。フェイスベールに隠された口元から、男女問わず耳を傾けたくなる様な甘い声で言葉が紡がれた。

「見事な魔導の宮殿なので、つつい見惚れ迷ってしまいました」

「うむ、良きに計らえ」

「では、名乗りを。王国から『フレスアード・スレイファン』、遅れながら当会議へと参加を願います」

それはどういふ事なのか？

シャリン、と軽やかな音をその身に纏った金属の装飾品が鳴らす。

肉感的な体を柳の葉の様に揺らし、魔女の卓に着く。

「久しいな、『ランプの魔女』」

「ええ、お久しゆう御座いますね。リーリヤ・ブレーメイヤ少将様」

「・・・相も変わらぬ言い方だな。もう少し、砕けてもいいぞ？」

甘くか細い、小さな声がフェイスベールの向こうから、消え入る様に聞こえた。

今の限定された空間でなければ、耳を澄まさねば聞き逃してしまう程に小さな声、

リーリヤも古い知り合いとは言え、この声と言い方は昔から変わらぬ。

「天内菊代様にナジェーリア・リトリア様も、お久しゆう御座います」

「ええ、二年ぶりですわね」

「ふむ、確か公国と神皇国と王国の三国合同会議以来かね？」

「はい、仰る通りに二年前の三国会議にてお会いしたのが最後となります」

細く、口内で転がす様な、静かに語り掛ける口調で、フレスアード・スレイファンは

ゆっくりと応答する。

「ボクには何にも無いわけー？」

「これは失礼を、ウルレイカ・ルーデルハイト様」

「良いよー」

口を尖らせて不満を露にするウルレイカに、フレスアードは慌てず悠々とした態度で無礼を詫びた。

帝国と王国は間に共和国を挟む為、国交は薄い。その上、王国は他五国とは決定的に違う点がある。

「しかし、フレスアード。お主が来たという事は、王国は独自には動かぬと見てよいのじゃな？」

「はい、元老達の意味は揃い、王は五国と協同を決めました。王国は這い寄る危機に対し、五国と共に在りましょう」

王国は単一国家ではなく、中小国家や部族による集合国家である。

各国家部族より代表者を元老とし、その中で一人、王国に仕える『ランプの魔女』が使役する『魔神』の問いに答えられた者が、首長として王国を治める王となる。

そして、集合国家である為に、国家の意思決定に時間が掛かるといふ欠点もある。

「西の砂漠の民が渋りましたが、彼奴は王の足を引っ張りたいただけの俗物ですので、少々『魔神』様に叱って戴きました」



「はっはっはっ、それは豪気であるね」

『それは良いが、鎌槌よ。疾く鎌刃を退ける。無礼な』

笑うナジエーリアの声に呼応するように、フレスアードが持つ長杖の先端に象られたランプの蓋が揺れ、重厚で威厳のある声が響いた。

「おや？ 伝説に謳われ語られる“魔神”ともあろう存在が、一介の魔女如きの鎌刃を退けられぬのかね？」

『鎌槌の、貴様の性格は理解している。我が待つている間に退けろ』

声にナジエーリアは、口の端に噛んだパイプから紫煙を燻らせるだけで、不可視の鎌刃を退ける気配は無い。

ランプから威圧と、不穏な気配が部屋に満ちていく。

「おば様、暇ですか？」

そんな中、ナジエーリアの隣に座る菊代が、吐息混じりに話し掛けた。

「む？ 暇かと問われたならば、それは違うと言おう」

「はあ……。おば様、軍曹ならもうすぐ戻って来ますわ」

「ほう、そうかね」

言うど、ナジエーリアはテーブルの下で玩んでいた鎌を、腰のベルトへと納めた。

菊代達が時計を見れば、午後を指している。普段なら、彼女が淹れた茶を飲んで一息

入れているだろう時間だ。

『ふん。まあ、いいとしよう』

「はっはっはっ、すまないね。久々だったから、ついね」

「遊びは済んだか？ なら、会議を再開するぞ」

「テレジア・デイトリツシユ陛下、御手数を御掛けして申し訳ありません」

「よい、気にするでない。『魔神』も良いな？」

『我が同輩を討つた魔女か』

「恨んでおるか？」

『まさか。あれは、彼奴が油断しただけの事。誰が恥知らずに恨むかよ』

この言葉と共に、フレスアードのランプから発せられる威圧は解かれ、不穏な気配も霧消した。

今は使役されているとはいえ、『魔神』は『魔神』なのだ。ネームド魔女と言えど、こんな場所で荒事は避けたい。

「さて、続きといくぞ」

そして、テレジアの言葉に会議が再開される。

「エーテルは不変な存在じゃ。それが絶対のルールの筈が、『福音の魔女』と思わしき者により、今現在では僅かに希薄化しつつある。これについて、何か考えがある者は

おらぬか？」

公国、神皇国、帝国、共和国、王国。国内政変により欠席の連邦を除く五か国の主要魔女達が、一同に会し頭を悩ませた。

「魔法」にしる「魔導」にしる、エーテルを使用する事に変わりはない。使用されたエーテルは消失せず、性質を変えて空間に霧散し、時間と共に元の性質へと戻る。

「魔法」と「魔導」の違いは、この使用するエーテルの量であり、「魔法」の方が個人の技量によるところが大きく、使用するエーテル量は多いとされる。

しかし、今回はそうして不変である筈のエーテル量に変化があった。

その為、各国の主要魔女達が集まったのだが、あまり様子は芳しくはない。

「何かと言われても」

「少々、情報が少なすぎますわ」

今ある情報は、テレジアが目撃したという伝説に語られる「福音の魔女」らしき者が、エーテルをかき集めていたという事と、それと同時期に世界中でエーテルの希薄化が確認されたという事だ。

目的も方法も不明。

何が目的で大量のエーテルをあつめているのか。

如何にして、その大量のエーテルをエーテル病を発症せずに収集しているのか。

「何らかの魔導の使用の為では？」

「ありかもしれないけど、薄いね。僅かといっても、世界中で確認される量のエーテルが希薄化してる。そんな馬鹿げた量のエーテルを使用した魔導なんて、聞いた事がないよ」

「ですわよね。これだけの魔女なら象徴となる魔法杖も顕現する筈なのに」

「魔法杖の顕現は確認出来なんだ。というより、あれが何だったのか。それすら確定しておらぬ」

現象は大規模、しかし情報は微量で不確か。

これだけの量と濃度のエーテルに触れれば、どの様な存在であろうと問答無用でエーテル病を発症し、エーテルに融けてしまう。

魔導に用いる以前に、エーテルを抽出し貯蔵する事が不可能なのだ。

「『魔法』でも無理かね？」

「『魔法』も『魔導』も、基本は変わらぬ。妾が知る『魔法』でその様な事が出来る術など覚えがないのう」

「あの、新技術という事はありませんか？」

フレスアードの言葉に、全員が思案する。

魔女や魔導師には、テレジアのように新技術や旧来の魔導技術の洗練を得意としてい

る者も多い。その誰かが発明した新技術だとするなら、また別の問題が発生する。

「……もし、そうだとするなら、そいつがいる国とは少々話をせねばならんな」

「同志リーリヤの言う通りである。仮に、その様な技術が存在し占有しているとすれば、今の世界のバランスを容易く崩してしまうものである」

頷く二人に、誰もが否定をしない。事実、この世界文明はエーテルにより成り立っている部分が大きい。

全てをエーテルで賄っているという訳ではないが、大多数はそうだ。

そして、この「福音の魔女」が、新技術を用いた魔導、若しくは魔女だった場合、エーテルを奪えるという事になる。それは他国よりも優位に立つ為のアドバンテージとなる。

そうなれば、幾つかの大戦を潜り抜け、漸く今のバランスに落ち着く事の出来た世界がその技術を巡って、再び戦火に燃え上がる事になりかねない。

「世界の調停者としても、避けたい話ですわね……」

「私としても、「魔神」様の御力を無闇矢鱈に振るうという訳には参りませぬ」

『我は気にせぬがな。しかし、あれだな』

「何が？」

ランプから聞こえてくる重厚な声に、ウルレイカが反応する。

彼女が反応した声は、少しの間を開けてから、続きを話す。

『帝国の小娘、“魔法”について学んだ事はあるか？』

「“魔法”？ 無いけど、どうしたの」

『まあ、仕方もないか。“魔導”の始祖が在るから“魔導”については学んだか？』

「まあ、そりや、ねえ。まだ新人ネームド魔女だけど、魔女だし」

『ならば、問おう。現代に在る魔女達よ。“魔神”の問い、確と答えろ』

“ランプの魔神”の問いに、虚偽は通用しない。

王国の興りから続く慣習だ。国を容易く亡ぼす存在からの問いに答えられぬ者に、国を率い導く事など出来ない。

そこに虚偽を交える者など、言語道断だ。そういった者は、“魔神”の炎により魂すら残さず焼かれる。

そして、“魔神”の問いに魔女達は

「いいだろう、“魔神”。早く言え、ランプごとかち割るぞ？」

「はっはっはっ、魔女に“魔神”の問いとは、中々に面白いね」

「おば様、真面目な話なのですから、もう少し真面目に出来ませんか？」

「同輩を討った妾に問いとは、愉快じゃの」

「まあ、そんな感じで、危機を楽しむのが魔女だしさ。早く言いなよ」

「『魔神』様。私からも、宜しくお願い申し上げます」  
危機を楽しみ、『魔神』の問いを待っていた。

『では、問おう』

そして、危機を楽しむ魔女達に、魔神が問うた。

『貴様らは『魔法』の始祖を知っているか？ 虚偽無く答えよ』

## 魔神の問い

「魔法」の始祖を知っているか。

一切の虚偽を許さぬ「魔神」の問いに、ウルレイカは首を傾げる。他の魔女も同様だ。

あの「魔導の母」テレジア・デイトリツシュすら、自分と同じ様に首を傾げている。

「「ランプの魔神」よ、問いじや」

『いいだろう。「魔導の母」よ、問え』

「お主は知っておるのか？」

『ならば、貴様はどうだ？ 「魔導の母」』

どうやら、問いは受けても答える気はないらしい。

フレスアードが持つランプから声が途絶えると、魔女達は目配せで念話を始めた。

(さて、どういう事かね?)

(また、いきなりですわね)

(いやそれよりも、建国妃)

(なんじや?)



(なんなの？ さっきの質問？)

(簡単な話じゃ。妾も「魔法」は知っていても「魔法」の始祖は知らぬのだ)

テレジアの念話に一つ動きがあった。

ナジェーリアの隣に座る菊代だ。

彼女の故郷である神皇国は、主要五国の中でも共和国と並ぶ古い歴史のある国だ。

テレジアと起源を同じくする魔女が、「巫女」と名乗りを変え興した国であり、国家間の調停役も担っている。

その自分の国の歴史を思い出しているのだろう。

(神皇国も同じく、「魔法」の記録はあっても「魔法」の始祖の記録はありませんわ)

(他はどうかね？ ああ、公国も同じく記録は無しであるよ)

(そうだな)

二国、否、共和国含め三国に「魔法」の始祖に関する記録は無い。

残る二国、帝国と王国も同じく記録は無かった。

(帝国も同じくだよ。あるのは「魔法」の事だけ。誰が始めたとかは無し)

(王国も同じです。しかし、「魔神」様は何故にこの様な問いを？)

フレスアードが「魔神」の問いに僅かな疑問を浮かべる。

確かに、今はエーテルの希薄化現象と、その原因であると思われる「福音の魔女」の

正体の考察とその対策会議だ。それに、魔法の始祖がどの様に関係するのか。

「魔神よ、問おう」

『聞こう』

「君は魔法か？ それとも魔導か？」

『貴様はどちらだ？』

「……成程、それもそうであるね」

ナジエーリアの問いに、魔神はやはりはつきりとは答えず、しかしナジエーリアはその言葉に納得したように紫煙を燻らせる。

（おば様？ 今のは、どういう事ですか？）

菊代が問えば、軽い答えが返ってくる。

（簡単な話であるよ。魔法は魔導でも魔導でもない。そうだね。リユエ・テュレイル、君が近い）

（魔法は私と同じ魔導生物という事ですね）

（いや、あの、魔神様がそうだというのは、皆様御存知の筈では？）

（確認じゃな）

テレジアにナジエーリアは頷き、パイプから燃え尽きた灰を灰皿へと捨てる。

（うむ。実はね、私は魔神が魔法の始祖ではないかと疑っていたのだよ。しか

しだね)

(妾の問いに、「魔神」はこう返した。「貴様はどうだ?」と)

ナジェーリアは懐から新しい煙草の刻み葉が入ったケースを取り出す。

銘柄は彼女のお気に入り、「転び屋ミーシャ」。煙を追い掛けて転んだ子熊がケースの中央に描かれている。

ナジェーリアはケースから、パイプに刻み葉を詰め、火を点ける。

(あれは、良い様に言い換えれば、「お前は知っているのか?」とも取れる)

(そうなる、「魔神」様は「魔法」の始祖を知らない事になりますが、でしたらこの問いは)

(何かの確認ですの?)

(何の確認かは解らんが、どうやら「魔神」には何かあるようだ)

リーリヤがテーブルに置かれた小皿から、焼き菓子をつつ口に放り込み噛み砕く。

甘い。公国の菓子に見られる強く濃い甘味ではなく、果実や穀物をベースに砂糖の甘さを乗せたもの。

何度か食べた事がある、共和国のそれだ。

(というより、ボク達を試してるっぽくない?)

(ああ? どういう事だ、ルーデルハイト)

(理由は無いけど、試されてる感がすごい)

(あの、ルーデルハイト？ ちよつと、感覚で喋りすぎですよ?)

(しかし、ルーデルハイト大佐の言う事も解らんではないね。・・・同志リーリヤ、その

菓子を寄越し給えよ)

(テュレイルに言え)

(おば様、私のをあげますから、大人しくしてくださいな)

菊代が自分の菓子をナジエーリアに渡し、テレジアの脇に控えていたりユーヌが一礼と共にガラスの床に溶け、会議の場から姿を消す。

『答えはまだか?』

「気の早いものだね。まだ役者は揃っていないよ」

ナジエーリアが笑い、ランプを見る。

『役者が揃っていない?』

「ああ、そうである」

重厚な声がランプから響く。

「おば様? 役者とは? 連邦は政変で連絡が取れませんのよ?」

「はっはっはっ、連邦ではないよ。・・・もうすぐかね」

ナジエーリアのパイプから煙る紫煙が、ゆつくりと踊る。

懐から取り出した懐中時計を見ると、針は丁度の時間を指している。

「後、三十秒といったところか」

「あの、おぼ様？ 何が三十秒なんですの？」

菊代が首を傾げて、懐中時計の秒針が進むのを見る。

半分が過ぎた辺りで、リーリヤとウルレイカが何かに気付いて眉間を揉んだ。

一拍遅れてテレジアも気付き、菊代も気付いた。

残るは『魔神』が宿るランプを象った長杖を担うフレスアードだが、彼女が住む王国は公国とはあまり交流が無い為に気付かない。

「あの、ナジエーリア・リトリア將軍様？」

フレスアードが何かあるのかと、ナジエーリアに問おうとした時、部屋の扉が開かれた。

「流石である、同志軍曹。時間ピッタリであるよ」

扉が開いた先には、先程部屋を離れたリユーヌに案内されたシルヴィア・クシャトロワが、カップとポットに茶菓子が載ったカートを付いていた。

「さあ、『魔神』よ。役者はこれで揃った」

問いに答えて、会議を再開しよう。

ナジエーリアの言葉にシルヴィアは

「ふえ？」

気の抜けた声を出した。

## “魔法”の始祖

何が一体、どうして？

公国魔導部隊 “バーバヤーガ” 隊員シルヴィア・クシャトロワは鈍い汗を流した。

彼女の目の前には、連邦を除く五国のネームド魔女が勢揃い。下手をしなくても、世界を相手に戦える戦力だ。

それが今、何故か自分という最底辺の魔女に注目している。

一体何をどうしたらいいのか分からず、混乱するシルヴィアに一つ声が掛けられた。

「同志軍曹、あまり気にする事はないぞ？」

「いや、ブレーメイヤ少将。私にそれは無理です……」

気にするなんて無理だ。

自分はネームド魔女の様に、精神異次元系ではない。

精神通常系だ。つまり、一般魔女。

「シルヴィア・クシャトロワ軍曹様、あまり気をお詰めにならない方が宜しいかと……」

良い人だー。

踊り子みたいな露出過多な格好をしているから、この人ももしかすると精神異次元系ではと疑っていたが、自分と同じ精神通常系だ。

「『魔法』様の問いに答えられなければ、魂ごと燃やされて消えるのですから、気負っても無意味です」

前言撤回。自分以外全員精神異次元系だ。

最早、この場で平静な精神なのは自分だけだ。

残りは手遅れ、時既に遅し。

『では、シルヴィア・クシャトロワよ。私の問いに答えよ』

「ひゃ、ひゃい！」

フレスアードが持つ長杖から重厚な声が尋ねてきた。

『『魔法』の始祖を貴様は知っているか？』

「ふえっ？」

問いの意味をいまいち理解出来ず、気の抜けた声が出た。

『魔法』の始祖、何だそれは？

シルヴィアも魔女だ。『魔法』に関する知識は持っている。だが、『魔法』の始祖という意味が解らない問いに、彼女は混乱した。

——『魔導』の始祖の一人がテレジア・デイトリツシユ陛下だから……——



どうなるんですか？

そう言えば、自分は座学の成績もあまり良い方ではなかったと、シルヴィアは思い出す。

——せ、生活魔導の成績は学内トップ……！——

何故士官学校受けた？

答えは単純、食いつぶれないからだ。公国は身分主義というか、貴族社会の名残が今も多く残っている。

その為か、上に逆らったりすると、気付けば失業なんて事がさらにある。だが、軍に入れば余程の事が無い限りクビは無い。自分から辞めるか、天に召されるかだ。

『どうした？ 答えられぬか？』

「あ、いやいや、待つてくさいって！」

——待つて、本当に待つて！——

チラリと自分の上官を見る。

パイプから紫煙を吐き出して、御機嫌な御様子。隣の巫女にえらく構いたがっているが、久々に会った姪に構いたがる叔母の気分なのだろうか？

あ、うざがられて凹んだ。

兎に角、上官は当てにならない事が解った。ならば、もう自棄だ。

正解か不正解か知ったことか。大体、正解があるのかこの問いに？

『シルヴィア・クシャトロワ、答えよ』

「魔法の始祖なんて知りません。というか、魔法って何時始まったんですか？」

シルヴィアの答えに、その場に居た全員が目を見開いた。

『それが貴様の答えか？』

「いや、あの、魔法の始祖の一人がテレジア・デイトリツシユ陛下ですよ。だから、魔法の始祖も居るんじゃないかなって思うんですけど、私は知りませんし、魔法が何時始まったのかも知りません」

ーもつと真面目に授業受けとけばよかったー！ー

他の魔女達なら答えられたかもしれない。

魔法の始祖という事は、魔法の始まりという事であり、自分達が生きている世界の始まりという事だ。

シルヴィアの知識と記憶には、魔法の始まりに関するものは無い。

流石に、そんな重要な事を忘れていたとかは無い筈なので、シルヴィアはあまり得意ではない言い訳を必死に考えていた。

伝説の魔神に言い訳が通用するとは思えない。魔神の炎に焼かれれば、魂ご

と消えて無くなる。

どうせ燃やされるなら、足掻いて燃やされてやる。

シルヴィアは決意白乗を胸に、姿の見えない「魔神」に向き合った。

「「魔法」の始祖という事は、この世界の始まりと言っても過言ではない筈です。だって、「魔法」が無ければ今の世の中を形作っている「魔導」も無い筈です」

『…………』

「魔神」は黙して語らず、シルヴィアは一息肺の空気を入れ換えた。

「私は最底辺の魔女です。しかし、魔女です。仮にでも「魔導」を扱う者が、その母体となった存在を知らないというのはおかしいかもしれませんが、私は「魔法」の始祖を知りません」

言い切り、震え出す。なんだか論点がズレていた様な気もするが、知らないものは知らないのだ。

「魔法」の始祖、それはつまり、この世界を作った神か何かだ。

神の存在を論ずるといふ訳ではないが、神を知っているかと問われれば、答えはイエス。

神の事を知っているかと問われれば、答えはノーだ。

そんな、聖書か神話で語られている事しか知らないのに、知っている事になるのか、真

実なのか、そんなの誰にも解らない。

『ふむ。鎌槌、ナジェーリア・リトリア、魔女、これが貴様らの答えか?』

震え目を回しているシルヴィアを横に、  
『魔神』が魔女達に問うた。

「そうである」

『そうか』

一拍置いて、  
『魔神』が笑った。

『正解だ、魔女。貴様らは、私の問いに答えた』

「ふえ? 正解!」

目を回し震えながら、頭からエーテル煙を出していたシルヴィアがリユーヌに介抱されながら復帰した。

『ああ、正解だ。魔女、シルヴィア・クシャトロワ、貴様が正解した。誰も『魔法』の始祖を知らぬ。それが答えだ』

「誰も知らない。それは貴方もですか?」

暇だったのか、急に構ってきたナジェーリアを手で押し退けながら、菊代が『魔神』に問うた。

そして、  
『魔神』が答えた。

『ああ、その通りだ。万に近い年月を在り続けたが、私の存在が確立した頃には、既に』

魔法”は存在していた』

「という事は、“魔法”は“魔神”様よりも遙か太古に確立していたと？」

『その通りだ、我が魔女よ』

「じゃあさ」

そこまで言ったところで、ウルレイカが手を上げた。

「“魔法”はどっから来たのさ？ 何も無い所から、いきなり生えたりしないでしょう？」

「まあ、それに関しても」

同志軍曹の意見を聞こうではないか。

濡れ布巾を頭に乗せ、脳の冷却をしていたシルヴィアがスゴい顔でナジェーリアを見た。

## 沼の魔女と普通の魔女

## リューヌ・テュレイルとシルヴィア・クシャトロワ

「では、同志軍曹。答えてくれ給え」

「ふえええ……」

濡れ布巾を頭に乗せ、彼女は知恵熱とプレツシャーによつて発生したエーテルの煙を散らしながら、情けない声を出した。

「そんな、『魔法』の始祖がどこから来たとか、一介の魔女に解る訳ないじゃないですか」

「まあ、それもそうですね」

シルヴィアの介抱をする為に、彼女に膝枕をしていたリューヌが、彼女の頭に乗った温くなった布巾をよく冷えた布巾に取り替える。

「『魔法』の始祖、先程の話では、存在すら定かではない筈です。それを語れというのは、些か無理があるのでは？」

「確かにそうである。だが、私は彼女の『考え』が聞きたいのだよ」

「『考え』ですか？」

「そう、*“考え”*である」

「そうですか。であるならば、一度休憩されては如何でしょうか？」  
リユーヌの提案に、一同が頷きを見せた。

彼女の膝の上でプルプル震えながら、頭から煙を出しているシルヴィアの事もあるが、既に何人が飽きてきている奴が居るのだ。

モチベーション維持の為に、ここで休憩を挟んだ方が良い。リユーヌはそう判断した。

「陛下、宜しいでしょうか？」

「うむ、リーリヤとか小娘とか、ちよつと飽きとるじやろうしの」

「はあ？ 誰が飽きてるだ？ 飽きる以前の問題だ」

「いや、ブレーメイヤ。それもつとダメだと思う」

ウルレイカが半目でリーリヤを見ながら言った。

全員が全員ではないが、魔女は自身が興味のあるものにしか、その好奇心を動かさず、例え動かしただとしても直ぐに飽きる習性がある。

リーリヤは今回、ナジーリアによつて半ば拉致に近い形で連れて来られており、世界の危機と言われてもいまいち集中力が長続きしなかった。

ウルレイカに至つては、単純に長い会議が苦手なだけだ。

「では、休憩にしようではないか」

「『魔神』様も構いませんか？」

『まあ、いいだろう』

フレスアードが長杖に宿る『魔神』に問い、『魔神』はそれに了承の意で答える。

「それでは皆様、お茶をお淹れ致します」

「あ、じゃあ、私も手伝います」

「いえ、クシャトロワ様。それには及びません」

リューヌに膝枕されたままだったシルヴィアが、手伝おうと立ちあがろうとしたが、リューヌはそれを彼女の額を軽く押さえて止めた。

「共和国建国妃の侍女が、来賓にお手を煩わせるなど、テュレイル家の名が廃ります」  
言い切ると、シルヴィアの視線の高さが変わった。僅かに視野が下がった。

一体何があったのかと顔を上げると、リューヌ・テュレイルが『五人』居た。

「ふえ？」

「相変わらず、見事なものじゃのう」

「お褒めに預かり光栄に御座います。陛下」

膝枕をしているリューヌが頭を下げると、他の『四人』のリューヌも同様に頭を下げる。



「え？ リューヌさんが五人?!」

「クシャトロワ軍曹、落ち着きなつて。彼女の通り名忘れた？」

「あ、〃沼の魔女〃」

「その通りで御座います。クシャトロワ様」

シルヴィアの乱れた癖毛を直しつつ、五人のリューヌが肯定する。

彼女が行ったのは、エーテルの〃沼〃である己の分化だ。高濃度のエーテルで構成された彼女には、決まった姿形も数も無い。彼女は自分が知覚し認識が可能であれば、己とほぼ同等の性能を持つ〃自分〃を複製分化する事が出来る。

だが、あまり複製し過ぎると、オリジナルとなる己が薄くなり、己を認識出来なくなつてしまい、薄い自我を持った分体ごと崩壊してしまうというデメリットもある。

「では、リューヌ01から04、役目を果たしなさい」

リューヌの指示に、分体達が一斉に動き出す。

シルヴィアがカートに積んでできていた茶と茶菓子が、揺れもなく各人にサーブされ、分体達は一端役目を終えると、邪魔にならない位置に控える。

「それでは皆様、何なりとお申し付けください」

リューヌはそう言うと、各人が各々好き勝手に休憩に入っていく。

「しかし、あれであるね。テレジア、彼女はやはり優秀な侍女である」

「当然じゃろ、この妾の侍女じゃぞ」

「まったく、この手の掛かるなんちゃって幼女の世話をしているのだから、実に優秀であるよ」

「ああ？」

テレジアの眉間に皺が寄り、ナジエーリアのパイプから紫煙が燻る。

「おやおや、どうかしたのかね？」

「若造が、生意気な口を聞くではないか」

「はっはっはっ、今の君よりは年上であるよ」

テレジアの米神から何か音がして、ナジエーリアがゆっくりと大量の紫煙を吐き、リーリヤが溜め息混じりに腰の斧に手を添えた。

ここはテレジアの魔法杖『パンシヨン・ヴェルサイユ』内部、エーテルは基本彼女の支配下に置かれているが、全魔女中最大級の内燃エーテル量を誇るナジエーリアならば、問題無く戦闘が可能だろう。

「はいはい、やめてくれませんか？」

響き渡る拍手と共に声が届いた。菊代だ。

彼女は二人に半目を向けると、ある方向を指差した。

「この様な戦闘をするには狭い部屋で戦闘を行えば、それ相応の被害が出ますわ」

菊代が指差した先には

「あわわわ……！」

震えるシルヴィアと、彼女を守る様にしてリユーヌが新たに形成した分体六体を盾代わりにしていた。

「それに、共和国の最重要人物と公国の象徴的魔女の争い、神皇国の巫女として見過ごす訳には参りませんの」

「……ふむ、菊代。一つ聞こう」

「なんですか？」

「止まらなければ？」

「御母様からは、言つて聞かない相手は聞くまで射て、と教わってますわ。後、形が無くなつたら楽とも……」

「はっはっはっ、テレジア。茶でも飲むほうではないか。同志軍曹が淹れた茶であるよ」  
「うむ、お主が重用する者が淹れた茶じゃ。楽しみじやの」

笑顔で魔法杖の砲口を向けてくる菊代から、白々しく目を逸らす二人。

“巫女に砲撃戦を挑む奴はモグリか自殺志願者”

世界の絶対的な常識であり、魔女養成学校の教科書にはつきりと記載され、実際に現役の巫女を招いて砲撃戦を体験させて、調子に乗った若い魔女と魔導師の鼻っ柱をへし

折った上で播り潰すという授業も行われている。

そして

「仲良し、仲良しであるよ、私達は」

「そうじゃぞ。だから、それ下ろせ。な？」

「……次はありませんわよ？」

争いの停止を確認したら、武装を解除しなくてはならない。神皇国の巫女として、諫め役として、それは絶対のルールである。

ここで射てば、将来の自分の仕事が減って楽になるかもしれないと思ったのは、気のせいにしておこう。

「ま、まあ、あれである。休憩がてら一つ話を進めようではないか。同志軍曹」  
ナジェーリアが気が抜けた様に紫煙を吐いて、言った。

その視線と紫煙が向く先には、未だにリューヌの膝枕から解放されていないシルヴィアが、プルプル震えていた。

「は、はい！ な、なんですゆか、將軍！」

「今のをどうやって発音したのか気になるが、今は置いておこう。同志軍曹、君の“考え”を聞かせてくれ給え」

「“考え”ですか？ えくと、何の“考え”でしょうか？」

「『魔法』について、というよりは、『魔導』を含めて君はどう思っているのかね？」  
ナジェーリアの問いに、シルヴィアは頭から霧散するエーテルの煙を更に濃くした。  
リユーヌが慌てて、濡れ布巾を新しいものに代えてくれる。

何というか、自分が膝枕されているという事もあって、全員に見下ろされているこの状態。公国だと、不敬とか言われてもおかしくない。まあ、この將軍はそんな事一切気にしないだろうが、何故ウルレイカとリーリヤは自分の胸を見てくるのか？

しかし、シルヴィアは困った。

『魔法』と『魔導』、これ等についてどう思っているのか。

どうもこうも、自分が産まれた頃には既に有ったし、それが当然の存在だ。これが無くなれば、この世界はたちまち立ち行かなくなる可能性だつてある。

それについてどう思っているのかとか、難し過ぎる問いだ。

というか、自分は何時まで膝枕されているのか。やはり、あれだろうか？

自分が情けないのと、侍女式魔導生物の本能的な何かが自分を膝枕させているのだからか？

確か、リユーヌのような侍女式魔導<sup>魔</sup>生物<sup>女</sup>は、特定の主は元より、他人に仕え奉仕する事を無上の喜びとする筈だ。しかし、それでも本来の主の目の前に居るのに、何故に自分の介抱を続けているのか？

解らない。なので、巫女の茶菓子を掠め取ろうとして、失敗している將軍の問いを考  
えてみる。

“魔法”、知らない訳ではないが、見た事は無いに等しい。

“魔法”を扱える魔女は極少数に限られてくるし、“魔法”より“魔導”の方が便利  
なので、殊更使う事も無い。

今は、何かの祝い事や養成学校の特別授業で見られる位だ。

それら二つに対する考え、ある訳が無い。

大尉にそれを言えば、なら考えろと言われるだろうが、無いものは無いのだ。

また濡れ布巾が新しいものに取り替えられた。視線を上げて、リューヌの顔を見る。  
胸で見えない。しかし、相当な美人だという事は知っている。

自分とは違う真っ直ぐな黒髪、切れ長の冷やかな美貌、魔導生物の家系だと、美人  
になるのだろうか？

——違う世界だなくと——

自分の様な、通り名の元になる逸話を持っていない魔女とは違う別世界の住人、シル  
ヴィアはそこまで考えると、ふとある事を思い出した。

——そういえば、初めて“魔導”を見たのって——

確か、幼少の頃に祖母に無理を言っつて連れて行つてもらった魔導サーカス団のアクロ

バティック飛行。

娯楽に乏しかった故郷での思い出だ。よく覚えている。

あれを見て、自分は魔女になりたいと思ったのだった。

公国で魔女になるには、軍人になった方が手っ取り早いという事もあり軍人となり、そして今に至る。

あの時も思った事がある。

將軍達、ネームド魔女が扱う「魔導」を見た時も、同じ事を思った。

自分とは違う世界の住人。

「まるで、この世界のものじゃないみたい」

彼女の小さな呟きに、魔女達が目を見開いた。

## 魔の根底

「まるで、この世界のものじゃないみたい」

シルヴィアの眩きに、ネームド魔女全員が彼女を見た。

この世界のものではない。彼女はそう言った。

「あの？ えと、私にかしちやいました？」

「いえ、クシャトロワ様。貴女はなにもしていませんが、その……」

未だにリユーヌの膝枕の姿勢で固定されたシルヴィアが、キョロキョロと辺りを見回す。

何かは解らないが、何かをやってしまった気がする。

というか、何故にリユーヌは自分を離してくれないのだろうか。

確かに、リユーヌの膝枕は体が液体に近い故か、ひんやりと適度に冷たくて、頭を包み込む様に柔らかく、とても心地よいのだが、各国有力魔女を前にこの姿勢は如何なものか。

しかし、自分を膝枕し続けているのは、共和国建国妃にして魔導の母の専属侍女。世界的にも最重要人物の専属侍女となれば、医療関係の技術や知識も持っていて当然の



筈。

だとするならば、この膝枕も治療になる。

なるのか？とか考えていると、ナジエーリアが問うてきた。

「ふむ、同志軍曹。この世界のものではないとは、どういう意味かね？」

「どういうつて、ええ？」

「え？」

ナジエーリアとシルヴィアが、二人でキョトンとした顔で固まった。

両者共に、何を言われたのか理解が追いついていない様子だ。そうして、呆けた顔を  
している二人を置いて、菊代が代わりに問い掛けを続けた。

「クシャトロワ軍曹、この世界のものではないとは、魔導の事ですか？」

「あ、えと、はい」

「それは何故ですか？」

「……何故ですのつて言われても……」

正直困る。己には、初めて見た魔導はそうとしか見えなかったから、そうとしか言え  
ない。

だが、神皇国の巫女の見立ては違う様だ。

「菊代、どうしたのさ？」

「いえ、少し気になる事がありますの」

「気になる事？」

「ええ、でするので、クシヤトロワ軍曹。何故、魔導がこの世界のものではないと、思っ  
たんですの？」

菊代の問い掛けにシルヴィアは、未だに解放されない膝枕の姿勢のまま答える。

「あ、えと、私が初めて見た魔導が、子供の頃に見たサーカスでして、凄く綺麗だった  
のでそれで」

「そうでしたの」

「それで、菊代。何か分かったの？」

「分かったというより、仮説が出来たというものですの」

菊代が少し冷めた茶で唇を湿して、隣に座るナジェーリアや母をよく知るリーリヤに  
テレジア、フレスアードに目をやる。

皆、恐らくだが、自分と同じ仮説に行き着いている筈。

誰もが、菊代の母である満代と交流があり、嘗ては鎬を削った仲だ。

「御母様は私にこう言っていましたわ。『己の魔導を己の力と思うな。力の根底を恐  
れる』と。初めは、天内家に代々伝わる『火輪日輪』の事かと思っていました。しかし『  
力の根底』、これの意味が解りませんでしたの」

「満代はよく言っていたね。魔法には何か違和感がある」と  
ナジェーリアの言葉に、古株の魔女達が頷き、ウルレイカ達若年層の魔女が首を傾げた。

「魔法には何か違和感がある」

世界最強の魔女巫女にして、救世の英雄が遺した言葉なのだが、何か言い表せない違和感がある。

何かは解らない。だが、あまり良い感じはしない。

自分達が築き上げてきたものが、根本から崩れ落ちていく様な感覚が足下から広がっていく。

だが、天内満代と交流のあった古株のネームド魔女達は、平然とした様子で構えていた。

「天内菊代様、その仮説とは?」

「フレスアード、急くな急くな。満代の娘が立てた仮説、ゆつくりと聞こうではないか」

「はっ、これまた性格の悪い事だな」

「はっはっはっ、まあいいではないか。さあ、菊代。我等が輩の残し火よ。教えてくれ給え。説いてくれ給え。きつと、それが答えであるよ」

パイプから紫煙を燻らし、軍帽を直したナジエーリアが笑う。その紫煙の向こうでは、リーリヤが眉間に皺を寄せながらも口の端を吊り上げ、テレジアが菊代の背後に懐かしい者を見るかのような目を向ければ、フレースアードが少し悲しげな目を一瞬見せて、真つ直ぐに菊代を見詰める。

嘗てと今、世界の趨勢の一端を担っている魔女達の視線、並の者では受ける事はおろか意識を保つ事も難しく、それだけで魔女の呪いとなりかねないそれを、天内菊代は正面から受け止めた。

「皆様も解っているのでしょうか？ 私が立てた仮説は、御母様と同じもの。//魔導の元である魔法は、この世界のものではない」ですわ」

「ええ……？」

ウルレイカが間抜けた顔でこちらを見てくる。シルヴィアもだ。

そして、それは一体どういう意味なのか。ウルレイカが、菊代の仮説を問うた。

「魔法がこの世界のものではない」って、菊代めちやくちやだよ？ だとしたら、魔法は何処から来たのさ？」

「この世界以外の世界ですわ」

「めちやくちやだよ！ この世界以外、異世界があるって言うの?!」

「仮説ですが、魔法を調べれば可能性がありますのよ」

「では、菊代よ。その仮説の根拠を聞かせてくれ給え」

口元に笑みを作るナジェーリアに頷きを返し、菊代はよく通る声で仮説を説いていく。

「ええ、先ずは“力の根底”。私達の力とは魔導に他なりませんの。しかし、その“根底”となると、それは魔法という事になりますのよ。ではそうなりますと、何故、御母様は力の根底、魔法を恐れると言つたのでしょうか？」

「まさか、異世界の得体の知れない技術だから、とか言わないよね？」

「解っているじゃありませんの、ルーデルハイト」

菊代が言うと、ウルレイカは口を横にした顔でテーブルに突つ伏した。

菊代の仮説通りなら、魔法は異世界からもたらされた得体の知れない技術で、それを元にした魔導も然り。己の力を疑えと、彼女はそう言っている。

「しかし、それは天内菊代様が、御母様である先代巫女様の御言葉から推測した仮説に過ぎません」

「確かにな。満代の言葉からなら信憑性はある。だが、今は菊代、お前の言葉だ。満代の言葉を借りるだけでは、私達には届かんぞ」

フレスアードが根拠を疑い、リーリヤがそれを認める。

事実、菊代の仮説は彼女の母の言葉から推測したものであつて、菊代自身が立てた仮



声が制止を促した。

重く年季を感じさせる声は、誰も居なかつた筈の背後から放たれていた。

「只今は、重要な会議中。早々にお引き取りを」

「……さもなくば、実力行使か？ ボリス・カレンデイト」

言葉が聞こえ、ボリスが居た空間が貫かれた。

## 魔の根底にあるもの

「そんな小娘の感性が正しいとは、一体どういう意味かの？」

テレジアが、己の侍女が離さぬ女を指差し、菊代を睨む。見た目は幼いが、中身は何世紀も生まれ変わりを繰り返してきた魔導の母。

童女のそれではない眼光が菊代を射抜く。

「ディートリツシユ陛下は、魔法の始祖をご存知ではありませんね？」

「当然じゃろ？　というより、それは先程論じたぞ？」

「では、各地に存在する土着の魔法の始まりは？」

菊代の言葉は、ガラスの部屋に静かに響き、魔女達が眉をひそめる。

魔法の始祖は誰も知らないが、土着の魔法の始まりは知っている。それこそが、今の魔導の元になったからだ。

「確かに、王国でも土着魔法の始まりなら伝えられています」

『我が魔女の言う通りだ』

フレスアードと「魔神」が、菊代の問いを肯定する。

彼女の得意とする魔導は幻灯と使役、王国のまだ幼い王の閨に侍り夜伽よしぎとして物語を



語るのが、彼女の役目だ。

王国は厳しい土地だ。砂と岩ばかりの土地、王国を象徴する太陽が出ている昼間は、その土地に住まう命を全て焼き殺し、水すらも燃やす。

そして、太陽が沈んだ夜はその逆となり、公国に負けず劣らずの極寒となる。だからか、王国の民は物語に夢を見る。

悪しき神を討ち倒す英雄譚、弱き民を救う義賊、優しき英雄の自己犠牲、様々な物語が王国から生まれた。

その物語から生まれた魔法は、人々に一時の癒しを与える為に生まれた。

幻灯は物語が映し出し、映し出された幻を使役する。

その幻の劇で、昼間に焼かれた身を癒し、身を凍らせる夜を越え、また朝を迎える。

弱き人々が厳しい大地で生きていく為、嘗ての英雄が対等の契約を結んだ「魔神」の力を借りた魔法。

それが、王国の魔法の成り立ちとなっている。

「あ、じゃあ、なんで「魔神」は魔法の始祖を知らないのさ？ あんたと契約結んだ英雄は魔法知ってたんでしょ？」

『簡単な話だ。我と奴が出会う遥か前から、魔法はいつの間にか存在していた』

「それもそっか。そうじゃないと、魔法の話は出来ないか」

「他にも似たようなものですね」

ウルレイカがテーブルに腕を枕に突っ伏し、行儀悪くカップを唇で傾け冷めた茶を啜る。冷めても殆ど風味の落ちないシルヴィア・クシャトロワ製の不思議な茶、魔女魔導師に大人気。

カップの底がソーサーに擦れる音を聞きながら、ウルレイカはフレスアードを見る。

「テーブルに乗ってる」

露出過多、ほぼ局所的にしか隠せていない、踊り子風の衣装に飾られた褐色の肉体。その豊富な肉体は、ウルレイカが持ち合わせないもの。

「身長高くて脚も長くて、尻も乳もでかいってどういう事」

神皇国では柳のように細いとかなんとか言うらしいけど、柳ってあの細い針金みたいな葉っぱの筈。

集中力が途切れてきているのは理解出来る。だが、長い会議は苦手だ。

元々、会議とかで活躍する内政型ではない。単純な魔女としても下の下、シルヴィアとそう変わりはない。

「……か、テュレイルはいつ軍曹離すの？」

ちらりとシルヴィアに目をやると、リユーヌの膝枕から未だに解放されない軍曹が居た。

あのまま共和国に持ち帰る気だろうか？

ていうか、二人して乳でかいなおい。

確か、神皇国にカガミモチとか、ライスのペーストを乾かして固めて重ねたものがあつた筈。

ウルレイカは、横向きに寝転がされているシルヴィアの軍服に、押し込められた胸を見ながら思った。

——菊代は当たり前にでかいし、リトリアは大きいけど、乗らない——

本当に集中力が途切れている。そうでなければ、なにが悲しくて乳ソムリエしなくてはならないんだ。

いや、勝手にしてるだけだけど。

兎に角、菊代、シルヴィア、フレスアード、リユース、ナジエーリアの順でデカイ。

己を含めて、リーリヤ、テレジアは無い。大きいとか小さいとか以前に、無い。

いや、大丈夫。自分はまだ成長期、まだ希望はある。

最近は、腕組みをして腕に引つ掛かる位にはなつた。

「そう、どの魔法も由来不明の魔法を起源としている。そして、魔法と魔導には共通する事がありますの」

「ほう、ならば菊代。その共通する事とはなにかね？」

「簡単ですの。魔法も魔導も、大元はエーテル操作技術ですわ」

「ふむ、するとじゃ。何処からともなく現れた者が、魔法というエーテル操作技術を我らの祖先に伝え、それが散らばり各国の魔法となった。そう、言いたい訳じゃな？」

「つまり、この世界には元々、エーテル操作技術は存在しなかった。だから、クシヤトロワ軍曹の感性が正しいか」

リーリヤが菊代を睨む。

菊代の仮説が正しいければ、この世界に魔法魔導は存在せず、何処の誰とも知れぬ者によりもたらされた、という事になる。

否、少し違う。

魔法魔導の話ではない。菊代の仮説は、今の世界を形作っているエーテル操作技術、それがこの世界には無かったというものだ。

ウルレイカも言っていたが、かなり滅茶苦茶な仮説だ。

だが、ある意味では領ける。今の魔導の原典ともなっている魔法は、その起源がまったく解らない。

本当に、何処からか始まり何処からか伝わり広がったとしか言えないのだ。

菊代を見ながら、リーリヤは思い出す。あの、常識人を気取りながら、実質は目の前でパイプを吹かしている変人と何ら変わらぬ彼女の母親を。

ーよく振り回されたなー

神皇国の良家、引きこもり気味だった彼女だったが、唯一ナジエーリアが神皇国に訪れた時は、物知り顔で町を案内して、騒動を引き起こしていた。

リーリヤも、その騒動によく巻き込まれた。

ーまったく、似るものなー

満代は穏やかな、虫も殺せぬ顔をしながらその実、自分達が束になって掛かっても、それを正面から制圧する鬼巫女だった。

菊代も、今はまだまだだが、次第にその頭角を表し始めている。

「しかし、この仮説には根拠が薄い。満代の言葉があつてもだ」

「確かに、そうですね。なので、『福音』の魔女の調査と平行して、魔法についても調査するべきだと、私は意見しますわ」

「ああ、その必要は無い」

菊代の宣言を遮る様にして、突然一つの声がガラスの部屋に転がった。

「ああ？　なんだ貴様？」

「これはこれは失礼を、リーリヤ・ブレイメイヤ少将。私い、『カタリーナ・フィーベル』と申します。お気軽にカタリナ、とでもお呼びください」

道化師の様な、フレスアードと同じ踊り子の様な、露出が多く奇抜とも言える衣装の



「危ない、危ないね。最近の若い魔女は血圧高めなのかい？ ん？」  
「助かった。中尉、感謝する」

細剣が貫いた先には、誰も居なかった。

何故なら、その切っ先は向く先を絡め取られ、明後日の方角を貫いていた。

「いいさいいさ、カレンディット大尉。あんたがやられると、將軍の世話役がアタシになっちまうじゃないか」

「……上官命令で替わるか？」

「冗談、冗談だね。將軍は上官で、アタシの酒飲み仲間、世話焼くのは酔い潰れた時だけさ」

ボリスを吊るし、細剣を絡め取った魔女が、宙でケラケラと軽い調子で笑う。

「……貴様、名を名乗れ」

「おいおい、アタシを知らないとかモグリかい？ それと、名を聞く時は自分から、母ちゃんに教わらなかつたかい？ ん？」

「……ふむ、確かにそうだな」

「随分、素直だな」

細剣の女が、形の良い顎に手を当て頷いた。

「当然だ、ボリス・カレンディット。こちらの無礼を親切に咎めてもらった。従うのは

当然だ」

「……俺は貴様に、いきなり風穴を開けられそうになったのだが？」

ボリスの言葉に、細剣の女は鈍い汗を流し、彼から目を逸らした。

「おい？」

「いや、待て。うん、そうだな？」

「なんだいなんだい？　どうかしたのかい？」

四角い顔を渋く歪めて、ボリスが女を睨む。

ポンチョで体を隠した魔女が鎖の音を立てて、怪訝そうに二人を見る。

やがて、細剣の女が突如叫んだ。

「ええい！　解っているから、静かにしろ！　シルヴィア・クシャトロワの確保だろう  
！」

「ちよつとちよつと、あんた今なんて言った？」

魔女は吊るしていたボリスを下ろし、音も無く着地する。

細剣を絡め取ったまま、魔女は女を睨んだ。

「ああもう！」

細剣の女は頭を振って、二人に向き直る。

「私は『アビゲイル・フランシア』！　今日はシルヴィア・クシャトロワの身柄を戴き



に参った！」

「そうかいそうかい、アビゲイル・フランシア。私は『鉄鎖』の魔女『ナディア・イヴエノヴァ』、まあ、宜しくやろう」

「そうか、ナディア・イヴエノヴァ」

アビゲイルは名乗り、細剣を構えようと腕を動かすが、細剣が腕についてこない事に気付く。

何故かと、細剣に目をやると、細剣の切っ先に鎖が何重にも絡み付いて、動きを封じていた。

「ひ、卑怯な！ 離せ、ナディア・イヴエノヴァ！」

「誰が離すか！ ばぁーか！」

ナディアは手に持つ鎖を鳴らし、アビゲイルの持つ細剣を引く。

徹底して、アビゲイルの動きを封じる構えで、ナディアはポンチヨから新たな鎖を垂らす。

「家の、家の箱入り娘は、早々やれないんでね。ちよつと、大人しく吐いてもらうよ。ああ、勿論目的をね……！」

## 道化と騎士

ー！タプタプタプ揺らしやがって！ 嫌味か、この野郎……！ー

リーリヤは額に青筋を浮かべながら、己の魔法杖である斧鉞に割砕の魔導を乗せて、慇懃な笑みを貼り付けた道化に降り下ろした。

リーリヤ・ブレーメイヤは、公国でも上位に入る良家の出でもあり、本人もその家名に恥じぬ実力者だ。

魔女、軍人としての実力、地位、優秀な部下、人に物に恵まれた彼女だが、それでも得られぬものがあつた。

それは、伴侶と胸部軟質装甲だ。

ネームド魔女は所謂エリートで、高嶺の華。世の男達が近寄り難い、そういった面がある。しかしその反面、それを承知で権益や、おこぼれに肖ろうと近付いてくる輩も少なくない。

なので、そういった輩を片つ端から叩き返していたら、男が寄り付かなくなった。代わりに、部下の魔女や新任の魔女がえらく寄ってきた。何故だ？

しかし、しかしだ。今はそれはどうでもいい。

そう、今はこいつだ。カタリーナ・フィーベルと名乗った、踊り子だか道化だか分からぬ格好の女。

カタリーナの胸部軟質装甲は、重装甲だった。

リーリヤは、なんと言うべきか、体質的に脂肪の着きにくい、所謂筋肉質な体だ。生まれてこの方、豊かな胸部装甲に臀部装甲には縁が無かった。

それを恨めしく思ったりもしたが、自分の家系を見て諦めた。ブレーメイヤ家は代々軽装甲だった。

「はれえ!?!」

割碎の魔導がエーテルの飛沫を散らし、カタリーナを飲み込み、ガラスの宮殿を揺らす。割りとは本気で降り下ろしたのだが、罅が入る気配すら見えないのは、テレジアの腕前故か。

しかし、カタリーナは人間。戦場すらも割り砕く、リーリヤの割碎を無防備に浴びればどうなるか。ミンチが一部残っていれば、奇跡だろう。

「うわあ、グチャグチャ……」

菊代があまり巫女らしくない発言をしたが、母親の満代はもつと過激だったのでスルーしておく。

揺れる宮殿に合わせて、タプタプ揺れるフレスアードの肉体も、まあ許す。奴は王国

での役割上、あの露出過多な服装がフォーマルだから。

だが、あのムカつく道化は許さん。

「生きてるなら返事しろ、殺すから。死んだなら死ね、殺すぞ」

「はっはっはっ、同志リーリヤ。めちやくちやであるね」

「喧し〜」

あの貼り付けた笑み、妙に胸部やら臀部を強調する露出の仕方の奇抜な衣装、間の抜けた喋り方、全てが気に食わない。

何故かは解らないが、噛み合わない相手というものは確かに存在するのだ。

「リユーヌ、そんな小娘を守っておれ」

「畏まりました」

「え？ え？ 一体何がどうなってる？」

背後で、誘拐宣言された同僚の部下が混乱しているが、それに関してはこちらも同じ様なものだ。

軍人という、戦う魔女としては、最底辺に位置する実力しか持ち合わせていないシルヴィアを誘拐して、何の意味があるのか。

事務員や給仕としてなら、とても優秀な軍人という、ちよつと意味の分からない奴だが、仮にも公国最強部隊の隊員、人質にでもする気か。意味無いのに。



「そうかいそうかい、じゃあ、話したくなる様にしてやろう」

ナディアが、アビゲイルの細剣を絡め取っている鎖を強く引き、ポンチョから新たに垂らしていた鎖を、体勢を崩したアビゲイルに巻き付ける。

「舐めるな！」

アビゲイルが、拘束されていない左腕を横に振ると、空だった左手に新たな細剣が握られていた。

鎖を回避するのではなく崩した体勢のまま、アビゲイルは己を拘束しようとするナディアの鎖を穿った。

「……驚いた、驚いたね。アタシの鎖をよくまあ、簡単に断つじやないか」

「同じエーテル製、強度の高い方が勝つに決まっている。だが、脆い継ぎ目を断つたという意味では、私の負けか」

ナディアが掲げて見る鎖は、アビゲイルの言う通り、確かに鎖の輪にある継ぎ目を断っていた。

「まあ、まああれだ。変な娘だね、あんた」

「変？ 私は変か？」

「いやいや、あんたは礼儀正しい良い子さ。余程、きちんと愛され、ちゃんと教えられたんだらうね」

「いや、その、……うん」

「……本当、素直な子だねー」

ナディアが見るアビゲイルは、礼儀正しく素直な子だ。

確かに、出会い頭にボリスを串刺しにしようとはしたが、先程その非を認めている。今だって、愛されていた事を素直に認めた。この年頃なら、目上の者からのこう言った問いには反抗するだろうに。

本当に、しっかりと愛され育ったのだろう。

だからこそ

「あんたみたいな良い子が、本当にこんな場所になんの用だい?」

「だから、言った筈だ。シルヴィア・クシャトロワの身柄だ」と

「人質、人質にでもして、將軍か誰かから金でもせびるかい? ん?」

「馬鹿にするな! 誰がその様な下衆な真似をするか!」

問い掛けに対し、怒りの感情を露にしてアビゲイルが反論する。

その顔には、怒りとナディアに対する失望があつた。

本当に素直で真つ直ぐな良い子だと、ナディアは鎖を緩めない様手繰る。

「アビゲイル、アビゲイル・フランシア」

「……なんだ? ナディア・イヴエノヴァ」

「あんた、あんたは本当に素直な良い子だ。だから、アタシはあんたに怪我をさせたくない。捕まってくれるかい？」

油断なく、ナディアが鎖を手繰り、アビゲイルの右腕を封じ続ける。

注意するべきは、あの細剣による刺突。単身他国に潜入して、その翌日には何事も無かった様に、將軍の側付きをしているあの大尉の反応が遅れる様な速度の刺突。

ー射程はあの子のエーテル操作技術次第ー

アビゲイルのエーテル操作技術がどれ程かは、まだ判断出来ないが、現在地である基地は余裕で範囲内だろう。

「ナディア・イヴエノヴァ。済まないが、その要求は却下だ。本当に済まない」

「そうかい。なら……！」

ナディアが動きを見せた瞬間、アビゲイルの影から太い男の腕が伸びた。

「なっ?!」

「アビゲイル、アビゲイル、あんたは本当に素直な良い子だ。だがね、少し視野が狭い。家の大尉の能力も加味せずに、アタシだけに気を割きすぎさ」

「くっ、ボリス・カレンディット。貴様、〃影渡り〃か?!」

アビゲイルの影から飛び出てきたのは、ボリス・カレンディット、通称〃影渡り〃の魔導師。



彼は、ナディアが伸ばした鎖を手繰り寄せ、アビゲイルを拘束する。

「あまり、大声を出さなくてもらおうか。中に居る將軍の耳に入れば面倒だ」

「いやいや、満代の娘が来てるなら、そっちに構ってるだろうさ」

「くそっ！ 離せ！」

アビゲイルが抵抗するが、ナディアの鎖で拘束された上に、ボリスに腕関節を極められていて、ろくな抵抗になっていない。

それをナディアは見ながら、アビゲイルにある事を問うた。

「アビゲイル、アビゲイル・フランシア。幾つか聞いてくれるかい？」

「……話す事など無い」

「話せ、話せとは、言っていないんだがね。まあ、いいか。アビゲイル、あんた何処から来たんだい？」

ナディアの問いに、アビゲイルの体が強張るのをボリスは感じ取った。そして、この反応は何か彼女琴線に触れた証拠だ。

ボリスは油断なくナイフを抜くと、アビゲイルの首元へ刃を当てて。

「あんた、あんたくらい腕前となると、何処からか噂みたいな形で話を聞くものさ。だがね、アタシはアビゲイル・フランシアなんて名前は聞いた事が無いし、あんたが家の箱入り娘を狙う理由も皆目検討がつかない」

「……………」

「黙り、黙りかい。しかしまあ、身代金目的じゃないとはつきり否定したんだ。家の箱入り娘に、何か秘密がある。そして、あんたはそれを知っている」

ナディアの言葉に、目を伏せ黙秘を貫くアビゲイルだが、ナディアからしてみれば、分かり易い反応だ。

人間、嘘ややましい事や隠し事があると、他人から目を逸らす。今のアビゲイルはその典型、ナディアはもう一度問い掛けた。

「なあ、なあ、アビゲイル。あんたの家は何処だい？」

「……………」

「ん？」

「家など無い……………」

瞬間、背後の宮殿の扉が開き、アビゲイルの周囲に“白”が爆ぜた。

## カタリーナ・フィーベル

それは「白」だった。最高級の陶磁器の様に美しい、曇りも汚れすら無い「白」が、魔女達の足元から生え、侍女の分体の胸を貫いていた。

「あれえ?」

だが、貫かれた侍女は、その「白」を離す事無く、傷口から滲み出た体液が、「白」にまわり付いていた。

「クシャトロワ様、お怪我は?」

「え? あ、いや、無いです」

「それはよかった」

侍女、本体のリューヌが抱き寄せ庇ったシルヴィアに安否を問うと、気の抜けた返事が返ってくる。

リューヌはその返事を聞くと、鋭く尖らせた視線を、分体を貫いている「白」の主であらう道化に放った。

「カタリーナ・フィーベル様、少々不作法が過ぎるのでは?」

「あれえ? あつれえ? おつかしいなあ? 動かないい?」

カタリーナの声は聞こえるが、姿は見えない。リーリヤの割砕によるエーテルの霧は、場を支配するテレジアによって、完全ではないが払われている。

なので、遮蔽物の少ないこの部屋に、カタリーナの隠れる場所は無いに等しい。ならば、道化は何処に居るのか。

「そこか!」

「うわあ! 見つかった! 逃げられない!」

リユーヌ02を貫いている「白」の中に隠れ、その群れを纏いリユーヌ02を貫いていた。いつの間に、テレジアが支配する宮殿内を移動したのかは分からないが、確かにカタリーナはそこに居た。

リーリヤに見付かり、慌てて異様に伸びた腕を引き抜こうとするが、分体とはいえ「沼」の魔女リユーヌ・テュレイルが、その身に沈んだ者を簡単に離す訳が無い。

「リユーヌ02はそのまま、リユーヌ01から05は壁となりなさい」

「よし、テュレイル。抑えとけ、今割る」

「待つてえ! 待つてえよお!」

カタリーナが帽子の飾りを振り乱してもがくが、リユーヌ02にじわじわと沈んでいく。

このままでは、「沼」に沈む。そうでなくても、背後からは世界最高クラスの陸戦魔

女が、大斧を担いでやって来ている。

慌てるカタリーナに、テレジアが眉を歪め、リユーヌとリーリヤに叫んだ。

「リユーヌ！ ブレーメイヤー！ 下がれ！」

テレジアの叫びと同時に、カタリーナの足元から「白」が爆裂した。

爆裂した「白」は接近していたリーリヤを弾き飛ばし、宮殿内に大量の水音に似た破砕音を響かせ、カタリーナを飲み込もうとしていたリユーヌ02を千々に引き裂き、壁役の他の分体をエーテルの飛沫として散らした。

「まったく、危ないね」

「お、おぼ様」

「助かった〜」

「感謝致します」

「白」の爆裂は、菊代やウルレイカ、フレスアードにも及んでいたが、前に立っていたナジェーリアに触れる手前で、何かにぶつかった様にして残らず破砕した。

傷はおろか、破片一つも四人には届いていない。

「今がチャアンスウ！」

「ひっ！」

降り注ぐ「白」の破片、カタリーナが纏うその正体に気付いたシルヴィアが息を飲

み、カタリーナが彼女を連れ去ろうとする。

リーリヤは弾き飛ばされ、エーテル製のガラスに倒れ復歸していない。

リユーヌも分体が全て破壊され、シルヴィアを庇った際のダメージで復旧が間に合わない。

他四人も“白”が邪魔していて、今からでは間に合わない。

カタリーナが勝利を確信した時、

「小娘が、あまり調子に乗るでないぞ?」

音が炸裂した。

カタリーナを守る“白”が破砕し、皮膚と肉が裂け血肉が飛び散る。透き通った音が鳴り、鋭いというにはあまりにも凶悪な風切り音が響く。

「いつつつつたぁー……いいい!」

カタリーナが悲鳴を上げ、“白”が大挙し音の主に迫る。だが、その“白”は全て炸裂音により砕け散っていく。

「久々に見たのう、珍しい魔導じや。妾も数度しか見たことが無い」

「いつつつつたぁ! 痛い痛いっ!」

「喧しい」

テレジアが不快そうに吐き捨てれば、また炸裂音がカタリーナから鳴り、フレスア

ドに似た肌色が赤に染まる。

テレビアがカタリーナを打ち据えていたのは、ガラスの鞭だった。ガラスの鞭は本革の如く撓り、カタリーナを打ち据えては碎け再生し、その破片が肉に食い込み、新たな痛みとしてカタリーナを責め立てる。

「うわあ、えぐ……」

ウルレイカが思わず呻く。だが、油断はしていない。『カノン・フォーゲル』の砲を展開して、ガラスの床を痛みでのたうち回る道化に向ける。

相手はあのリーリヤを弾き飛ばした。油断は出来ない。というか、まだリーリヤは復帰しないのか？

リニューは既に崩れた体を復旧して、分体も展開しているのに。

「ーあれ？ 聞いてた話より、リニューって性能高い？ー」

事前情報より性能の高いリニューに、ウルレイカが頭を傾げるが、今は目の前の謎の魔女だ。

見たところ、魔導はフレスアードに似た召喚系、しかし召喚するのは得体の知れない

『白』。

ウルレイカの知識に、この『白』を操る魔導は無い。だが、シルヴィアが頭を抱えて『白』を視界に入れない様になっているのが見える。





砕けたガラスが、腕に突き刺さり抉り、カタリーナの前腕には肉が殆ど残されていないかかった。

「ひ、ひどいいいい！ 痛い痛い！」

「はあ、とつく絶滅したと思うとつたんじゃが、まだ生き残りがおったか。ほれ、呻けるなら口が聞けるじゃろ？ お主の師の名を言うてみい」

「いひ、ひひははは、なあに言ってますかねえ、このロリはあ。これはあ、私のオリジナルう」

テレジアの額に青筋が浮かぶが、カタリーナにはそれに構う様子は無い。

夥しい量の脂汗と血を流し、カタリーナは口を三日月にした笑みを貼り付ける。

「いひ、ひひひひひ！ やあっぱりい、これじゃ、勝てなあいい」

「あア？」

「でもお、収穫ありいいいひひひひひ！」

狂った様に笑い出したカタリーナに、魔女達は警戒を深くする。

テレジアがその笑い声が不愉快だと、ガラスの鞭を振り上げた瞬間、カタリーナの顔が溶け始めた。

「では、ではでは、また御会い……！」

しましようとは続かず、肉が殆ど溶け骨だけになり始めていたカタリーナが、突如割

り砕かれた。

「テ、レ、ジ、アアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「皆、私の後ろに隠れ給えよ。同志リーリヤがキレたのだよ」

ガラスの宮殿を揺らす咆哮、

「逃がすかアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

“斧鉞”の魔女が、割れた額から血を流し激怒に任せ、ガラスの宮殿を、骨となった道化ごと割った。

## アビゲイル・フランシア

それは、エーテルの暴力だった。シルヴィアは、リユーヌ達の影に隠れながら、目の前で起きている事態を内心で、そう表現した。

「あ、え？」

「半溶けで、なに呆けてんだ？ あア?!」

リリーヤの振るった、山羊の頭に似た大斧が見えない。

その大斧を振るう腕も、シルヴィアの視覚は捉えられない。

それだけでなく、今の状況は異常だと判断出来る。

「まったく、同志リリーヤも無茶苦茶するものであるね」

「お婆様、これは無茶苦茶以前の問題だと思えますのよ？」

「うわ、ブレーメイヤ、マジでキレてんじゃない」

「ブレーメイヤ少将様、かなりキテますね」

「というかのう、妾の宮殿割れたんじゃないが。いや、部屋だけじゃがの」

「はっはっはっ、なんの強がりかね？ テレジア」

爆発音の様な音が聞こえたら、半溶けのカタリーナが真っ二つに割れた。

魔女とは言え人間、体が半溶けになって骨が半分以上見えたら、普通は死んでいる。だが、カタリーナは死んでいない。死なず、縦二つに割れて生きている。

「逃げ！ にげにげえ！」

「誰が逃がすかア！」

二つに崩れたカタリーナが、リーリヤから逃げようと割れ崩れた体を必死に這うが、リーリヤの大斧はそれを許さず、低く横薙ぎにカタリーナを斬り払った。

「あばー！」

カタリーナが溶けた血肉を撒き散らし、割れた部屋から外へと弾かれる。

弾かれた彼女は、笑っていた。

「逃がさんー！」

リーリヤがガラスの床を蹴り、カタリーナの追撃に向かった。

「マズいね。同志リーリヤの奴め、頭に血が昇っている」

「いや、血が昇っているで済むの？」

ウルレイカが口を横にして呻き見る先には、割り砕かれたガラスの宮殿と調度品、そして死霊術師の血肉が撒き散らされていた。

「巫女としては、あまり良い光景ではありませんわ」

「いや、まともな神経してる奴なら、誰だってドン引きだよ？」



れは、確かに仲間のものに違いない。

まさか、目的を果たしたのかと、宮殿の方向に目をやる。

「カタリーナ！」

「ア、アビイ、逃げえますよう！」

だがそこからは、目的を果たしたカタリーナではなく、人間の形を殆ど保っていない彼女が、半死半生で宮殿から逃げ出してきていた。

「お前、その体は……！」

「す、少し、甘く見すぎましたあ」

「くつ、＼ベアトリーチェ＼が来るまでは、まだ時間があるか！」

「早くうしないとう、来ますう」

「逃がす、逃がす訳が無いだろう？」

ナディアの鎖が二人を縛ろうと迫り、白骨の群れの影からはボリスがナイフを投擲する。

カタリーナに戦闘能力は無いに等しく、アビゲイルは一人、鎖を穿ちナイフを弾き続ける。

しかし、それも長くは続かない。単純な戦力差もあるが、今はそれよりもカタリーナを追ってきた者が原因だった。

「よう、観念したか？ 骨女」

「うわ、来たあ！」

体が治り始めていたカタリーナが叫び、アビゲイルが驚愕に目を剥く。

思わず動きを止めたのは、二人だけではなく、ボリスとナディアも同様だ。

四人が見たのは、額から血を流しながらの実にイイ笑顔で、大斧に割碎を乗せて振り抜く直前のリーリヤだった。

「仲間が居たのか。なら、死ね」

地が割れ亀裂が走り、エーテルの波が飛沫、形あるものが割り砕かれていく。

ボリスは影から影へと移り逃げ、ナディアは鎖で飛び逃げている。

アビゲイルとカタリーナは、割碎の爆心地に居た。普通なら、形も残らず消える。  
だが

「はっ、嘗めた真似をするなあ、おい？」

リーリヤが笑い吐き捨て見る先には、エーテルの霧を柵引かせながら、リーリヤに細剣の罅割れた切っ先を向けているアビゲイルと、その背後に隠されたカタリーナであった。

「馬鹿げた威力だな……！」

アビゲイルは即座の反撃を放ちたかったが、細剣を構える右腕が動かない。霧の晴れ

た周囲に注意すれば、局所的な天変地異が発生したのかと、地面が割り砕かれている。

「まさか、私の割砕を抜くか。……名前くらいは聞いてやる」

余裕で立つリーリヤが、斧を肩に担いで二発目を構える。アビゲイルが名乗った瞬間、自分達を割り砕く気だ。

しかし、今の自分達にそれを回避する術は無い。

一瞬、迷ったアビゲイルは、それでも名乗ることに決めた。

「アビゲイル・フランシアだ」

相手はあの斧鉞、勝負は一瞬にも満たないだろう。

自分達はあの大斧に砕かれる。死にたくはないが、どうしようもない事はある。

あるが、やはり死にたくないなので抗う事に決めた。

「アビゲイル・フランシア、私はリーリヤ・ブレーメイヤだ」

それじゃ、さよならだ。リーリヤが大斧を振り抜き、アビゲイルが細剣をリーリヤの喉元へと走らせる。両者ほぼ同時、否、アビゲイルの方が早かった。

真つ直ぐ、リーリヤの喉元を貫かんと走る細剣だったが、あとちよつとというところで、その動きがぶれた。

先程の割砕を穿った時のダメージが、今アビゲイルの技を曇らせたのだ。



大斧よりも先に貫く筈だった細剣は、その柄に弾かれ、二人は砕かれ消える。その筈だった。

「な?!」

「ああ?」

リーリヤが大斧を振り抜き、割砕が二人を飲み込もうとした瞬間、突如割り込んできたものにより、割砕が弾かれあらぬ方向へと駆け抜けた。

その事実により、三人は呆気に取られるが、アビゲイルとカタリーナの驚愕は、技を弾かれたリーリヤとは違う者に向けられている。

そう、何者かがリーリヤの割砕を弾いたのだ。

「迎えに来たぞ。アビイ、カタリナ」

「『ベアトリーチェ』ではなく、まさかのお前か。『フレデリカ』」

膝を付く二人の前で、大剣を掲げ大盾を構えた重騎士が、意気揚々と高らかに名を上げる。

「我が名は『フレデリカ・ガールハイト』、リーリヤ・ブレイメイヤ、先程の剛力の一撃実に美事! 流星はあの斧鉞の一撃!」

「喧しい奴だな」

「されど、我が聖盾に傷を与えるに能わず! 斧鉞の魔女よ! 我が聖剣の露と消え

よー」

「話を聞けよ」

重鎧を鳴らし、大剣を構えるフレデリカに、リーリヤは唐竹割りの一撃を放った。

「なんと！ なんと重い一撃か!？」

リーリヤ的にも、割りとイイ一撃だったのだが、フレデリカは片手持ちの大剣でそれを受けきった。

リーリヤが不愉快そうに眉間の皺を深くすると、アビゲイルが叫んだ。

「フレデリカ！」

「心配無用！ 友よ！ 正義は負けん……！」

フレデリカが大剣を振るい、大斧を弾くと、ボックスステップを入れ膝を付くアビゲイルを抱えた。

「おい、負けんのだろうが！」

「負けんが、友の為なら逃げる！」

「これをう、プレゼントオ！」

出遅れたリーリヤが、急ぎ三人を追うが、フレデリカが装備の割りに以外と速く、カタリーナの骨が行く先を塞ぐ。

「ちつ、ナディアア！」

「解つてる、解つてるさー！」

ナディアが三人を拘束しようと鎖を伸ばすが、細剣が鎖の束の集約点を貫き、鎖がバラける。

「アビゲイル！」

「ナディア・イヴエノヴァ、シルヴィア・クシャトロワは、今はお前達に預ける。だが、彼女は我々の悲願成就の為に貰うぞ……！」

アビゲイルの口がナディアに向けて動き、カタリーナの骨の群れが三人を飲み込み、リーリヤがその白山を砕いた時には、三人の姿は無かった。

「同志ナディア、戦況はどうかね？」

「將軍、將軍か。見ての通りさ」

ナディアが溜め息を吐き、砂粒と消えていく白山を見詰め呟いた。

「福音、福音を得るのは我々か。アビゲイル、お前らは何をしようとしているんだい？」

## 幕開け

## 魔導列車

金はあるところには、ホントにあるもんだ。

ウルレイカは改めて思った。

豪華な調度品、空調の効いた部屋、言えば何から何まで揃う環境、振動のほぼ無い車内。

世界最大国家である公国を横断する鉄道、その貴賓車にウルレイカは居た。

「ブルジョワー、ブルジョワジー」

「どうかしましたの？ ルーデルハイト」

「いや、だつてさあ、飛び入りでこれだよ？ ありえねー」

ウルレイカが口を横にして気怠気に抗議するが、菊代は何故抗議されているのか理解出来ていない顔で、首を傾げる。

「ルーデルハイトも大佐、佐官ならこのぐらゐの扱いはされているのでは？」

「まあ、扱いは悪くないけど、規律主義で年功序列などあるからさ。飛び入りだと、個室が取れるかどうか」

「そうですの」

「あく、ブルジョワー。いいなあ、おい。個室にソファ―にベッドに冷蔵庫、シャワーも完備。ボク住むここ」

ウルレイカがテーブルに伸び、だらしない態度を取る。

確かに良い部屋だが、菊代からしてみれば、あくまでも列車の貴賓車に過ぎない。

自室の方が遥かに寛げる。しかし、ウルレイカそうでもなさそうなので、菊代は彼女の部屋を想像してみた。

だが、すぐにやめた。他人の暮らしを詮索しても仕方が無いし、生活水準は人々だ。皆違っている。

「ああ、これが休みならどれだけよかったか……」

「実質、休みの様なものですわ」

「だけどさ、やる事がめんどいよ?」

「まあ、調査ですからね」

二人が調査に向かう先、それはある人物の生まれ故郷だ。

公国の東端にあるその小さな町、そこでその人物は生まれた。

「まさか、クシヤトロワ軍曹の故郷を調べる事になるとはね」

ウルレイカが僅かに揺れる車内で、茶を飲む。

あの会談での一件以来、シルヴィア・クシャトロワの重要度はね上がった。

ただでさえ、対ナジェーリア・リトリア用最終防衛魔女などと呼ばれ、微妙に重要視されていたのだが、今回の件でその重要度が国賓クラスになっていた。

「しかし、奴等は何故にクシャトロワ軍曹を？」

「ボクには分かんないよ。だけど、軍曹には何かがある。そういう事なんでしょ」

あの連中が、何故に彼女を欲するのか。

シルヴィア・クシャトロワ、彼女は魔女としても軍人としても、お世辞にも優秀とは言い難い。

しかし、

カタリーナ・フィーベル

アビゲイル・フランシア、

フレデリカ・ガードルハイト

この三人は彼女を狙い、会談に襲撃を掛けた。

彼女達は何者なのか。腕利きの魔女魔導師となれば、大なり小なり名前は知られるものだが、会談に集まっていた魔女の誰も、この三人を知らなかった上に、どこの国にも情報が存在しなかった。

無論、国に所属していない野良の魔女も数多く居るが、それでも情報を完全に隠蔽出

来る訳が無い。

「福音」の魔女に続き謎が増えたと、菊代は頭を抱えたが、ナジエーリアの部下であるナディアの予測では、これらは繋がっている。

「『福音』を得るのは自分達だ。そう言ったんだよね？」

「イヴエノヴァ中尉の話だと、そうですわ」

「イヴエノヴァが嘘を吐く理由は無いし、もし、その『福音』が『福音』の魔女を指してるなら、何故クシヤトロワ軍曹を狙う？」

「それを調べる為に、彼女の故郷に向かっていますの」

「知ってるー」

菊代が窓に目をやれば、外は視界の確保が困難な程に吹雪いていた。よくもまあ、こんな悪条件で走行が出来るものだと感心するが、万年雪に覆われた冬の大国の公国なら、これが普通なのかもしれない。

「そう言えば、リトリアは？」

「……何故、私に聞きますの？」

「え？ この部屋、ボクと菊代以外居ないじゃん」

「おば様なら、食堂車ですわ」

「相変わらずの食い道楽かー」

溜め息が出る。もう五十路が近いのに、あの食欲と食い意地は一体なんなのか。その癖、体型が一切崩れないのは何故なのか。

母に一度、

『どうして、おば様はあんなに食べるの?』

と、聞いてみたが、優しい顔で微笑まれて、頭を撫でられただけで終わった。

母も母で、中々に健啖家だったので、仲間意識があつたのだろうか?

「ま、菊代が旅行するのに、リトリアが付いてこない訳無いか」

「それ、どういう意味ですか?」

「ほら、リトリアって、菊代に対して構いたがりの構われたがりだから」

ナジエーリアは、親友の忘れ形見である菊代を、猫可愛がりしてくる節がある。

最近では、それが鬱陶しく感じる事もあるが、まったく構ってほしくないという訳でもないの、割りと微妙な気分にもなる。

「可愛がられときなつて、菊代。……まだ、立場ビミョーなんでしょ?」

「耳聡いのですのね?」

「まーねー」

天内菊代は対外的には、ネームドであり天内満代の後継と知られているが、神皇国内では、少々軽んじられている。



母である満代とは違い、目立った功績が少ないのだ。

他国のネームド魔女に勝利した事も少なく、特に圧倒したという訳でもない。

何か事件を解決した事も少ない。

無論、まったく無いという訳ではない。天内の家名は伊達ではなく、その家名に恥じない功績を挙げている。

だが、母の満代の功績にはまったく以て届かない。

満代が生きていた頃は、ナジーリアやイングヒルトにリーリヤ、様々なネームド魔女が、陸に空にと暴れていた時期でもあった為、功績を挙げるのに困らなかったと言われているが、それは満代が現行最強の魔女魔導師達を、正面から圧倒し振り伏せていたという事だ。

早い話、菊代は満代と比べられている。

自分は自分、母は母と、意識はしている。だがそれでも、そういった声を遮断出来る訳ではない。

「可愛がられてるって事は、期待されてるって事だよ」

「ルーデルハイトは、どうでしたの？」

「ボク？　ボクはてんでダメさ。単純な魔女としてだけなら、下手したらクシャトロワ軍曹とどっこいだよ？」

「そうですの……」

「聞いたいて、そんな顔しないでよ」

それに

「ボクは空が飛べたらそれで良かったし、周りはあまり気にしなかったなー  
あつけらんかんといい放つウルレイカに、菊代は苦笑が漏れる。

気を使われている。気のせいかもしれないが、余計な事を聞いてしまったかと気に病んだが、少し楽になった。

「……感謝しますわ」

「いいよいいよー」

軽い調子で気にするなど、テールブルにだらけながら手を振る。

緊張感が無いが、ウルレイカ・ルーデルハイトという魔女はこうなのだろう。

力を抜き、自然体で、空を飛ぶ。

それが、帝国最強の魔女の在り方。菊代には真似出来そうにない。

「つーか、吹雪スゴいな！ これで飛ぶのは、勘弁してほしいな」

「行き先はクシャトロワ軍曹の故郷ですよ？ 戦闘にはなりませんわ」

「油断はダメだよー、連中が先回りしてるかも？」

「有り得ますわね」

特にあの死霊術師。リーリヤの割碎で、体が形を成さなくなっても、それでもシルヴィアを求めている。

あの執念は一体なんなのか？

「考えても、埒が開きませんわね」

「お？ 食堂車行く？」

「昼食を戴きに行きますわ。ルーデルハイトは？」

「ボクも行くー」

菊代が立ち上がり、ウルレイカもそれに続く。

「そう言えば、ルーデルハイト」

「なに？ 菊代」

「この列車の主を知ってますの？」

「え？ リトリアじゃないの？ 將軍でしょ、あいつ？」

「おば様は貴族位は持ってませんのよ」

「じゃあ、誰？」

「公国の名家で、今回の事情を知っているのは？」

「まさか、ブレーメイヤ？」

「当たりだ。ルーデルハイト大佐」

ウルレイカが人物の名を口にすると、その件の人物であるリーリヤ・ブレーメイヤが姿を現す。

「うわ！ いきなり現れるなよ」

「気付け。私は隠密は得意じゃない」

「無茶言うなよ」

眇で見る長身は、何時もの軍服ではなく私服だった。

「また、えらく着飾ってるな？」

「似合わんと、正直に言え」

「なんで、その服装なんですの？」

豪華な飾りが施されたコート、生地も仕立ても最上級のものだろうと、素人目から見てもはつきり解るそれらは、残念だがリーリヤに似合っているとは言えなかった。

どうにも、着こなせておらず、慥然とした顔がそれを助長する。

「爺やと婆やが何を勘違いしたのか、これを押し付けてな。どうした、ルーデルハイト大佐」

事の経緯を説明しようとしたリーリヤを、目を丸くしたウルレイカが見詰めていた。

リーリヤはそんな彼女に問うと、

「いや、爺やと婆やって本当に言う奴、初めて見たからさ。お話の中の貴族だけかと

思つてた」

頭を軽く小突いた。

## 思いは

「調子はどうだ？ カタリナ」

「まあ、悪くないですよお」

「それはよかった」

煉瓦造りの建物で、アビゲイルが問うと、カタリーナは蜜色の肌を見せて笑う。

その身に以前リーリヤから受けた傷跡は無く、アビゲイルのよく知る彼女の姿があった。

「流石はリーリヤ・ブレーメイヤ。生半可な力では、押し潰されるか」

「アビイと私じゃああ、相性悪すぎですよお」

「案ずるな。次は私が相手をする」

簡素なシャツ姿のフレデリカが、木刀を片手に携え、手拭いで汗を拭っていた。

「彼奴めの剛力に相對出来るのは、私だけだろう」

「確かにな。だが、無理はするな。我々の目的は、奴らの打倒ではない」

「承知している。我らの目的は“奪還”だからな」

フレデリカが言うと、残る二人も頷く。

だが、三人の顔には自嘲の色があった。

「皆が聞いたらあ、呆れられますねえ……」

「で、済めばいいがな」

「我が師に知れたら、殺されるかもしれん、いや、殺される……」

溜め息を一つ吐き、フレデリカがテーブルに置いてあったボトルの封を開け口を付ける。

喉が乾いていたのだろう。一気に煽ると表情が消え、そのままに固まった。

アビゲイルが何事かと視線を向けると、フレデリカが待てと掌を立てる。

ややあつて、フレデリカが顔を上げ、喉を真っ直ぐに伸ばす。喉、食道、胃までが通され、

「ふっ……!」

腹式呼吸の要領で、ボトルの内容物を胃へと落とす。

「おい、フレデリカ」

「ああ、それ私のボトルウ」

「道理でな!」

目を閉じ、静止していたフレデリカが、カタリーナの言葉に手にしていたボトルを床に叩き付けた。

空洞の金属特有の反響音を響かせ、煉瓦造りの床を転がり、ボトルの底に残っていたゼリー状の物体が飛び出る。

アビゲイルが思わず距離を取ると、カタリーナが抗議の声を上げる。

「ああ、ヒドイい！ 折角手に入れた『ゼリーうどん』があー！」

「おい、なんだその奇っ怪なワードは？」

「神皇国の飲料メーカーがあ、老舗のうどん屋とコラボして出来たあ、新世代うどんですよ」

カタリーナがボトルを拾い、底に残っていないかと覗き込む。

しかし、残念ながら『ゼリーうどん』は残らず、フレデリカの胃と床に消えていた。

「もうう、やっと手に入れたのにい」

「喧しい。お前のその謎味覚はどうやったたら直るんだ？」

「生まれつきい、ですよ。というかあ、味はどうでしたあ？」

カタリーナの問いに、フレデリカが難しい表情を浮かべる。

今、フレデリカの胃に収まっている『ゼリーうどん』、単純な味としては、ちゃんとしたうどんだった。その味を単純に言うなら、鰹と昆布の合わせ出汁と淡口醤油の関西風。

ちゃんとしたうどんであつたらならば、まだ良かった。



しかし今回は「ゼリーうどん」、そう「ゼリーうどん」だったのだ。寒天で固まった液体うどん、フレデリカの評価ははつきり言って、

「不味い」

「えええ〜?」

「何故、驚く? 私でもゼリー状のうどんは嫌だ」

「アビイまでえ……」

「これを機に、お前の謎味覚直せ。な?」

フレデリカとアビゲイルが、カタリーナの肩に優しく手を置く。

そして、二人の目には簡単には言い表せぬ優しさという名の、強制力が宿っていた。

その目から逃げる様にして、カタリーナは話題を提供する。

「〃つぶつぶおはぎ〃は美味しかったでしょう?」

「ああ、餅米の粘る嫌なつぶつぶ感さえ無ければ、おしるこだったな」

選りに選って、カタリーナが鼻肩にしている同じ飲料メーカーが、老舗甘味屋とコラボした「つぶつぶおはぎ」を話題にした為、アビゲイルの指が蜜色の肌に食い込む。

「あ、あ、肩、取れえ……!」

「私達も強制はしたくない。だからな、お前の自主性に任せる」

「あああ、肩が肩があ……!」

被害者二人が万力の如く締め上げれば、情けない声をカタリーナが漏らす。

涙目になったカタリーナから手を離し、フレデリカはアビゲイルに向き直った。

「アビイ、シルヴィイは？」

「私より、カタリーナに聞いた方がいい」

「シルヴィイはあ、変わってませんでしたよお」

カタリーナは目を細め、何かを懐かしむ様に語った。

「家事が得意なのもう、私の骨を怖がつてえ、頭を抱えて隠れるのもう、何も変わって

ませんでしたあ」

「虐げられているという事は無かったか？」

「それは無い。『鉄鎖』の魔女ナディア・イヴエノヴァが、箱入り娘と表現していたからな」

「その魔女は信用出来るのか？」

「出来るさ。私の事を、ちゃんと愛されて育った子だと言ってくれたよ」

アビゲイルが腰に差した細剣の柄を撫でる。

装飾も最低限、実用性を求めたそれは、鉄と革の擦れる音を僅かに立てた。

「そうか。……ますます、やり辛くなるな」

「だが、そうも言ってられん」

「そうですよう。私達は取り返すんですよう」

どうにもならない。答えは既に出ているし、出している。

「しかし、先走り過ぎてもいかん」

「そうだな。……ベアトリーチエ」をあまり怒らせたくない」

「長いですからねえ……」

カタリーナがいつの間にもやら、新しいボトルを持ってきて開けていた。

どどめ色の液体が放つ不可思議な匂いが、アビゲイルの鼻に届く。

悪臭ではない。しかし、甘さと苦みとその他諸々がまぜこぜになった匂い。簡単に言

えば、鼻と目にクル。

「カタリーナ、お前なんだそれは？」

「『スポーツベリーコンスープ』ですよ」

手首のスナツプを効かせ、カタリーナの額をはたいた。

良い音が響き、カタリーナの衣装の飾り鈴が鳴る。

「……ベアトリーチエは？」

「『福音』の跡地の調査だ。万が一、テレジア・デイトリツシュが出てきても、奴な

ら対処出来るからな」

「あああ、アビイがヒドイい」

「お前は味覚を直せ」

ボトルの中身を啜るカタリーナを見て、アビゲイルとフレデリカは溜め息を吐いた。

## 白い町

その町は白かった。魔導列車から降りた菊代は、そう見えた。

辺り一面に白の雪が降り積もり、日々の生活が産み出す熱により、軒に積もった雪が溶け、氷柱となって垂れ下がっている。

どちらかと言えば、温暖な気候である神皇国では中々見られない光景だった。

「へく、結構賑わってるね」

「魔導列車が通り始めてから、人通りが増えまして」

「見給え、菊代。土産物が売ってるよ！」

ウルレイカがシルヴィアから、町の地理や気候を聞いている横で、ナジエーリアは土産物屋を指差していた。

「お婆様？ 駅前ですから、土産物は当たり前ですよ」

「分かってない、分かってないね菊代。旅の醍醐味は土産物屋の物色であるよ？ 嘗てはアレクセイと満代に詠えいと共に、土産物を漁ったものである」

母と、そして会った事の無い父の話を聞いて、菊代は心臓が跳ねる様な感覚を得た。

菊代にとって父の詠は、母の昔話か写真に写る誰かでしかなかった。優しげな垂れ気

味の目の男性が、桜並木で母と並んでいる写真。

母曰く、初めての逢い引きの時に撮った写真らしい。それが、菊代の記憶にある一番古い父との記憶になる。

「……詠は体が弱かったからね。神皇国から出る旅は出来なかったし、神皇国国内でも遠出は厳しかったよ」

「そうだったのですの？」

「それでも、詠は好奇心旺盛だね。ふふふ、懐かしいものである」

過去を懐かしむナジェーリアが、土産物屋の店先で紫煙を燻らせる。僅かに雪を乗せた風が、パイプから燻らせた紫煙を、その冷たさと共に連れて行く。

「おば様、御父様は……」

「菊代ー、リトリアーー！ そろそろ行くよー！」

ウルレイカの声に、菊代の言葉は消えた。

ナジェーリアの銀髪に、僅かに降る雪が触れていく。

「さて、菊代。行こうではないか」

「何処へ行きますの？」

「世界の真相、その末端である」

吹雪を思わせる銀髪を風に靡かせ、口の端にパイプを噛んだ笑みを菊代に向ける。

四十代には見えないナジエーリアの表情を、過去のまま現在に取り残された儂げな顔、菊代にはそう見えた。

「そういえば、同志リーリヤは何処かね？」

「あ？」

駅が見えなくなった頃、ナジエーリアがそう言った。

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

リーリヤは面倒だと感じた。己がこの田舎町に来たのは、一連の魔女に纏わる事象の調査であり、ブレーメイヤ家に対するごますりを聞きに来たのではない。

「あいつら、何処へ行った？」

ごますりを適当に聞き流し降り立った、本格的に雪の降り始めた駅前で、リーリヤは呟いた。

長閑な田舎町には似つかわしくない、豪華なコートを風に靡かせたリーリヤは、積もり始めた雪を踏み締め、大通りを進む。

この町は、シルヴィア・クシャトロワの故郷だ。特にこれといって、特筆すべき観光地も名産も何も無い。

「公国では珍しくもない町だ」

公国は国土が広く、地下資源も豊富だ。だがその反面、気候が寒冷を越えた極寒であり、万年雪に覆われている土地が殆んどだ。

「失業者は見当たらん」

町の規模に対して、大きい駅があるからか、この町に失業者は見当たらない。

宿泊施設や土産物屋、食事処。働く場所は、人口に対して多いだろう。

「平和な町だ……」

リーリヤは呟き、歩みを進めていく。

果たして、この町で一連の事象に関する事が、判明するのだろうか。

歴戦の魔女としての勘が、謎が深まる。そう告げている様な気がする。

「もし、そこの方」

「……私か？」

「はい」

考え歩んでいると、背後から声を掛けられる。リーリヤが振り向くと、ナジエーリアに似た銀髪の女が道端に立っていた。



「宜しければ、道をお尋ねしても？」

「済まんが、私も来たばかりだ。他を当たってくれ」

「そうでしたの。それは失礼しましたわ」

菊代というよりは、満代に似た喋り方だと、リーリヤは何故か思い出す。そう、似ているだけなのに、何故か二人が思い浮かぶ。

何故かと、リーリヤが眉をしかめていると、女は柔らかな微笑みを浮かべる。

「どうかなさいましたか？」

「いや、古い、友人の喋り方に似ているとな」

「あら、それはそれは」

どうにも、苦手な女だ。リーリヤは、先に行った馬鹿共を探そうと、女に背を向ける。「私の名前は『ベアトリーチェ・イオリア』と言いますの。……リーリヤ・ブレーメイヤ

少将」

「ああ？」

リーリヤが突然の名乗りと、呼び掛けに振り向くと、そこには雪を運ぶ風しか無く、女は痕跡すら残さず消えていた。

「て、居た居た。ブレーメイヤ、何してんのさ？」

「ルーデルハイトか。お前からこそ、何処へ行っていた」



「アップデートした覚えは無いのですが……」

「妾も無いぞ」

書籍、巻物、羊皮紙、有りとあらゆる記録媒体が埋め尽くす一室にて、テレジアとリユーヌはそんなやり取りをしていた。

「分体も一度に八体とはの。以前より二体増えとるのう」

「……陛下、まさかではあります」

「おう、ソッコで妾を疑うのやめよ。お主は原典が原典じゃから、強化しようにも、構成エーテルを弄るしかないぞ？」

「では、何故私の性能が上がったのでしょうか？」

リユーヌは魔導生物、魔導生物の強化は中々に難しく、一番手っ取り早いのが、その体を構成するエーテルを強化する事だが、それは人間に置き換えれば、いきなり血液の濃度を上げる様なものだ。

はつきり言つて、急激な強化は不可能に近い。

「体に違和感は無いのじゃな？」

「はい、これといつては、まあ、強いて言うなら、やはり調子がいいという事でしょうか」

「調子がいいのう」

テレジアが首を傾げ、リユーヌを見る。

身体的特徴は変わっていない。言ってしまったえば、内燃エーテルの流れが活性化しているだけだ。

「原因が解らぬし、今は静観かの？」

「はあ？」

ソファアに凭れ掛かり、テレジアが瞼を閉じようとした時、ふと机の上にあつた一枚の羊皮紙が、彼女の顔に覆い被さる。

「なんじゃ？ ただのメモ…… リュヌ！」

「は！ ンンに」

「ナジエーリア達と連絡を取れ！ 今すぐじゃ！」

「畏まりました」

リュヌに指示を出し、テレジアは一枚のメモ用紙を睨む。

「ただの迷信じゃと思っておったのだが……」

テレジアが掴むメモ用紙には、こう書かれていた。

『エーテル活性体の実在と危険性』

## 世界の末端

ウルレイカは久々に普通という感覚を得た。

普通の家、普通の庭、普通の煙突、帝国にもある普通の一般庶民の家だ。

「普通、普通だよ菊代」

「そうなんですの？」

「けえっ！ これだからセレブは……！」

「な、なんですの、その言い種は？」

ウルレイカが半ば吐き捨てる様に言うと、菊代が目を剥くが、ウルレイカは何処吹く風と口笛を鳴らす。

「うわあ、普通、普通だよ」

「あの、ルーデルハイト大佐。他が凄すぎるだけですからね」

シルヴィアの言葉に、ウルレイカは周囲を見る。

菊代、神皇国の巫女序列第一位の名門天内家当主、金持ち

リーリヤ、公国名門貴族当主で高級将官、金持ち

ナジェーリア、公国最強魔女で高級将官、金持ち

金持ちしか居ない。

「ブルジョワジー！」

「遂に頭がおかしくなつたか？」

「うっさい、金持ち！」

ウルレイカは帝国、公国に共通する煉瓦造りの一般的な一軒家の前で叫んだ。

ウルレイカ・ルーデルハイトは、一般庶民の出だ。

裕福ではないが、特に貧しくもない。そんな普通の出自。

軍属となり、帝国ネームド魔女にもなり、金回りは比較するのも馬鹿らしくなった。

だが、生来の富裕層には程遠く、そういった者達と関わり、己の出自を改めて自覚する。

「金持ちばっかかよー……」

「はっはっはっ、まったくその通りであるね」

「いや、リトリア。あんたもそうだよ」

「おや、私の出自を知つての事かね？」

「リトリアの？」

ウルレイカは思索し、隣の菊代を見る。

しかし、彼女も首を横に振るだけで、求めた答えは返つてこなかった。

ならばと、同じ国に所属し、同等の階級であるリーリヤに聞こうとするが、肝心の彼女は関わる気がないのか、さっさとクシャトロワ宅に入ってしまった。

「はっはっはっ、なに、そう気にする事ではないよ」

「いや、その言い方は気になる」

「ふむ、そうかね？」

口の端にパイプを噛み、ナジエーリアは紫煙を吐き出す。

白の雪に白の髪とコート、それに白い紫煙。肌も白く、パイプや軍服の黒が無ければ、ナジエーリアは白一色の女だ。

何時だったか菊代が、一言漏らしていた言葉を思い出す。白のコートと髪を吹雪に靡かせ進む背中、確かにそのまま白に消えてしまいうさだ。

「はっはっはっ、何をしているのかね？ 早く、入り給えよ」

「おぼ様、それはクシャトロワ軍曹の台詞では？」

菊代が疑問するが、彼女は意に介さず、パイプから燻らせた紫煙を、雪の中に吐き出した。

紫煙が雪の粒に巻かれて、消える。菊代は何故か、その光景に胸騒ぎを覚えた。

その雪の先に居るナジエーリアが、ぽつかりと開いた扉の中へと消えていく。それはまるで、また自分だけが置いて行かれるのではないか。

菊代は、そんな錯覚を覚えた。

「おぼ様」

不意に呟く。風の音に掻き消され、誰にも届かない。菊代は扉を潜った全員の背を追って、クシヤトロワ邸へと足を踏み入れた。

「あ、いらつしやいませ」

公国の家には標準の暖炉が、煌々と薪を燃やす部屋に、シルヴィアは部屋着で居た。

「気楽だね？ クシヤトロワ軍曹」

「いやあ、久しぶりに実家に帰ったものですから」

照れた様に頭を掻くシルヴィア、薪が火の中で弾ける音が聞こえる。

「そういえば、クシヤトロワ軍曹？」家族の方はいらつしやいませんの？」

「あ、私一人ですよ」

「え、実家に一人？」

「あ、私、両親を知らないんですよ。家族は亡くなった祖母だけでしたし」

なんとも軽い調子で、シルヴィアが生い立ちの一部を言い放った。あまりにも軽く言われた事実、全員が驚愕に目を剥く。

「おい、ナジェーリア」

「ふむ、彼女が天涯孤独の身であるという事は知っていたが、細かな事実は初耳である



よ」

「あ、あはは、き、聞かれませんでしたし、あまり言う回るのもですね……」

シルヴィアがあらぬ方角を見ながら、しどろもどろと言いつつ、黙って発言を続ける。

「か、隠してた訳じゃないですよ？」

「まあ、それはいいとして、軍曹は本当に両親を知らないの？」

「あ、はい。写真も無いですし、祖母に聞いても、知らないの一点張りでした……」

ウルレイカはリーリヤに目をやる。どうやら、彼女も似た事を考えている様だ。

シルヴィア・クシャトロワの両親は、この際どうでもいい。それより重要なのは、彼女の祖母だ。

「祖母殿は、どの様な人物だったのかね？」

「問答無用な人でした」

シルヴィアは即答した。

「祖母、ヴィレッタ・クシャトロワは、問答無用が人の姿になって歩いてる様な人でした」

「た、例えば？」

「学校で魔導授業を受けさせられて、結果はお察しでしたけど、何故か祖母が講師の顔面に膝を……」

「うわあ……」

ウルレイカが引いた。話を聞く限り、シルヴィアの祖母は中々に過激な人物だった様だ。

「他にも、私が近所のガキ大将に苛められていたら、エーテル弾を保護者の顔面に……」  
「祖母は魔女だったのか？」

「ああ、はい。みたいです」

リーリヤが記憶を漁るが、ヴィレッタ・クシャトロワという名の魔女は聞いた覚えが無かった。他、ウルレイカと菊代、ナジエーリアも同様に、シルヴィアの祖母は無名の、この町に憑いた魔女だったのだろう。

魔女は家と土地に憑く。国は、自国の魔女や魔導師の総数を把握する為に、魔女魔導師として活動を補佐する代わりに、国への帰属を求めた。

多くの魔女魔導師が、それに従ったが、古くから土地に憑いていた者達は、国へ帰属せずを貫いた。

「同志軍曹、一つ聞きたいのだが」

「なんででしょう？」

「何故、君の祖母殿は、魔導師講師の顔面に膝を？」

ナジエーリアはパイプを口の端に噛み、シルヴィアを見る。紫煙を吐くナジエーリアに、菊代が横目を向けるが、シルヴィアが文机に置かれた喫煙具を指し示す。

ナジエーリアのパイプとは違う。管に金具だけの、紙巻き煙草を差し込むタイプ。

古い、使い込まれたそれは、主無いままに古びた煙草と並んでいた。

「祖母も煙草好きでしたから」

「はっはっはっ、それはいいね。で、同志軍曹、答えは如何かね？」

「ああ、はい。どうやら、祖母は私を魔導に関わらせる気はなかった様でして、その話を通していたのに、講義に参加させた講師に……」

「ふむ、そうなのかね」

言って考え始める。紫煙を燻らせ、暖炉の火の熱を浴びながら、ナジエーリアは目を閉じた。

そして、片方だけ開き、菊代を見た。

「菊代、君はどうだったかね？」

「どう、とは？」

「満代には、どうだったかね？」

この中で、二世魔女は自分とリーリヤだけ。リーリヤはブレイメイヤ家の跡取りとして、自分は天内家の跡取りとして、強制された訳ではないが、自分から魔女としての道を選んだ。

他の道もあったが、菊代は<sup>魔女</sup>巫女としての道を選び、それに後悔は無い。

だとすれば、シルヴィア・クシャトロワはどうだったのか。

「私は自分で選びましたが、クシャトロワ軍曹は？」

「私は祖母が亡くなってから、食い扶持の為に士官学校に……」

「じゃあ、それまでは魔導には関わってないの？」

「はい、関わっていたのは、生活魔導くらいでした」

公国もだが、士官学校に入れば、生活は確保されるし、かなり少ないが給金も出る。

身寄りを失った者が選ぶ選択肢としては、至極まともな部類だ。

「だとすれば、同志軍曹。君の祖母殿は、何故に君を魔導から遠ざけていたのだろうね」  
ナジェーリアが紫煙を吐く先、文机にある古びたパイプの金具が、こちらを品定めする様に、暖炉の光を反射していた。

## 世界の真実

シルヴィア・クシャトロワの祖母は、何故に彼女を魔導から引き離そうとしたのか。ナジェーリアが指先で弄るパイプから燻る紫煙を眺めながら、菊代は頭を傾げた。

「単純に、才能が無かったからでは？」

「い、いきなり来ましたよ、この人……！」

「まあ、それもあるだろうね」

断言した上司に、シルヴィアが凄い顔を向けるが、当の上司であるナジェーリアは、知らぬ顔で紫煙を吐き出す。

暖炉の手前に陣取り、パイプを吹かす様子は、彼女自身の整った容姿と、不可思議な雰囲気も相俟って、実に様になっていた。

「しかし、である。本当に魔導の才能が無いなら、同志軍曹は何故、生活魔導の練達なのかね？」

「あ？ どういう事？」

シルヴィアが持ってきていた焼き菓子を齧りながら、ウルレイカが問うた。生活魔導とは、その名の通りに生活に根付いた魔導であり、誰にだって使える魔導だ。

現に、通常の魔女としては最底辺に位置するウルレイカも、魔導具を用いれば充分に上に扱える。

「魔女としての才能は無いだろう?」

「ぬあああ……! 中々来ますよこの人達……!」

「はっはっはっ、まあ落ち着き給えよ。私が言っているのは、何故に生活魔導の練達なのかであるよ」

リーリヤの額に青筋が浮かぶが、ナジエーリアは一向に気にせず、パイプを吹かす。

「生活魔導が幾ら安易で容易であつても、魔導の才能が無い同志軍曹が、何故に練達の域に達しているのか。反復や習慣では、説明出来ないのではないかね?」

「あの、練達と言われても、クシャトロワ軍曹がどの程度のものか、私達には検討がつかないんですよ?」

ふむ、とナジエーリアが頷き、シルヴィアに目配せをする。すると、ナジエーリアの前に灰皿が浮かぶ。

「二応、使い慣れた、馴染みがあるという縛りはありますが、生活に関係する家具類でしたら、その敷地内限定で自由に扱えます」

ナジエーリアに灰皿、リーリヤに茶、ウルレイカと菊代には追加の茶菓子。其々が茶器と皿に載り、三人の前に浮かび、テーブルに置かれる。

シルヴィアは、ダイニングキッチンから離れていない。家具類に流し込んだエーテルによる操作。菊代とリーリヤも家に人を雇っているが、これ程の操作能力を見たのは初めてだ。

「あ、もしかして、久しぶりに帰る家が綺麗だったのは」

「ああ、はい。先に帰って、掃除道具を全て操作して掃除してたんですよ。箒四本に雑巾、バケツにモップにブラシ、その他諸々久しぶりに動かししました。あ、お風呂もカビ取りまで済ませて、綺麗にしていますよ」

よく見れば、キッチンでは誰も触っていないのに、木べらが鍋をかき混ぜ、流しではまな板等の調理道具は、泡に塗れている。

「ここまでの事が出来る者に、果たして本当に魔導の才能が無いと、そう言えるのかね？」

「だが、それなら何故、彼女の祖母は魔導から引き離そうとした？」

「そう、そこが解らないのだよ」

灰皿に灰を落とし、ナジェーリアがリーリヤに視線を向ける。この煙草中年女とも、もう二十年近い付き合いになる。

解らない事だらけのこの女は、いつも己よりも先に行き、先に結論を出している。その女が、こちらに答えを求める時は、大概が厄介事か面倒事だ。

だが、リーリヤはその視線から逃げない。逃げれば、更に面倒事になるという事もあるが、逃げるという事は「国拓きのブレーメイヤ」として恥ずべき事だ。

「クシャトロワ軍曹に、何かあるという事だな？」

「恐らくはね」

燻らせる紫煙が、帯となり消えていく。

何か思案をしていたナジエーリアが、キツチンから出てきたシルヴィアを見た。

「同志軍曹、君は両親を知らないのだったね？」

「ええ、はい。両親に関しては、名前も教えてくれませんでした」

「それは、何故だろうね？」

「何故？」

菊代は考える。ナジエーリアの何故という言葉、それが何を意味するのか。シルヴィア・クシャトロワの祖母、ヴィレッタ・クシャトロワは、何故彼女に両親の名前すら教えなかったのか。

——凄まじく雑に考えた場合、忘れていたという事も……

まず、それは無いだろうが、僅かな可能性としては考慮すべきだろう。では、何故か。彼女の両親が、娘に教えたくない程に下衆だったから？

可能性としては有り得るが、少し弱い気がする。人の口に戸は立てられぬという。な



らば、そういった噂が、シルヴィアの耳に入ってもおかしくはない。

だが、彼女は両親の顔も名前も知らない。祖母が話をしなかっただけではない。それは、誰もが彼女の両親の話しなかった。そういう事になる。

彼女が聞かなかったという、可能性もある。だが、それでも誰もが話をしなかった、という可能性は有り得るのか。

否、有り得ない。

であるならば、それが指し示す意味は。

「可能性は二つ、祖母殿が口封じをしていた。そして、もう一つ、誰もが君の両親を知らなかった。つまりは、話したくても話せなかった」

「いやいや、それは無理がない?」

「だが、軍曹の情報はそれしか無い。まるで、最初から無かったかのような」

「だったらさ、ブレーメイヤ、リトリア。クシャトロワ軍曹は、何処から来たって言うのさ? まさか、見ず知らずの子供を誘拐して、だなんて時代遅れやったての?」

一同が頭を悩ませ、シルヴィアが状況に付いていけず、呆けた顔を晒す。自分の事だと、彼女は理解しているのだろうか。

「ふむり、兎に角、この事に関しては調査が必要であるね」

「まあ、そうだな」

茶を啜りながら、魔女達が頷く。兎に角、今は情報が無さすぎる。判断を下す事も出来ない。

疲れた溜め息が漏れた頃、魔導通信がナジェーリアの耳に飛び込んだ。

中年女？『ふむ、何かあったかね？ 同志少尉』

事務員？『あー、なーんかー、共ー和ー国からー、秘ー匿ー通ー信がー届いーてますー』  
共和国からの秘匿通信、そしてそれがシルヴィア・クシャトロワの運命を左右するものになるとは、この時誰も予想していなかった。

## それが真実なら

中年女? 『はて? 共和国からの秘匿通信かね?』

事務員? 『そーなんでーすよー、だからー代わーりまーすねー』

女帝? 『おら、早うせい! 妾を待たせるな!』

中年女? 『はっはっはっ、一体何事かね?』

女帝? 『ええい! 小娘、小娘はそこに居るのか?!』

中年女? 『小娘? 小娘とは、誰かね?』

魔導通信が、耳元で叫ぶ様に喚き散らす。ナジエーリアは、電話や通信を嫌う。首輪を着けられている様な気分になるし、居場所を特定されてしまう事が、何よりも嫌いだ。仕方無く持たされたこれだが、やはり好きにはなれそうにない。だって、喧しい声が耳元で、所構わず喚き散らすのだから。

女帝? 『ナジエーリア、妾を謀るか?』

中年女? 『はっはっはっ、固有名称を言い給えよ。我々が最年長だと気付いているかね?』

ナジエーリア、四十半ば

テレジア、今までの人生を加算すると、四桁近い  
つまり、

中年女？ 『言つてしまえば、私以外は全員小娘と呼べるのだよ……！』

女帝？ 『……！付きで言う様な事か！ ほれ、あの給士の小娘じゃ』

中年女？ 『ああ、同志軍曹の事であつたのかね。まったく、小娘小娘と連呼するから、とうとうボケたかと思つたではないか。居るが、どうかしたのかね？』

ナジーエリアがそう言うと、テレジアが甲高い声でナジーエリアの鼓膜を打撃した。

女帝？ 『ナジーエリア！ その小娘に繋げ！ 今すぐじゃ……』

そこまで聞こえたところで、エーテルの波長を断ち切り、パイプを吹かす。

周囲、シルヴィア達が怪訝な顔で、こちらを見てくる。

確かに、魔導通信は当事者同士にしか聞こえず、端から見ると、一人で耳を押さえて悶える中年女だ。

まったく、余計な事をしてくれたと、ナジーエリアが盛大な溜め息を、紫煙と共に吐き出す。

すると、クシヤトロワ宅の電話が、突如として喧しく鳴り始めた。

「うえっ！ 回線切つてるのに！」

シルヴィアが驚き、エーテルで操作している筈の柄で、電話機を軽く小突く。仮にも

魔女ならば、怪異の一つや二つ、笑って使役するくらいの事はしてほしいのだが、シルヴィアはソファーに隠れたままだ。

「ふむ、まったくしつこいね？」

「あの、おぼ様？ 一体何が？」

「はっはっはっ、テレジアの奴が妙なテンションでね。また何かしらクスリでも、やっていいるのではないかとね？」

「はい？」

「はっはっはっ、まったく何なんだろうね？」

喧しく喚く電話機、その受話器を手に取り、己の耳に当てるのではなく、そのまま電話機に立て掛ける。

そして

『ナジェーリア!! 貴様、覚悟は出来ておるのか?! おおん!』

「テレジア、よくここが解ったね？」

『あの間延びする喋りの部下に、貴様の行き先を聞いて、貴様のそのバカでかい内燃エンジン追って、その電話機に魔導通信を繋げただけじゃ!』

「態々説明有難う。で、要件は何かね? 私達はこれから茶の時間なのだが?」

『だから、クシャトロワとかいう小娘に繋げと……!』

「わ、私ですか?!」

ソファアールから飛び上がり、今では大分型遅れとなった電話機を見る。最近聞いた、高い声が僅かなノイズを含んで、受話器のスピーカから聞こえてきた。

『よしよしよし、小娘よ。端的に問うぞ。お主、リユージュに何をした?』  
「へ?」

言葉の意図が掴めず、シルヴィアは気の抜けた声を出した。周りも同じだ。少々世間知らずなところがある菊代は、

「ま、まさか、列車で読んだ週刊誌に書いてあつた三角関係ですか?」

「いや、菊代? 多分、というか絶対違うから。てか、あの週刊誌に書いてあるの、大半がネタか誇張だから」

興奮し、ウルレイカに宥められ、それを見ていたリーリヤは面倒臭そうに、浅い溜め息を吐いた。

シルヴィアは電話機に向こうの相手が、一体何を言いたいのか理解出来ない。共和国の侍女に何をしたらと問われても、逆に己に何が出来るのかと問い返したい。

下手をしなくても、其処らの子供に負ける可能性のある己が、世界でも有数のエーテル生物侍女に何が出来るのか。

「えつと? リユージュさんがどうかしたんですか?」

『どうしたもあるか。リユーンの性能が上がっておるのだ』

だからどうした。シルヴィアはそう言いたかったが、周囲のネームド魔女全員が、その雰囲気を変えた。

「テレジア、一体どうした？」

『それをこちらが問うておる！　いいか、小娘。嘘偽り無く答えよ。お主は何かしたか？』

何もした覚えが無い。というか、何かされそうになつていた記憶しかない。まず第一、話が見えなさすぎて、シルヴィアには何をどう答えたものか、判断がつかない。

シルヴィアが、返答に迷い固まっていると、受話器からもう一つの声が聞こえた。

『皆様、リユーン・テュレイルで御座います。この度は、不肖の身の事柄で皆様の御時間を割いてしまい、誠に申し訳御座いません』

「テュレイル、性能が上がったとか聞いたけど、どうしたの？」

『はい、以前より内燃エーテルの巡りが良く、分体も一度に八体まで機能させられます』  
「エーテル生物の貴様が、いきなり性能が上がるか。他に気になつた事は？」

『いえ、ブレーメイヤ様。特には。しかし、直近での変化と言われますと、やはりあの会合での、クシャトロワ様との接触かと』

リーリヤがシルヴィアを見る。だが仮に、彼女に何が出来るのかと、いざ考えてみる

と、何も出来ないが答えだ。というより、高濃度高密度のエーテルの塊であるエーテル生物の性能を、急激に上昇させるなど、リーリヤはおろか主であるテレジアにも不可能だ。

「あの陛下？ クシヤトロワ軍曹に、何か出来るのですの？」

「あの、さらつとガッツリくるの止めませんか？」

「だが、あの露出ピエロが何かしたとも考えられん」

「あれ死霊術師だったんでしょ？ エーテル生物のテュレイルをどうこう出来るの？」

「死霊術自体の文献が残されてませんから、何とも言い切れませんわ」

「だが、貫かれたのは分体だ。本体ではない」

情報を整理し、頭を捻る。あの死霊術師カタリーナが分体を貫いた際に、何かを仕掛けていたとしても、本体のエーテル濃度と分体のエーテル濃度とは、桁が違う。つまり、何かを仕掛けていたとしても、海に塩を撒くようなものだ。

その上、リユーヌは「沼」の魔女。異物を体内に取り込み、無力化するのとは彼女の十番。己の体に変調をもたらすものが入り込んでいて、気付かないとは考え難い。

それに敵であるリユーヌの性能を、上昇させる意味が解らない。

無言となった室内、そこに紫煙を吐く息が聞こえる。

「テレジア、何か隠してないかね？」



『仮説じゃからの。小娘を調べんと、はつきりとした事は言えん』  
じゃがの

『もしやすると、その小娘は世界を書き換えかねん存在やも知れぬ』  
「はえ？」

呆けたシルヴィアが、そんな声を溢した。

## それは如何に

世界を書き換えかねない存在。

そう言われて、咄嗟に思い付く人物や存在。菊代が思い付くのは実の母と、何があつても口にはしないが、もう一人の母とも言える人物、パイプを啜わえる変人だ。

「……ふむ、成る程」

その変人、ナジェーリア・リトリアが目を細めて、パイプを燻らせ頷く。普段の奇行や奇言で、そうは思えないが、仮にも世界最大国家最強の魔女。何か分かった事があつたのだろうか。

頷き、受話器を手に取り、本体に置き直した。

「まったく、またおかしなクスリを、やっていたみたいだね？ 彼奴には困つたものだね」

「怒られますのよー!!」

菊代が叫べば、また受話器が暴れだした。

溜め息混じりに、ウルレイカが受話器を手に取り、本体に立て掛ければ、低くなったテレジアの声音が聞こえる。

『……おうコラ、ナジエーリア？ 妾も気は長い方じやが、ここまで嘗めくさった態度じやと、すこーし考えがあるぞ？』

「はっはっはっ、今回は君が悪いよ？ 同志軍曹が世界を書き換えかねないなどと、何時かの君の様に、また怪しげなクスリに、手を出したと疑われても仕方がない」

受話器に紫煙を吹き掛け、パイプを口の端に啣わえる。年季の入ったそれは、暖炉を火を反射し、黒々と光る。

それを手で弄りながら、ナジエーリアは事態に追い付けていない、シルヴィアに目をやる。

——この娘が、世界を書き換える？——

何かの冗談だろう。この娘に、そんな大層な力があるとは、とてもではないが思えない。だが、リユーヌの性能が上昇し、そのリユーヌの最近で、何か変わった事と言えば、あの会合での襲撃。そこでのシルヴィアの護衛だろう。

しかし、あの会合での変事は、二人の魔女による襲撃のみ。

「同志軍曹が、ねえ？」

「え？ なんですこの空気？ わ、私だって、やる時はやるですよ!」

「そこで疑問系入るから、ダメなんだって、ボク思うな」

「言つてやるな、ルーデルハイト。……奴なりに必死なんだ」

ちらと、眇でナジエーリアに見られ、リーリヤとルーデルハイトからは憐れまれ、菊代はさっと目を逸らされた。

気まずい。今になって考えてみれば、自分以外は全員がネームド魔女の集団だった。平凡以下は自分だけ、これでは自分が何を言っても、ただのみそつかすの戯言にしかならない。だがそれよりも、受話器の向こうから、もたらされた話題の方が重要だ。

「そ、それで、世界を書き換えかねないって、どういう意味なんですすかよ?」

「言葉が乱れているよ。同志軍曹」

ナジエーリアは皆が思っているより、言葉遣いに厳しい時がある。多分、いいとこの出だからだろうが、リトリアという家は、彼女以外に聞いた事がなかった。

だからきつと、両親が厳しかったのだろう。だから、普段の奇行と奇言は、その反動なのだろう。

『……いまだ仮説の域を出んが、"エーテル活性体"という、正直な話、存在が眉唾なものじゃな』

「ああ? エーテル活性体だあ? あんなもん信じてたのか、デイトリツシュ公?」

「エーテル活性体? なにそれ?」

側の菊代を見るが、彼女も首を傾げている。ナジエーリアはパイプを燻らしながら、怪訝な目を受話器に向けていた。

知らぬのは、自分、シルヴィア、菊代。

知っているのは、テレジア、リーリヤ、ナジエーリア。

ある一定以上の世代が反応を示す単語、ウルレイカはエーテル通信を開き、身近な同年代の魔女に問う事にした。

荒鷲? 『ねえ、整備班長』

鉄火? 『あ? あ! おい小娘! お前いつ戻る?! カノン・フォーゲルの整備と調整が進まんだろうが!』

荒鷲? 『後で帰るから。今はほら、エーテル活性体つての教えてよ』

鉄火? 『エーテル活性体? また、変なもん覚ええたな。誰だ? ナジエーリアだな?』  
荒鷲? 『そこで迷わずトリリアの名前が出る辺り、昔から変わってないって理解出来るね。まあ、ちよつと今会議みたいなので、その単語が出てきてさ』

溜め息が聞こえた。

鉄火? 『いいか、ルーデルハイト大佐。エーテル活性体なんざ、信じる価値も無いガセだ。あんまり、若いうちから、んな与太話信じてると、碌な大人にならんぞ』

荒鷲? 『酷い言われようだあ。というかなんで、信じる価値も無いのさ?』

鉄火? 『あ? 簡単な話だ。不変不滅が絶対のエーテルの質と量を、思うままに活性

化させる。そんな有り得ん存在が、エーテル活性体だ。つうか、早く帰ってこい。お前が処理しなきゃならん書類が……』

そこまで聞いて、ウルレイカはエーテル通信を切った。

取り合えず、話を聞いて分かったのは、信じる価値も無い与太話だったという事。

だが、リユーヌの急激な性能上昇の理由にはなる。

「あの、デイトトリツシユ陛下？ エーテル活性体って、子供が信じるスゴい存在、みたいなものですよわね？」

『そうじゃな。その認識で間違っておらん』

「しかし、その様な話、信じられるのですか？」

『妾として、そのままを信じてはおらん。だがの、エーテル生物の性能を上げる。この意味が解るか？』

「……成る程」

エーテル生物の性能は、その成り立ちにより差は出るが、最大の上限が決まっている。人間などの生物とは違い、それ以上は強くなる事は無いし、弱くなる事も無い。その体を構成する、エーテルと同じく不変であり、活動を停止させられない限り不滅でもある。

そのエーテル生物である、リユーヌの性能が上昇した。

そして、それにシルヴィアが関わっているかもしれない。

「しかし、同志軍曹。何時の間に、そんなスゴ技を覚えたのかね？」

「え？ そんな子供でも解る、不可能パワーある訳無いじゃないですか」

「まあ、この仮説ぶつばなしたの、どんなすつとんきようだよって話だよね」

「私達の若い頃は、マジで信じる連中が湧いたな」

「ああ、確かにそうだったね。同志大尉の同期だったが、あの後、ちよつと脳の病院に

……」

『お主ら、遠回しに喧嘩売つとらんか？』

「でも、リユーヌさんの性能が、上昇したのは事実ですわ」

菊代の言葉に、シルヴィア以外の全員が頷き、彼女に視線を集中させる。

テレジアのエーテル活性体云々自体は、正直どうだっていい。本人も鵜呑みにしてい

る訳ではない。

だが、実際に起こり得ない事が起こり、それを起こし得たのは、彼女しか見当たらない。

「……解剖？」

「な、何か恐ろしい事言い出しましたよ……！」

ウルレイカの言葉に後退る。だが、その未来はあり得る未来だ。

「將軍、將軍助けてください！」

「はっはっはっ、同志軍曹。私の後ろに居給えよ」

シルヴィアがナジェーリアの背後に隠れると、彼女の銀髪が揺れた。

まったく手の掛かる、ナジェーリアは紫煙を、溜め息代わりに吐き出し、ふと部屋の隅にある作業机を見た。

なんの事はない。魔女魔導師の家になら、必ずある家具だ。そこには彼女の祖母の物だろう器材と、キセルと何かしらのケースが置かれている。

「時に同志軍曹、君の祖母殿は、如何様な魔導を得意としていたのかね？」

「へ？ 祖母なら、私と同じ生活魔導でしたよ。あ、あと占い」

「ふむ」

ナジェーリアが作業机に向かい、木製のケースを掴み、その蓋を外す。

「カード占いかね？」

「あ、はい。何処で手に入れたのか、出所がいまいち分からないんですけど……」

「確かに、見た事の無いカードだね」

菊代達に手渡し、検分させれば皆が頷いた。カード占いは王国と共和国で盛んだが、他の国にもあり、大体がその国の神話や、故事に倣った絵柄で、その組み合わせや位置の反転で占う。



だが、シルヴィアの祖母のカードは、そのどれでもなく、男が吊られていたり、やけに偉そうな衣裳の男や女、戦車に月や太陽といった、何を示しているのか理解出来ないものだった。

「見覚えのある者は居るかね？」

「見た事は無いな。軍曹」

「ひゃい！」

何故か囁んだシルヴィアが返事し、リーリヤが睨む。

「貴様の祖母は、何処でこれを手に入れた？」

「いや、それは私にも……」

「分からんか」

勘だが、恐らくこのカードが手掛かりになる。

両親を知らないシルヴィアの、唯一の肉親。その祖母が遺した謎のカード。可能性は高い。

『では、妾の方でもそのカードは調べてみるかの』

「テレジア、頼んだよ」

『まあ、期待せずに待つとれ。娘、己の事じゃ。己でも調べよ』

「は、はい！」

受話器からの声が途切れ、燃える薪の弾ける音が部屋に響いた。

ナジェーリアは手にした、襤褸を纏った骸骨が、長柄の大鎌を持ったカードを見て、

「まあ、あまり気分の良い絵柄ではないね」  
紫煙と共に呟いた。

しかしそれなら

取り敢えず、シルヴィアに関して、判明させなければならぬ事は解った。

「リユーヌの性能云々については、テレジアがどうにかするだろう」

ナジエーリアがティーカップを傾けながら、テーブルの上にある紙に、ペンを走らせる。

「まずは何故、同志軍曹が狙われたのか」

「人質にしては、異様に狙い打ちしてたよね」

「軍曹は、何か心当たりは？」

心当たりはと、聞かれてもシルヴィアにはそれらしいものは思い当たらない。

しかし、狙われていた事は事実。何か原因はないかと、考えを巡らせるが、その様な原因に皆目見当がつかない。

まず、途絶えた筈の死ネクロマンサー霊術師に狙われる理由というものを、はつきりと明確に教えて

欲しい。

それと、エーテル活性体という、とんでも科学の実体疑惑もどうかしてほしい。

というか、実家に国を滅ぼせる戦力が集結している現状を、誰かどうにかしてくれな

いだろうか。

まあ、どうにもならないから、現状があるのだが……。しかし、一つ、気になる事はあった。

「勘違いでしょうけど、いいですか？」

「ふむり、構わないとも。ほら、言ってみ給えよ」

「あの死霊術師、確かカタリーナ・フィーベルでしたっけ。私の事を知っている様な気がしたんですけど……」

「同士軍曹、それは本当かね？」

「た、多分？」

シルヴィアに確証は一つも無い。だが、あの死霊術師の道化が、何度か向けてきた視線は、敵対のそれよりも、もっと親愛のそれに近い、そんな色があった様な気がした。

「クシヤトロワは、どつかであれと会った覚えは？」

「ありませんよ。第一、会ってたら忘れませんよ」

「まあ、あのキャラなら、交流があったら忘れませんわね」

満代の言う通り、カタリーナのキャラは、一度会ったら中々忘れる事は無い。

それに、事前に会っていたならば、その時に狙いだとしていたシルヴィアを拐うなりすれば、あの様な大立廻をしなくてよかったのだ。

そして、こうやって油断させるのが目的なら、実行役にシルヴィアでは、少々どころではなく、力不足だ。

「まあ、そんな気がした程度の話なら、そんなに気にしなくてもよくない?」

「確かにな。あのクソガキは私が叩き割るから、気にしたところで無意味だ」

「いや、ブレーメイヤ。そうじゃない」

「しかし、留意はしておくべきであるね。恐らく、彼奴らの行動には、同士軍曹の出自が関わっている。情報の少ない今、砂粒の可能性でも切り捨てるのは、考えた方がよいだろうね」

パイプを弄りながら、ナジエーリアがそう言つて、(・ーωー)yーLくくといった形の紫煙を吹かす。

確かなエーテル操作技術の表れではあるのだが、彼女を知る満代からすると、(・ーωー)yーLくくのLの部分の造りが甘い様に見える。

「ナジエーリア、エーテルの練りが甘いぞ」  
「はっはっはっ、少々雑にやってしまったね」

そう言つて、ナジエーリアは紫煙を吹き消し、また新しく紫煙を燻らせる。

敵、として確認されているのは三人、カタリーナ・フィーベル、アビゲイル・フランシア、フレデリカ・ガーデルハイト。

現状、存在をはっきりと確認しているのは、この三人だが、実力に関しては問題はない。

今判っている範囲内でも、三人纏めてこの場に居るネームド一人で足りる。

なので、注意するべきは、連中が何を目的として、シルヴィアを欲していて、何時どの様にして現れるかだ。

「顔は割れているが、連中の居所が知れん」

「完全に未所属未発覚の魔女三人、見付けようとするなら、それなりに大変だよ？」

「まあ、その辺はテレジアの奴がどうにかするだろう。問題は、彼奴らがどういう存在なのか、である」

「お婆様、どういうとは？」

「ふむり、ならばこうしようか」

言って、ナジエーリアは深くパイプを吸うと、大量の紫煙を吐き出す。

すると、ナジエーリアが吐き出した紫煙は、見る間に形を変えていき、一枚の板の様に固まる。

そして、板の様に姿を変えた紫煙は、更に変化を加えていき、そこには文字が並んでいた。

「良いかね？　今、この場に居る者達はこうである」

公国？ナジェーリア・リトリア、リーリヤ・ブレーメイヤ、シルヴィア・クシャトロ  
ワ

神皇国？天内菊代

帝国？ウルレイカ・ルーデルハイト

「他にテレジアやリユーヌ、フレスアードも居るが、同志軍曹以外のネームドである」

「リトリア、それがどうしたのさ？」

「ルーデルハイト、彼奴らは全員がネームド以下だが、準ネームドではあつた。さて、それだけの実力者が、全く名前も知られずに居られるか？」

今の世界、実力のある魔女魔導師というのは、ほぼ確実に国や市町村に所属しており、大体の履歴等の問題の無い情報はある程度開示されている。

中には未所属の者も居るが、そういった者達は九割が変わり者か、碌でもない者だと知れわたっている。

だが、あの三人は実力は足りず、人格もそうとは言い切れない。何か事情があるのは確かだが、あの年齢で己の存在を隠しきれる様な権限があり、そしてそれを動かす為の根回しまで出来る様には見えない。

「となると、本人締め上げて、直接聞いた方が早そうだね」

「寧ろ、それしか無いな。しかし、リトリア」

「何かね？ 同志リーリヤ」

「連邦の阿呆どもの関与は考えているのか？」

「それに関してだがね。事が起これば、間違いなく首を突っ込んでくるだろうね」

「あ、ボクもそう思う」

「一応、連邦首脳部には、神皇国から警告を出してはいますが……」

「そうもいかないのが、あの世界の厄介者の新興国だ。」

「なまじ、資源と経済に優れている分、面倒になるくらいには人材を、山の様に抱えている。」

「そして、それらを増やそうと、世界に何か動きがある度に、それらに首を突っ込んで、事を掻き乱して利を得ている。」

「あの満代でさえ手を焼いた国が、世界が大きく動き出している今、何もしない筈が無い。」

「しかしまあ、連邦にも探りを入れるべきであるね」

「ナジーリアが紫煙と共に、その言葉を吐くと、名前に姿を変えていた紫煙も解ける。どうにも面倒な事ばかりだ。」

「ナジーリアはパイプの灰を灰皿に落としながら、ため息も落とし、」

「ああ、そう言えば、クシャトロワ軍曹」



「はい、なんででしょうか？ ブレーメイヤ少将」

「ベアトリーチエ・イオリア、この名に聞き覚えはあるか？」

「ベアトリーチエ・イオリア、ですか？」

「ブレーメイヤ、誰それ？」

「お前と合流する寸前に、道を尋ねられてな。妙に気になった」

あれは何故だろう。

特に容姿に気になる要素は無く、強いて言うなら話し方が、菊代に似ていた。ただそれだけだった筈、なのに今のリーリヤには、あの女が気掛かりでならない。

「ふむ、どうかね？ 同志軍曹」

「んー……、聞き覚えというより、何か見覚えがある様な無い様な、でも昔、祖母に怒られた時に、イオリアがどうか言っていた様な記憶が……」

「つまり、軍曹もよく覚えていないけれども、うっすらと記憶がある、と？」

菊代がそう言うと、シルヴィアは釈然とはしないが頷く。

記憶が薄いという事は、恐らくは相当に幼い頃の記憶だろう。記憶を辿る魔導も有るには有るが、あれを行使するには、公的機関で最低でも四人以上の、第三者の魔女魔導師の、監視の元でしか行えない。

しかも、それを行う為にも、非常に煩雑で面倒な手続きを、大量にこなさなければな

らない。

「えらい剣幕で怒られた記憶はあるんですが、なんで怒られたのか、それがさっぱりです」

「であるならば、調査の基本である」

新しく刻み煙草を詰めたパイプに火を点け、ナジエーリアがコートの内ポケットから、何故持っているのか、いやにそれらしい虫眼鏡を取り出す。

「おば様。調査の基本とは？」

「はっはっはっ、菊代。調査の基本は足、つまりは聞き込みであるよ」

虫眼鏡で菊代を覗き込みながら、ナジエーリアは笑いながらそう言った。